長野県松本市女鳥羽川遺跡
緊急発掘調査報告書

昭和45年度

1972. 3

長野県奈良井川改良事務所
長野県松本市教育委員会

序

昭和４５年度河川改修事業の一環として、一級河川女鳥羽川の松本市内元町地籍で護岸工事を県工事として実施していたところ、昭和４５年１０月中旬に附近河床に範囲不明の重要遺跡のあることが東筑摩郡・松本市・塩尻市誌編纂会ならびに、松本市教育委員会の現地調査により判明した。

工事実施区間内においての、全く予想し得なかった遺跡の発見であったが、当該工事が年度内に円滑に完了することと、遺跡発掘記録保存とを計るため、急きょ市教委に委託することとした。さらに市教委より委嘱をうけた調査団は年末寒冷のなかを、所定の期間内に誠意ある調査を完了され、ここに発掘資料により報告書の刊行をみることとなった訳でまことに御同慶に堪えない。

おわりに、今次調査を実施するにあたり各方面より寄せられた絶大なる御協力に深謝して序文とする。

昭和47年1月10日

長野県奈良井川改良事務所長

藤　田　佳　男

序

1昨年秋、奈良井川改良工事事務所の所管による長野県中小河川改良工事女鳥羽川護岸工事実施中、はからずも女鳥羽川の河床より縄文後晩期の遺跡が発見されたことが報じられた。

教育委員会はその事実を奈良井川改良工事事務所に報じ、遺跡の発見届を文化庁に提出するとともに奈良井川改良工事事務所と緊急打合せをし、同所の依頼により緊急発掘調査の実務を主管することとなった。

時あだかも年末繁忙の際であったが、工事進行の上からは一刻もゆるがせにできぬので、松本市教育委員会嘱託原嘉藤氏に調査団の編成を依頼し直ちに発掘に着手していただいた。調査団は考古・古生物・地学等各方面の委員をもって構成され、奈良井川改良工事事務所当局の機械力の応援もあって、所定の期間に発掘作業を終り、多量の遺物の採り上げがされ、その結果が関係委員の手により処理され、今次の刊行がなされることとなった。

ここに今次調査に協力された各調査委員、執筆に当られた各位に対し心からの謝意を表して序とする。

昭和47年1月10日

松本市教育委員会教育長
大　和　良　平

例　　言

1. 本書は昭和４５年度女鳥羽川改修護岸事業中発見された松本市女鳥羽川遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

   発掘調査は長野県奈良井川改良事務所及び松本市教育委員会が主催者となって行なった。

2. 本書は原嘉藤・藤沢宗平の企画のもとに調査委員全員が分担執筆したが、全体にわたり上記２名が補筆修正を行ない、用語等の統一を計ったが、期日の関係で充分とはいいがたい。各項の末尾に責任の所在を明らかにするため、執筆者名を記した。

3. 図版・挿図の作製は執筆者各自があたったが、写真は主に小松虔、実測図は小松虔・土屋長久が主となり加筆補正して統一を計った。なお、信州大学学生白沢幸男、百瀬新治、白田武正氏等の協力を得た。

4. 本書の編集は、原嘉藤・小松虔がもっぱらあたった。

5. 本書に記載した女鳥羽川遺跡出土遺物は松本市教育委員会の責任において、日本民俗資料館に保管されている。

目　　次

序 …… 長野県奈良井川改良事務所長　藤田佳男　1
序 …… 長野県松本市教育委員会教育長　大和良平　2
例言 …… 3
本文目次・図版目次・挿図目次 …… 4

第1章　調査経過 …… 原嘉藤　9
　第1節　調査実施に至る経過 …… 9
　第2節　調査団の結成 …… 9
　第3節　調査期間と調査地域 …… 11
　第4節　調査日誌 …… 11

第2章　遺跡の位置と環境 …… 原嘉藤　14

第3章　調査概要 …… 16
　第1節　第1地区 …… 16
　　(1)　Aトレンチ・Eトレンチ …… 中島豊晴　16
　　(2)　Bトレンチ・Fトレンチ …… 樋口昇一　18
　　(3)　Cトレンチ …… 樋口昇一・土屋長久　21
　　(4)　Dトレンチ …… 大久保知巳・神沢昌二郎　22
　　(5)　Gトレンチ …… 大久保知巳・神沢昌二郎　24
　第2節　第2地区 …… 太田喜幸・山田瑞穂　25

第4章　遺物 …… 28
　第1節　縄文土器及び土製品 …… 樋口昇一　28
　　(1)　第1類土器 …… 28
　　(2)　第2類土器 …… 36
　　(3)　第3類土器 …… 37
　　(4)　第4類土器 …… 39
　　(5)　第5類土器 …… 41
　　(6)　第6類土器 …… 41
　　(7)　第7類土器 …… 41

(8) 第８類土器 …… 41
(9) 第９類土器 …… 41
(10) 第１０類土器 …… 42
(11) 第１１類土器 …… 42
(12) 土製品 …… 46
第２節 石器及び石製品 …… 小松虔 51
第３節 土師器 …… 土屋長久 56
第４節 木製遺物 …… 倉科明正 59
第５節 骨器 …… 61
第６節 自然遺物 …… 小松虔 62

第５章 地学的調査 …… 平林照雄 66
第１節 自然環境 …… 66
(1) 松本盆地の堆積物 …… 66
(2) 深志盆地周辺の地質 …… 68
第２節 地学的考察 …… 69
(1) 概要 …… 69
(2) 女鳥羽川と堆積物 …… 69
(3) 女鳥羽川現河床礫層 …… 71
(4) 深志砂泥層 …… 73
(5) 深志礫層 …… 77
(6) あとがき …… 79
追補 …… 80
(1) X線の分析の結果 …… 80
(2) 珪藻分析の結果 …… 80

第６章 総括と考察 …… 82
第１節 総括 …… 原嘉藤 82
(1) 遺跡の状態と種類 …… 82
(2) 遺物の出土状態と種類 …… 82
第２節 考察 …… 藤沢宗平 84

編集後記 …… 原嘉藤 89

図　版　目　次

図版　1　遺　跡　全　景
　　（上）第1地区・（下）第2地区
図版　2　A3・5地区遺物出土状態
　　（上）A3区土偶出土状態・（下）A5区土師器高杯出土状態
図版　3　A・Eトレンチ発見集石址
　　（上）集石址全景・（下）同上部分
図版　4　C・D地区遺物出土状態
　　（上）C5区土製耳飾出土状態・（下）D1区遺物包含状態
図版　5　B・Fトレンチ発見溝状遺構（東より）
図版　6　杭及び木製品出土状態
　　（上）A7区杭及び木材出土状態・（下）F4区木製品（№22）出土状態
図版　7　B・Fトレンチ溝状遺構内遺物出土状態
　　（上）土師器と杭・（中）F2区木材（№38）・（下）F5区杭（№12）
図版　8　縄　文　土　器（その1）
図版　9　縄　文　土　器（その2）
図版10　縄　文　土　器（その3）
図版11　縄　文　土　器（その4）
図版12　縄　文　土　器（その5）
図版13　縄　文　土　器（その6）
図版14　縄　文　土　器（その7）
図版15　縄　文　土　器（その8）
図版16　縄　文　土　器（その9）
図版17　縄　文　土　器（底部網代底）
図版18　A3区及び付近発見の土偶
　　（上）A3区発見の土偶の胴部・（下）同付近発見土偶頭部
図版19　土製品及び土器
図版20　土　製　円　盤
図版21　石　器　（その1）（石鏃・石錐・石槍・他）
図版22　石　器　（その2）（打製石斧・磨製石斧・他）
図版23　石　器　（その3）（凹石・磨石）
図版24　石　器　（その4）（石刀・砥石）
図版25　動物遺体（その1）（獣骨・獣角）
図版26　動物遺体（その2）（骨角器）
図版27　自然遺物（クルミ・ヒサゴ）

挿　図　目　次

第１図　女鳥羽川遺跡を中心とする縄文遺跡分布図（1：50000）…… 10
第２図　遺跡付近全体図（1：1600）…… 12
第３図　第Ⅰ地区の発掘状況 …… 13
第４図　第Ⅱ地区の発掘状況 …… 13
第５図　調査地区全体図（1：300）…… 15
第６図　A・Eトレンチ集石址実測図（1：50）…… 17
第７図　B・Fトレンチ溝状遺構実測図（1：80）…… 19
第８図　B・Fトレンチ遺物出土状態 …… 20
第９図　Cトレンチ遺物出土分布図（1：50）…… 21
第10図　D・Gトレンチ遺物出土分布図（1：50）…… 22
第11図　第Ⅰ地区A～Fトレンチ地層実測図（1：80）…… 24
第12図　第Ⅰ地区Hトレンチ地層実測図（1：80）…… 25
第13図　第Ⅱ地区Aトレンチ地層実測図（1：80）…… 26
第14図　縄文土器拓影（その1）（1：3）…… 29
第15図　縄文土器拓影（その2）（1：3）…… 30
第16図　縄文土器拓影（その3）（1：3）…… 31
第17図　縄文土器拓影（その4）（1：3）…… 32
第18図　縄文土器拓影（その5）（1：3）…… 33
第19図　縄文土器拓影（その6）（1：3）…… 34
第20図　縄文土器拓影（その7）（1：5）…… 35
第21図　大型土偶および土製品実測図（1：3）…… 47
第22図　土製耳飾および土製品実測図（1：2）…… 48
第23図　土製円盤実測図（その1）（1：3）…… 49
第24図　土製円盤実測図（その2）（1：3）…… 50
第25図　石器実測図（その1）（1：2）…… 52
第26図　石器実測図（その2）（1：5）…… 53
第27図　石器実測図（その3）（1：5）…… 54
第28図　砥石および木製品実測図（1：2）…… 55
第29図　土師器実測図（1：5）…… 56
第30図　B・Fトレンチ発見土師器…… 58
第31図　骨製品および動物遺体実測図（1：2）…… 63
第32図　植物遺体実測図（1：2）…… 64
第33図　松本市街地付近の地形 …… 67
第34図　女鳥羽川遺跡地質断面図 …… 70
第35図　女鳥羽川東部河岸断面および珪藻顕微鏡写真…… 74

第１章　調　査　経　過

第１節　調査実施に至る経過

昭和４５年１０月１５日、奈良井川改良事務所の主管による中小河川改良工事女鳥羽川護岸工事の際、女鳥羽川の川底の右岸・左岸が掘り割られている現場調査のため、東筑摩郡・松本市・塩尻市誌編纂会の歴史部長原嘉藤は、同会地学班の委員である本郷小学校長太田守夫氏を伴ない調査中、右岸部から縄文土器の破片の地層混入を認め、現場の従業員にも事実をたしかめたところ、なお多くの遺物の混在を確認し、その後、松本市教育委員会社会教育課長加藤勝氏らの協力をえさらに、広汎囲にわたって調査したところ、各所に遺物の散布を発見、本格的な遺跡であることを確認した。よって昭和４５年１０月２１日付で県教育委員会担当主事の現地調査をうけ、工事施行者である長野県奈良井川改良事務所に緊急発掘調査の必要を申入れ、同事務所の申入れにより、市教育委員会が調査の依頼を承知し調査団の結成をした。

第２節　調査団の結成

団　長	東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会歴史部長	原　嘉藤
副団長	東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会歴史部考古班長、松本深志高等学校教諭	藤沢宗平
調査主任	松本市日本民俗資料館主事	小松　慶
調査委員	松本筑摩高等学校教諭	樋口昇一
〃	松本市役所水道課職員	神沢昌二郎
〃	東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会歴史部委員	倉科明正
〃	南安曇郡穂高高等学校教諭	中島豊晴
〃	南安曇郡穂高南小学校教諭	山田瑞穂
〃	南安曇郡豊科高等学校教諭	太田喜幸
〃	松本県ケ丘高等学校教諭	波多腰秀吾
〃	松本市鳥内国鉄職員	大久保知巳
〃	北佐久郡軽井沢町中軽井沢	土屋長久
〃	長野県教育センター専門主事	平林照雄
〃	東筑摩郡本郷小学校長	太田守夫
幹　事	松本市教育委員会社会教育課文化係長	田堂　明
〃	松本市教育委員会社会教育課主事	木下雅文
調査協力	松本深志高校地歴会考古班、松本県ケ丘高校風土研究部、南安曇郡豊科高校地歴ク	

第1図　女鳥羽川遺跡を中心とする縄文遺跡分布図（1：50000）

■松本城　1女鳥羽川遺跡　2丸の内日本銀行遺跡　3田町遺跡　4大村遺跡
5下浅間遺跡　6塩辛遺跡　7生妻遺跡　8宮淵本村遺跡　9寿の平遺跡
10塩倉遺跡　11松岡下り遺跡　12下平瀬八幡原遺跡　13北栗遺跡　14南栗遺跡

ラブ、中央大学学生

なお調査の進行について種々御協力願った方は次の方々であった。

松本市教育委員会社会教育課長	加藤勝
奈良井川改良事務所長	小林亮
〃 庶務課長	和沢道雄
〃 工務課長	望月晏
〃 庶務課 主事	沓掛邦夫
〃 工務課 技師	赤津寿康

第３節　調査期間と調査地域

調査の期間は次の通りである。

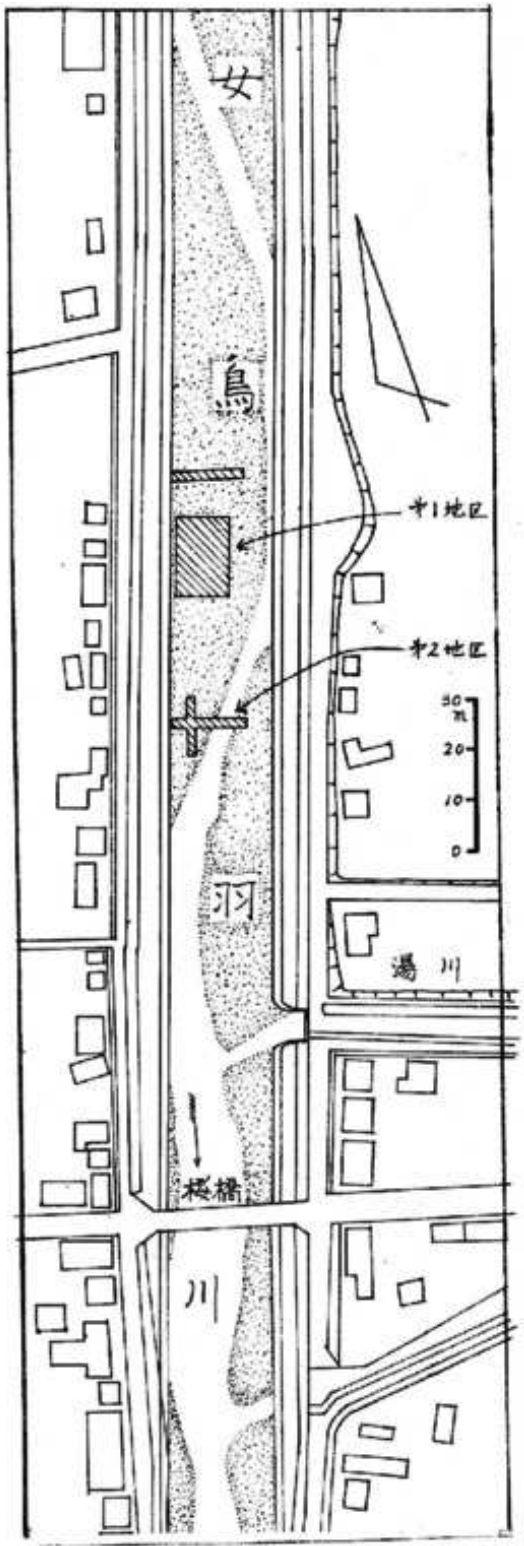
昭和４５年１２月２６日～３０日	発掘調査
昭和４５年１２月３１日～４６年２月中旬	遺物整理
昭和４６年３月以降	報告書執筆

調査地域は女鳥羽川護岸工事現場である松本市桜橋・元町橋の中間の河床部を直接対象とし、桜橋の北方約１３０mの最も多く遺物の散布していた部分を中心に発掘地区を設定し、まず南北に長さ１６mのトレンチを2条入れ、ブルトーザー等により表層の礫を除き、表面土層から遺物包含層に進み調査、またこの地帯の南２５mを隔てて、ここにも東西のトレンチを入れ同様調査を試みた。地区名は前者を第１地区、後者を第２地区とし、それぞれトレンチを入れ発掘した。さらにまた第１地区の北８mに河床の断面地層をみるための調査溝を掘り深め土層の重なり地下水の様子を調べた。なお調査は工事地区の全体に及び、また地学班は地域外の調査をさらに広くし、調査期間後にも及んだ。（図版１、第１図～５図）

第４節　調　査　日　誌

１２月２６日　曇　午後１時結団式のあと、第１地区にA・B・C・Dのトレンチを設定し分担をきめる。A－深志高生徒・藤沢委員、B－県ケ丘高生徒・樋口委員、C－中央大学生・神沢委員。午後２時ブルトーザーで調査地区の礫を除去。Aトレンチより縄文晩期の大形土偶を発見、Bトレンチ３～４区の間に土師器を発見した。CトレンチとDトレンチを河床を横断する形で設定し、上層の礫を除去、青灰色砂層の下の黒色腐蝕土層中より縄文後・晩期の土器片を採取、Dトレンチより土師器（和泉期）の破片採取。

１２月２７日　曇　C・Dトレンチに直交してE・Fトレンチを A・Bトレンチに接して設定発掘調査をはじめる。Dトレンチより石鏃・土器片・木製品等多量に発見、E・Fトレンチ中からは滑車状耳飾・石鏃・凹石・木片等発見、Bトレンチ６区では石刀先端部１箇発見、同６区・７区間より土師器壺発見。この日遺物の発見多し。長野県教育委員会社会教育課より樋原健指導主事視察。



第２図　遺跡付近全体図（1：1600）

１２月２８日　快晴　午前中土屋委員が全般的な出土遺物の位置測量を続ける。午後Ｇトレンチ設定、南方に第二地区を設ける。前日に続いて全面的に調査続行。本日はＤ・Ｇトレンチより土偶片・土製円盤・石鏃・石錐・木片・耳飾等あり、測量と遺物の取上げをする。Ｆトレンチからは小形土師器の堆出土。長野県文化財専門委員一志茂樹博士の現場視察あり。

１２月２９日　晴　各トレンチの詳細調査をする。集石部、第２地区ピットの掘下げを行なう。採取遺物はＤトレンチより石器・土器多量、第２地区よりは、クルミ・獣骨等の発見多し。平林照雄氏ら地学調査をする。

１２月３０日　晴　最終日につき全地区の発掘と測量を併行。遺物の取上げをする。土偶石剣・ヒサゴ等あり。なお、遺跡の地層を観察するため第１地区北側約１０ｍの地点にバウァーシャベルによる約３ｍの深い溝を掘る。一応Ｅトレンチとする。

１２月３１日　晴　市教委主事ら現場整理。

１月３日～２月中　出土遺物の水洗いと、記名を日本民俗資料館を借用して実施。小松委員担当、総点数６,５９５点の処理を終る。遺物は同館に保管を依頼し、復元処理を実施。

１月１０日　全員召集　検討会をし、報告書の執筆について相談をする。

２月１５日　生物遺体の一部を東京早稲田大学教授直良信夫博士の鑑定をうける。また他の生物遺体は信州大学医学部鈴木誠博士らの指導をうける。

２月２０日　泥土中の自然遺物・生物遺体について花粉分析等の処理を平林委員を

とおして金沢大学の藤　則雄氏に聴く。

3月1日　出土の木製品等の保存処理について東京国立博物館文化財研究所の岩崎友吉氏に意見を聴く。

第3図　第1地区の発掘状況

第4図　第2地区の発掘状況

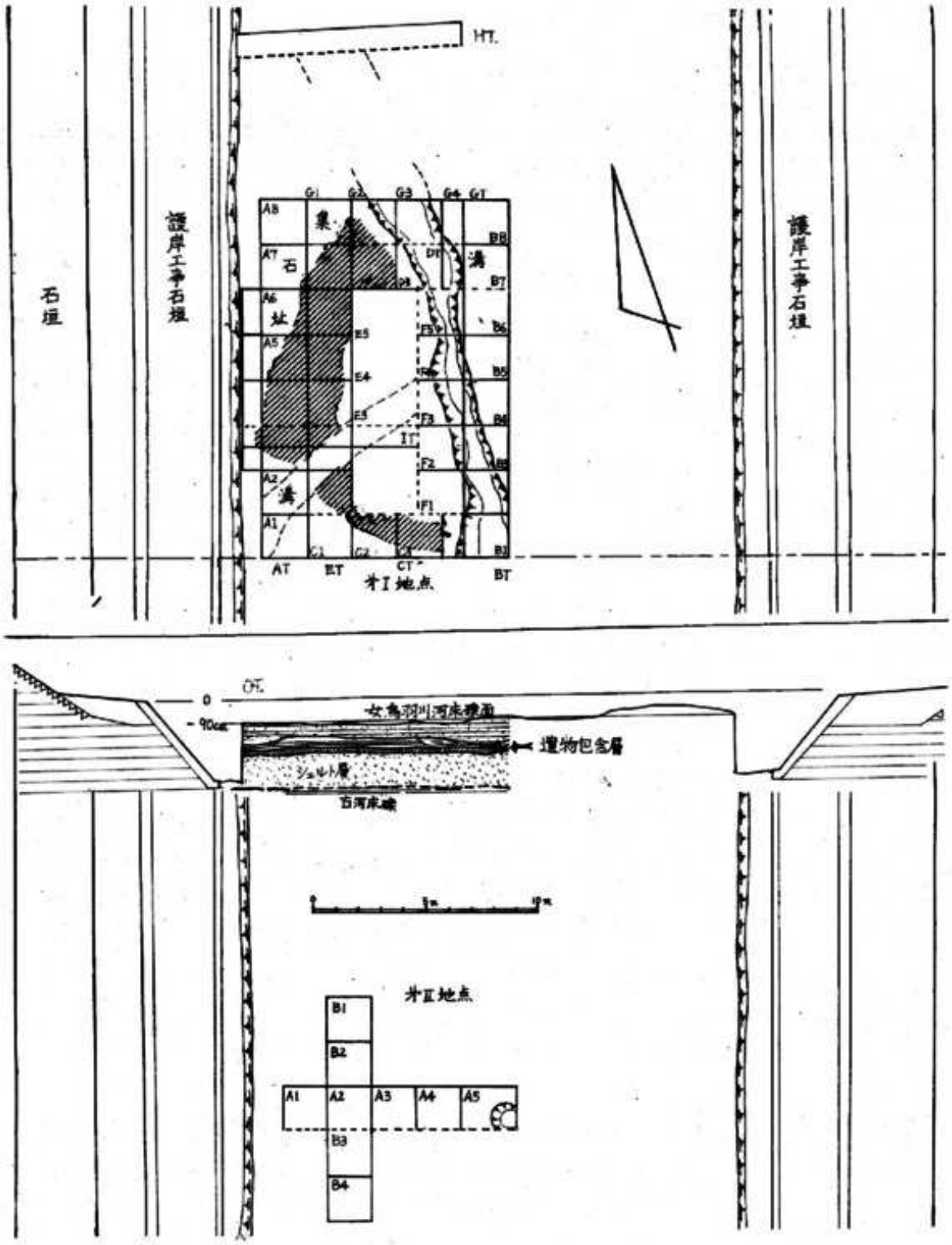
第２章　遺跡の位置と環境

地学的な位置環境については、第５章平林熙雄委員の報告にゆずり、ここでは考古学的遺跡の分布と状態について誌す。（図版１、第１～５図）

女鳥羽川遺跡は、松本市街部の東方を南に向けて流下する女鳥羽川の中流河床の中に発見された遺跡である。女鳥羽川は松本市街部の東をしばらく天井川の傾行をもって流下し、市街地中央部になって、流れの傾斜をゆるめ任任直角に折れて市街部を東西に横断し、田川に合しさらに奈良井川に合している。遺跡は標高６００ｍの線に近い桜橋の上（北）と、その上の橋である元町橋の中間にあり、現地表面から２ｍ余の下の河床よりなお２ｍから３ｍの箇所に遺物の包含層をもっている。河床下の遺跡として大変珍しい遺跡であるが、女鳥羽川水系の近くにはなお多くの縄文時代の遺跡が分布している。第１図①は女鳥羽川遺跡、②は女鳥羽川遺跡と同水系内にある丸の内日本銀行松本支店遺跡で①からは７５０ｍを距てているが、平林委員の言う旧深志湖の範囲で遺物出土の地層、遺物も全く同期のものである。なお③は同じく市街地ではあるが縄文中期の土器を主体とするもので標高も６００ｍを越え、旧深志湖の北の縁辺にあたり、①からの距離は１,０００ｍである。⑧は市街地の西端、奈良井川・田川（薄川・女鳥羽川）の合流地点に近く、旧深志湖の中にはいり、遺跡は縄文中期・後期・弥生・土師と複合している。①との直距離は２,３００ｍ、同じく旧深志湖の中にはいる。なお旧深志湖の中にはいるものには⑫の八幡原・⑬の北栗・⑭の南栗等があるがいずれも縄文中期のものである。その他女鳥羽川の縁辺の遺跡としては①の上流１,２５０ｍの④の大村、また２,０００ｍ上流の⑤の下浅間、⑪の松岡、４,５００ｍ上流の⑥の塩辛があるが、これらは旧深志湖外で縄文中期のものである。⑦の生妻は旧湖中をわずかにはずれた南部の遺跡であるが、この南東方面にかけて縄文以後の遺跡は多く分布している。⑨⑩⑪はともに旧深志湖北方の遺跡である。これらはいずれも縄文中期のものであるが、後・晩期に続く弥生・土師の遺跡は図示してないが、旧深志湖周辺の横田・惣社・県町・埋橋・筑摩・神田・出川・沢村・蟻ケ崎・宮渕・島内・島立方面にかけて非常に多くなっている。

こうした周辺遺跡の中で、最も女鳥羽川遺跡と近いものは、②の日銀松本支店跡のものであるが、これは新築工事の際の発見であり、かつ１０年程前のことであるので、縄文後期の土器と土器片・植物性炭化物・獣骨片等が暗黒色泥土中から発見されたことのみで本格的考察はされていない（遺物の１部は松本市城山倉田考古館にあり）。他は⑧の宮渕遺跡であるが地上散布その他により後期の土器片を得たにすぎず同例とは言えない。

以上本遺跡は河底遺跡として特異な例といえる。しかし縄文後期から晩期にかけては考古学上、地形・気候の変動等問題もあり、その立地環境の究明は今後に残された点が多く、今後低地帯での土木工事等により県下でも類例を増すことが予想され、本遺跡のもつ意味も今後に課題を残している。



第5図　調査区域全体図（1：300）

第３章　調　査　概　要

第１節　第　１　地　区

(1) Aトレンチ・Eトレンチ　（図版２・３・６、第６・１１図）

Aトレンチは本遺跡発見の動機をともなった土偶頭部（図版１８下、第２１図２）採集地点附近に設定された。即ち河川敷西側堤防壁端より東４mの所に堤防に平行して、巾２m×長さ１８mの南北のトレンチを作り、南端より２m間隔に区切って１～９区と呼んだ。しかし実際には埋土の関係などから６区までしか調査はできなかった。

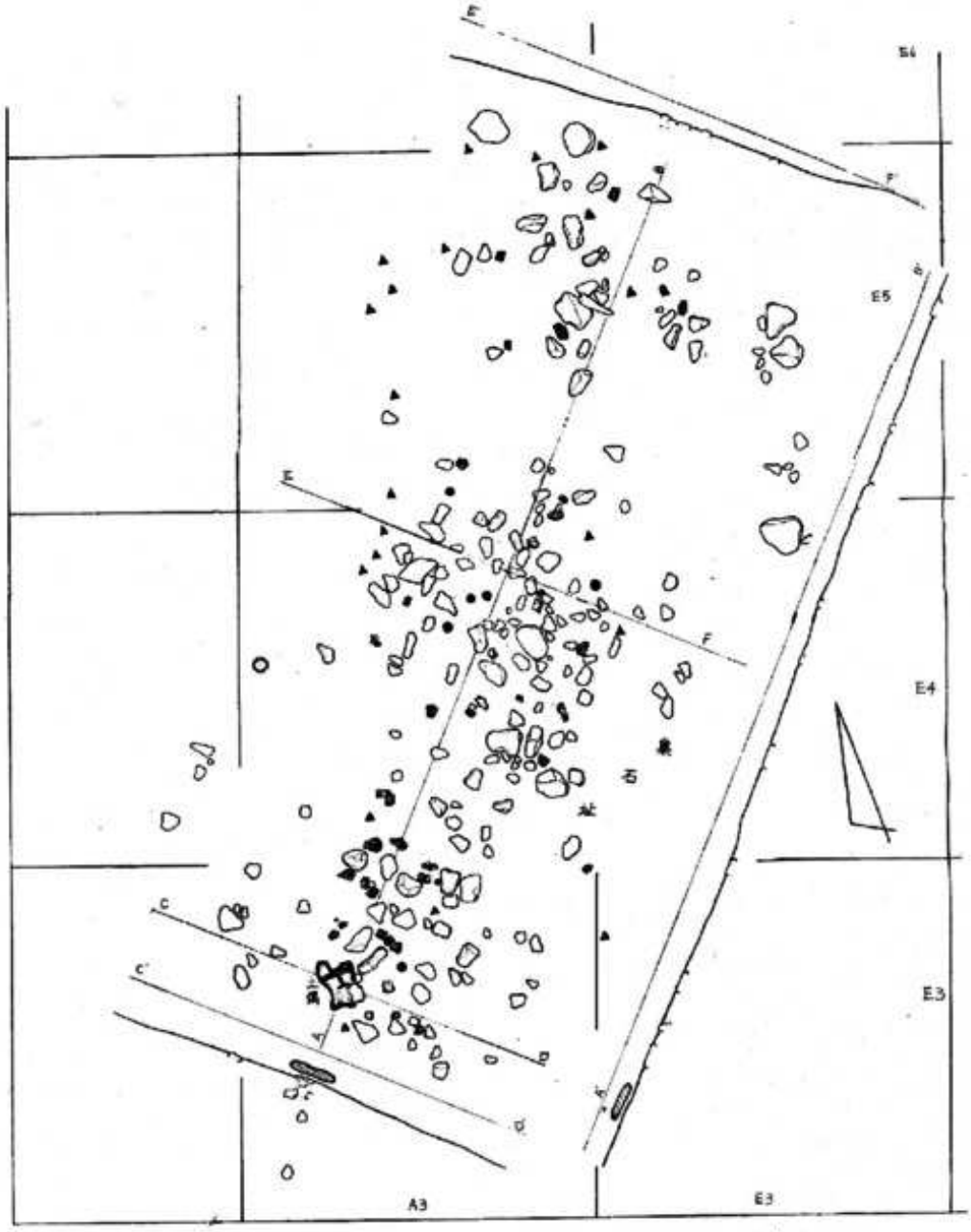
遺物出土状況と層序をみると、まず川床の砂礫層直下は黒色粘土層が約１５cm、次に青灰色の細砂を含む約１０cmの粘土層となるが、この２層には遺物は包含されてない。なお青灰色粘土層は腐蝕した草の茎、根毛等が平たく圧し潰され、黄褐色を呈し、細長い帯状をなし無数に混入されている。

次が川床砂礫層を入れると第４層となる黒色粘土層で、上述した植物腐蝕を含み、かつ遺物包含層である。厚さは５０cm～４０cmでその下半部に後述する集石址がほゞ水平に発見され、小破片となった縄文後・晩期土器や黒曜石剝片・石鏃などの遺物が大量に発見されたのである。

A１区・同２区は比較的遺物量少なく、特に２区では包含層が後代の約３０cm巾の溝状遺構で切断され、E２・３区へのびていたが時間の関係と集石地へ主力を移動したため調査はできなかった。一方A３区・４区・５区の３区より集石址が発見されたので、Aトレンチ東側に巾２m・長さ１０mのEトレンチをAにあわせて２区～６区まで拡張し、一方A３～７区間も西側に巾１.３m延長し、Aトレンチ拡張部と呼ぶことにした。こうして集石址のプランを追及するためEトレンチ、A拡張部とも集石址面まで掘り下げた。その結果、拡張部の西寄りは護岸工事で攪乱されており、惜しくも集石址周縁部の様相を明確にできなかったが、一応その拡がりや構造を把握することができたと考えられる。

さて、この集石址は、現況でプランをたどれば、(基点の決め方には調査員同志でも見解に相違があるが)、A４区と同５区の西側境界を基点として東西最長約４m、南北６.５mを計り、西部を一部切断された不整形の半楕円形となる。集石の状態は泥湿地のため粗密の部分も勿論一部にはあるが、ほゞ拳大前後の石塊（角礫を主とする）が同一平面上に雑然としながらも水平に敷かれていた。集石上面のみで約５００個を数える石塊であった。なおこの集石の厚みは約１０cm程度であった。

本址の直上や内部がいわゆる包含層で、直下になると減少するので、この集石址面を何らかの意味で生活面と考えてよいであろう。検出された遺物で特記すべきは、A３区の大型土偶（図版２上、第２１図１）で、首を西北にむけ（集石と平行）背中を上にうつ伏せの形で発見された。現存集石址からすれば中心部とはいえず、むしろその縁辺に近い。同種土偶首部（図版１８下、



第６図　Ａ，Ｅトレンチ集石址実測図（１：50）

第２１図２）の発見位置が不明なのは残念だが、本地点附近であることは間違いなく、両者が同一個体がどうかもやゝ判然としない現在、集石址内の出土位置のみで云々することは差控えたい。この他集石址全体（Ａ・Ｅトレンチ）からは約２０００片の縄文後晩期土器片の出土をみ、今回の調査の出土土器総数の約$\frac{1}{5}$強という比率を示す。ちなみに土器量の多い部分、即ち第１地点Ｃ・Ｄ・Ｇ、第２地区ともこれら類似した集石状態が確認されている。また土器以外にも土製耳飾・土器注口部・土製円盤、石鏃、打製・磨製の石斧、石錐・凹石、砥石等の土製品・石器、トチ・クルミなどの植物遺体も多く検出され、中で注意すべきは、石鏃の出土地点が、ほゞ集石の周縁にあること（図版３上、木片を立てた所がその位置）、及びＥ４区東南部集石周縁部で、８０

m平方にわたり、黒曜石の細片が密集して散乱しており、工作址とか何らかの意味を考慮させたことである。また、遺物の出土状態も集石間にはいったり、やゝ直上だったりするが、集石址を離れると次第に減少することも再記しておく。

次に集石址の拡がりと、B・Fトレンチに発見された古墳時代遺構との関係をみきわめるため、E3区東に1m巾の拡張部を、F2区に接続させて設定した。第11図 にみられる如く、集石址周縁はほゞE3・4区で終り、集石面のある包含層はE3拡張部でカーブをえがいて下降し、水平とはならない。そしてE拡張部の東半はこの縄文期の包含層を切断した河水の氾濫が礫層となって明瞭にのこっており、且つ内部から土師器片を数片出土し、B・Fトレンチ発見の古墳時代遺構との関係が明確とされた。

最後に一部分ではあるがA3・E3両区の集石址の下層及び上記E3拡張部のセクション掘りを行なう。集石はその下面がやはりほゞ水平で、石塊も整然と並べられておった。集石址下も黒色粘土層で約10cm位までは遺物の出土がみとめられたが、上面との時間的差は無文土器や小破片のため明瞭でない。この黒色粘土層下は再び青灰色粘土層が約30cmの厚さになり、以下黒色粘土層、青灰色粘土層と互層になっていたが、遺物は皆無であった。

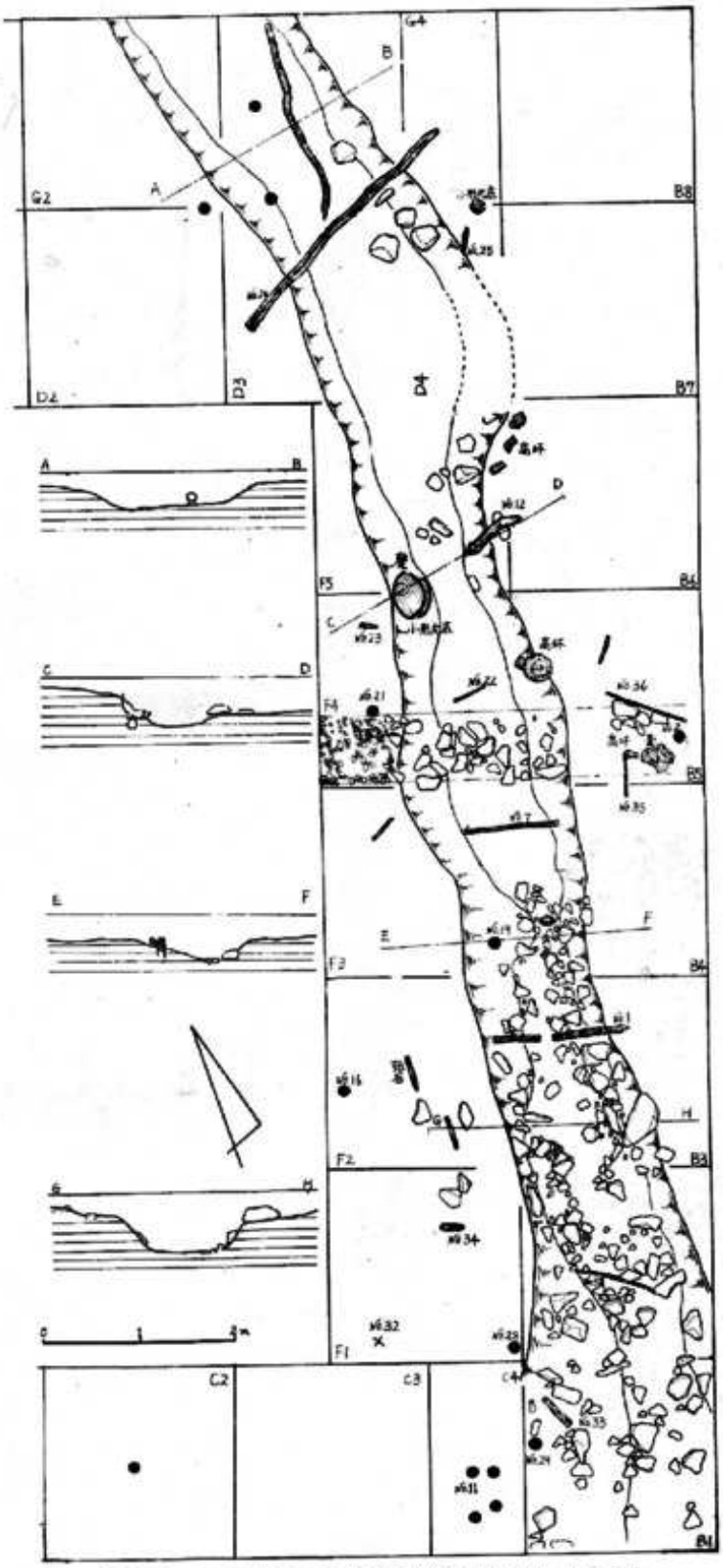
以上本遺跡を特色づけた集石址を中心に記述したが、これは縄文期遺物のみで他の混入は認められなかった。しかし集石址を伴わぬ部分、即ちA6・7拡張部のやゝ攪乱された地層内からは土師器（高坏脚）1片と杭の周りに放射状に材が5本（図版6上）発見されたことを付記したい。

（中島豊晴）

(2) Bトレンチ・Fトレンチ （図版5～7、第7・8・11・30図）

Aトレンチと平行に川に沿って2m×16mのBトレンチが始め設定された。Aトレンチとの間隔は7m、遺跡の広がりを究明するためである。その後、溝状遺構の発見によりEトレンチを西側に拡張（2×10m、F1～F5）した。南側より2m四方を1区としてB1からB8までの8区、F1からF5の5区となる。

B1からB8区まで、表土（河川敷）を削去すると、約15～25cm程で黒色粘土層（やゝ砂質強し）が現われる。しかし、B1地区及びB5～8地区付近はこの層はあまりみられず直接、青灰色粘土層が現われ、1方B2・B3両区の西側半分は黒色粘土層の落込みが顕著に認められ、ピットないし住居址遺構の存在を想定させたので、この黒色粘土層の広がりに調査の全力が注がれることとなった。そこで先記した如く、Bトレンチ西側にFトレンチを拡張設定した。その結果、F1・B2区からF5・B6・G3・G4各区にほぼ南北に連なる幅2m、深さ10～20cm程度の溝状遺構が発見されたのである。すなわちこの溝状遺構は本河川のひとつの基盤ともいうべき青灰色粘土層を削った自然流 ——その理由は、溝の底の層序がゆるい流れの中に起る堆積状況を示している—— と考えられ、南から北にわずかの傾斜を持っていた。溝の断面は、なべ底状ないし舟底状を呈し、青色粘土層を、深い部分で20cm、浅い部分で10cm程度えぐっていて、人工的な痕跡は認められなかった。なおこの溝状遺構南半部分には、溝底のみでなく溝外にも人頭大から拳大の河原石が、比較的多く存在したがその原因はよくわからない。さらに、この

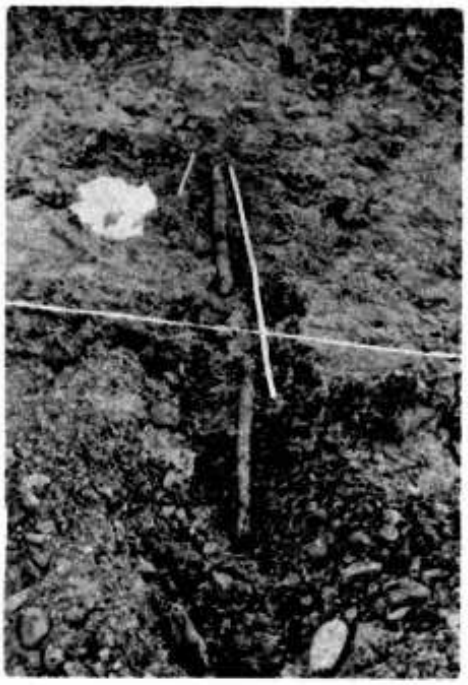


第7図　B，Fトレンチ溝状遺構実測図（１：８０）

溝を追求するために第１地点の北方１５m地点に幅１m、長さ２０mのHトレンチを設定し、パワーシャベルによる層位確認を実施した。その結果この溝は北に行くにつれやや幅を増しながらも連続して存在することが再確認された。（第１２図）　しかし、このHトレンチに属する部分までくると、溝は浅く、よどみ的な存在となるらしい。それは後述する遺物出土状態とならんで、この溝がA・F・D各トレンチ内部ではゆるやかな蛇行を示し、その北端Gトレンチ付近で、幅を増し、深さも浅くなっている事からもうなづけよう。

次にこの地区の遺物出土状態にふれてみよう。まず縄文式土器は先述した溝状遺構を被う黒色粘土層上部からB・Fトレンチあわせて１０数片出土したが、これは混入と考えてさしつかえないだろう。その理由は上部の黒色粘土層が溝状遺構形成以後、付近から流入し堆積したものであることが土層断面図で判明している。次に土師器は、こ

の黒色粘土層下部及び溝状遺構上面の青灰色粘土層付近にまとまって検出された。その出土状態は完形品はないが器形がわかるものが多く溝の内部例えば川底には破片が多く、溝の傾斜部分から甕1個体分、小形丸底壺（F4区）、高坏（B5区）等、さらに溝外からはB4区の高坏、甕等集中的に出土した観があった。なお、これらの出土土器が磨滅していない点も注意された。これは考察の項で述べる如く、器形や出土状態から、単なる埋没ではなく、ある意味を考える事も可能であった。その他同時代の砥石（F2区）（第17図1）も出土しているが土師器とならび溝状遺構を特殊づける木材の出土状態は、図版5（第7図）にみる如く、溝に直角に横たわるものや、水平になるもの、さらに、溝の壁に密着したもの、溝外に出るもの等、種々あり、概して溝内部は大形、溝外部は木片的なものが多かった。これ等木材には、自然流木や、人為的加工を加えたものがあり、例えば建築材の一部－板状・柱状のもの－等があり、さらにF4区からは、長さ43cmの笏に似た加工品（図版7中）や、B1区のスプーン状木製品等もあった。ただし、これ等の木製品は人為的に配置したり、設置したという状態というものは見受けられない。しかしながら、調査当初より注目あれた、クイは全部10本でありすべて青灰色粘土層にまでくいこんでおり、単なる自然状態のものであるかどうか調査時点でも諸説があった。残念なことにこれらのクイを全部抜き去る作業が時間がなくできず、先端部の状態が不明である。その配列状態は溝の中にあったり、外側にあったり、1ケで独立したり、数本がまとまったり、更に縄文期遺構の中にまで及んでいて、特に規則性は見出せない。直径6～8cm内外の丸材ということからも上に何かを構築する土台とは考えられず、さればとて構的な想定に根拠を与える資料も見出せない。



第8図　B・Fトレンチ遺物出土状態

いずれにしろ、この構との関係を明確にできなかったが、縄文期遺構との関係は余り積極的には考えられず、やはり、溝同様古墳時代として差しつかえないであろう。

以上B・Fトレンチは C・D・Gトレンチを含めて第1地区の縄文期に対し、古墳時代の遺構であることはまちがいない。再述するならば、この地域の遺跡形成は、縄文期の集石址を含む部分が、後年河川の流動によってその1部分を大きく削られ、そこへ古墳時代に自然流ができその周辺に人間の生活が営まれたことを示す根跡が判明したのである。そして再び河川の氾濫によって、縄文期遺構部分を含めて、埋もれたのである。その埋もれた時期については諸説があるがここでは埋没腐層の中からまめつした須恵器片、灰釉陶器等の小破片が混在していたことを付記したい。

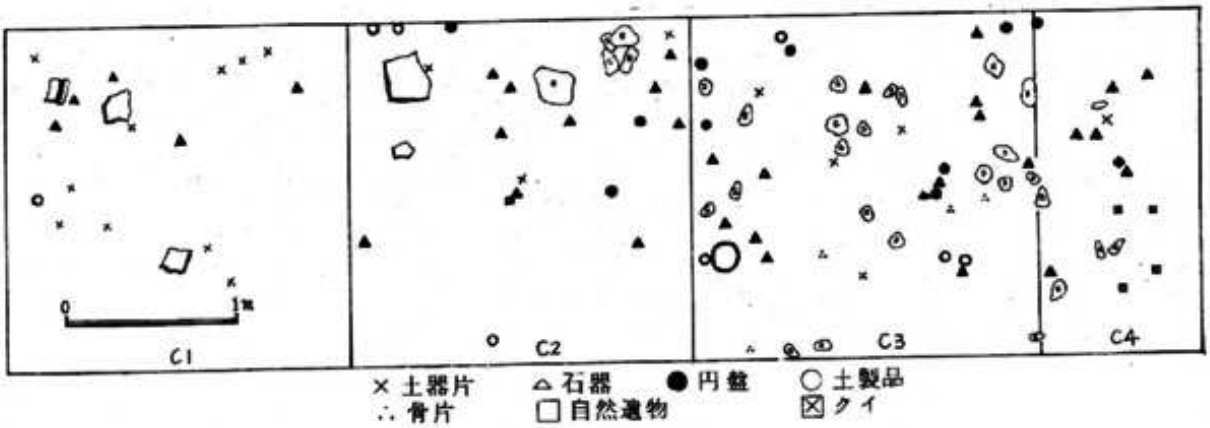
（樋口昇一）

(3) Cトレンチ　　（図版4上、第9・11図）

Cトレンチは A・Bトレンチの関係を知るべく、即ち調査範囲の南側を究明するため、東西方向に設けたものである。Aトレンチ1区、Bトレンチ1区をつなぐ巾2m、長さ7mのトレンチでA1区側からC1～C4区として、C4区のみ2m×1mの縮少区になる。

まず層序としては第11図 にみるごとく、第1層というべき現河床礫層（上部はブルトーザーにより除去されており、厚さは不明）、第2層として黒色粘土層15～20cm、その下に10cm前後の黒灰色粘土層が第3層となり、さらにその下部に第4層の青灰色粘土層がくる。この青灰色粘土層は1m以上の堆積があるが、その上部に遺物包含層がほゞトレンチ全体に水平に厚さ20～25cmにわたり存在していた。すなわち厳密にいうならば、第3層黒灰色粘土層の下に5～10cmの青灰色粘土層が堆積しており、その直下が包含層となり、さらにその下部に同じ青灰色粘土層が続くものである。ただしC3・C4区にはやゝ層序の乱れがあり、C4では後世の攪乱が包含層のごく上まで及んでおり酸化礫層が介在していた。この種酸化礫層はA1・A2・E2各区付近にも観察され、この部分では包含層を切っている部分もあり、遺跡形成後の攪乱が少なくなったことを想定させた。だが本トレンチの設定目標は一応包含層がA・Eトレンチ地点同様のほゞ水平レベルに存在したことを確認できたこと及びAトレンチの集石址同様の小礫と土器片、石器類の散在状態が確認され、さらにBトレンチとの関係はC4区での所見によれば、この縄文後・晩期の包含層がBトレンチの古墳時代溝（自然流）に切られている事実が確認できたのである。

次に遺物の出土状態について述べるならば、第9図に示す如く、全地区から土器片はもちろん、C3、C4区にやゝ多く石鏃、凹石等が検出された。土製品では土偶片、耳輪片等9、土製円盤70（有孔1）、その他クルミ実1、骨片4　が検出され、トレンチ中央と古墳時代溝に近く、クイ4本が青灰色粘土層に打たれ、遺物包含層から発見された。またCトレンチ包含層全般に、アシ様植物質の繊維が多く交ってみられた。しかし、遺物出土分布図からみれば、トレンチ全体の北側に濃密で、これは集石の状態も同じ様相を示している点注意された。



第9図　Cトレンチ遺物出土分布図（1：50）

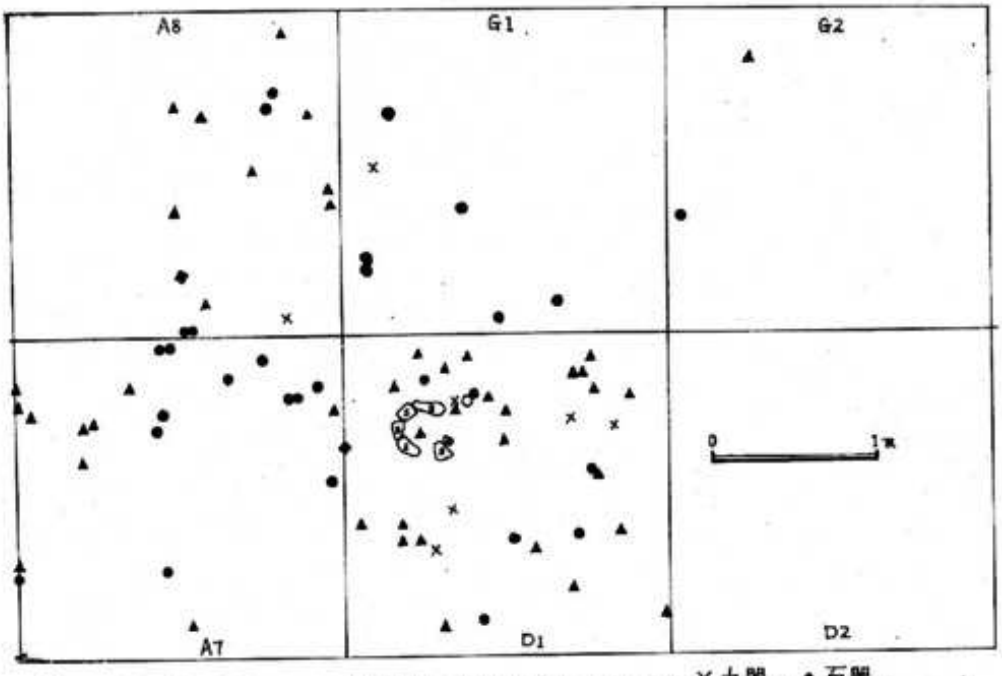
以上、Cトレンチを総括すれば、まず、A・Fトレンチの集石址との関係は、両者を同一面上でつなげる部分は惜しくも実現できなかったが、レベルにはほとんど差がなく、且つその遺物出土状態はまったく同一であったといえよう。しかし、集石の状態がやゝ異なりAトレンチの如く1ケずつ並べたような状態とまではいかず角礫より円礫が多いことも指摘された。本地点の集石（敷石というべきか）をあえてAトレンチのそれと同一視してみれば、このCトレンチ集石（特にA・Fトレンチ側に多いこと）とA・Fトレンチの集石を図上でつないでみると、弧を画くような形となり、更にいえば反対側のD・Gトレンチの本トレンチと類似した集石址とも結ばれて所謂半円形乃至馬蹄形となる可能性もある。こうした点からみると調査区域や日時の限定されたことが残念であった。

（樋口昇一）

(4) Dトレンチ　　（図版4下、第10・11図）

Dトレンチは、南北にはしるA7区と、B7区を東西に結ぶ巾2*m*、長さ7*m*のトレンチで現河川に直角に設定され、長さを2*m*ずつに区切って、A7区寄よりD1～4区とした。しかし設定の都合上4区は長さ1*m*の小区とした。

Dトレンチの発掘結果を概観すると、1区及び2区の西寄に縄文遺物の包含層を認めたほか、2区の東寄より3区～4区に亘って、B・F各トレンチに通ずる溝状遺構が、北西方向より南東方向に走っているのを発見した。これは黄褐色砂礫層の堆積で、その層序は複雑であったが、こ



第10図　D・Gトレンチ遺物出土分布図（1：50）（×土器，▲石器，●土製円盤，○土製品）

こからは縄文遺物の包含層は全く消滅していた。

溝状遺構は、Dトレンチ2区の西壁から東へ50cmの地点からD3区に亘り、3.15mの巾をもち、約10cmの落ち込みをみせていた。遺物の包含を多く認めたD1区の北壁層序の確認では、現河床下に約20cmの黒色土層があり、更に黄褐色砂礫層が8cm介在し、続いて黒色腐蝕土層（繊維含有）約35cmが堆積していた。縄文遺物は、この黒色粘土層（繊維含有）の下部層11～17cmに含まれ、上部層の15～17cmは無遺物層となっていた。更に下層は、遺物を含まない青灰色（砂質）粘土層となっており、その層は130cm以上の堆積を示していた。この層序はA・F・C・D各トレンチと同じといえよう。

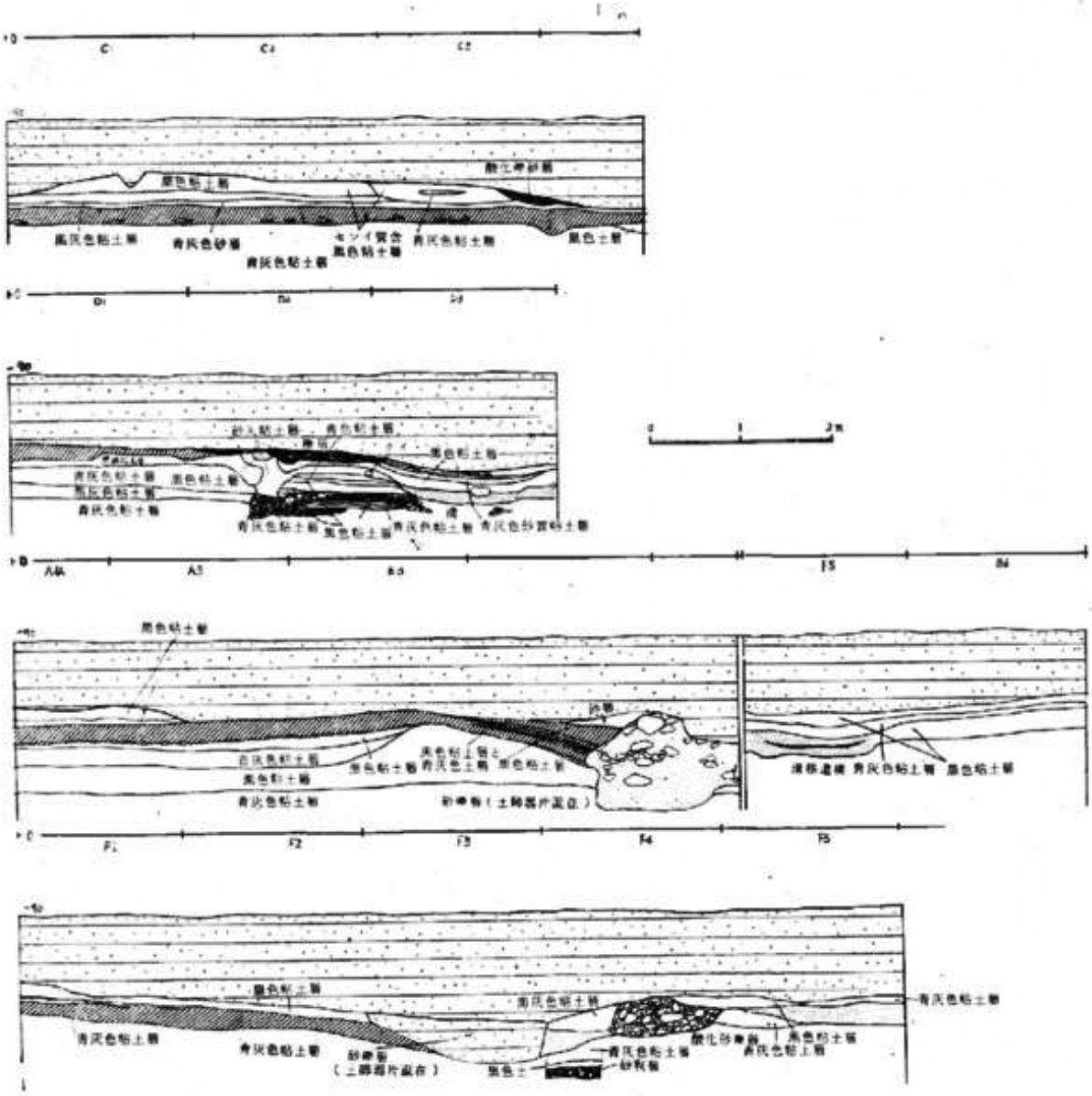
以下、Dトレンチ各区の主なる遺物、遺構の発見状況を記すと、縄文遺物は1区及び2区の西寄りに、前記包含層中、約17cmの堆積を示しながら、おびただしい圧縮された植物遺体の伴出と共に確認され、1区では石鏃12、土製円盤2、凹石3、石剣1、スクレイパー1、丹彩土器片1、2区では完形の耳栓1が、縄文後・晩期に所属するとみられる無文土器片多数を主体に、目のあらい網代底、口縁部に沈線のあるもの、口端に加飾あるもの、工字文に類するもの、「く」の字状口縁形態を示す各土器片等々が発見された。その他黒曜石フレイクの出土が目立った。

また調査4日目（29日）にいたり、D1区内で黒色粘土層－34cm（以下、マイナス面は黒色粘土層の上面より記録する）を下限とする遺物包含層が終り、北壁セクションをとるための掘り下げが開始されて間もなく、同区の東壁より西へ65cm、北壁より南へ65cmの地点に中心をおく、石組の遺構らしきを確認した。－41cm面での出現で、遺物包含層の下限からは約7cmの無遺物層が介在した。

この石組は、鶏卵大から20cm内外の石約10個を用いて、南北50cm×東西35cmの楕円形状に設けられ、石組内には炭化物の粉末が若干含まれ、無文土器片の挟合をみた。この石組は上面より写真を撮り、地点の記録をとどめて除去することとし、その作業にかかったが、土をうすくはがしたところ、計らずもその下面に「丹彩土器」（第19図221）の破片が出土した。彩色は鮮やかな朱塗りであり、外器面には非連鎖的三又文が施されていた。石組のほぼ中心部出土で、平板図面に遺物番号№41として記録した。その後、石組下の掘り下げがなされたが、－65cm面まで遺物の混入がみられ、－48cmに凹石2個。－51cmに平縁の無文大形土器片、晩期前半とみられる土器片、－51～－65cmに亘って研磨されたものを含む無文土器片を発見し、以下は無遺物層となった。しかしこの石組下の落ち込みとみられる部分の周壁は全くつかむことができなかった。

D2区の東寄りには、遺物出土を殆んど認めず、D3区では、縄文期に属する遺物は皆無に近い状態であり、僅かに散在した土師器片と、層序を異にする砂層下で、黒土層の上面に横たわる木材を確認した。この木材は更に北に隣接するG3区に続いていた。D4区内では、径6cm長さ60cmの木材1本を確認した他、遺物皆無の状態であった。

（大久保知巳・神沢昌二郎）



第11図　第1地区A～Fトレンチ地層実測図（1：80）

(5) Gトレンチ　　（第10・11図）

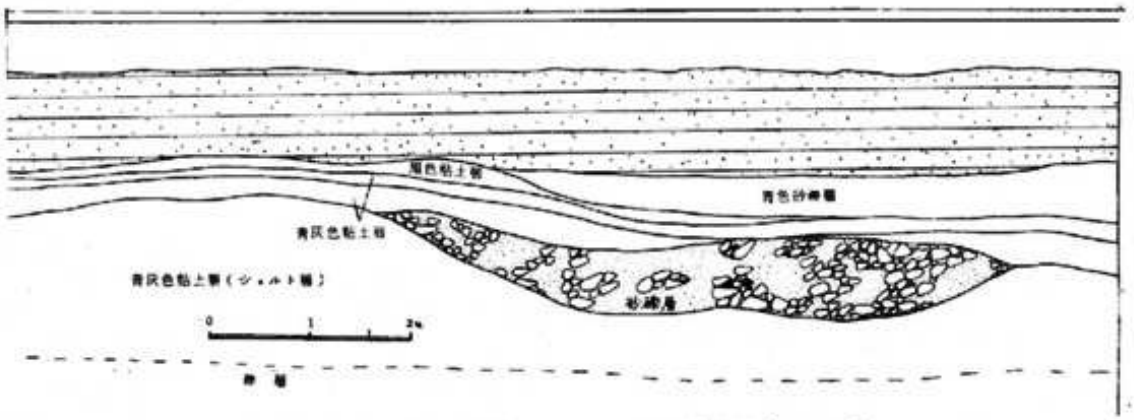
Gトレンチは、調査3日目にDトレンチの北に隣接平行して設置され、南北巾2m東西の長さ7mを4区に区切り、A8区側よりGトレンチ1区～4区とした。但し4区はD4区と同様、東西の長さ1mの小区である。

発掘結果の概観は、Dトレンチとほぼその様相を同じくし、1区及び2区の西壁寄に縄文遺物

の包含層を認め、2区より4区にかけては溝状遺構や、層序の複雑さを認めたほか、遺物出土殆んど無く、僅かにD3区より延長する地点に木材が確認された。

G1区の層序は、D1区の場合と殆んど同様にして大きな変化がみられず、従って縄文遺物を包含した層も、同じレベル面に確認された。以下、G1区及び2区の西壁寄りより検出された主なる出土遺物をあげると、やはり包含層内に植物遺体含有の濃度を強く感じながら、1区より石鏃3、土製円盤8、耳栓の破片1、石錐1、スクレイパー2、Gトレンチ2区より石鏃1等のほか、土器片としては無文土器片を主体にして、網代底、木葉底、口縁に沈線をめぐらしたもの、器の内面にハケ目状擦痕あるもの、無節撚糸文、工字文に類するもの、黒色研磨されたもの等出土した。また、土製円盤、黒曜石フレイクの出土が目立ち、包含層最上部からは、口縁に沈線をめぐらした土器のみ出土した。

（神沢昌二郎・大久保知巳）



第12図　第1地区Hトレンチ地層実測図（1：80）

第2節　第　2　地　区

この第2地区には、第1地区南方約24mの所に幅2m、長さ10mのAトレンチをまたそれに交叉する如く南方に同じく10mのBトレンチを設定した。このA・B両トレンチは本遺跡における範囲と遺跡の状態をさぐることを目的とした。

Aトレンチは、2mごとに西方より1～5区に区劃した。発掘は、上層部をブルトーザーで除土してあるため、女鳥羽川現河床最下層部の礫層より始まり、第1・2区においては青灰色を示す砂質粘土層、さらにその下部に暗黒色腐蝕粘土層（各々10cm・20cm）、さらに礫層へと続いている。この最下礫層は挙大前後のものであり、第3区より東方に向ってゆるやかな傾斜を示しはじめ、それは第4区の中ほどにおいて勾配を増し、第5区のピット状遺構に続いており、それに伴って地層の種類も増加し、第5区においては、最下礫層も含めて7層を数えた。

現河床礫下にある、第1・2区より続く荒い砂質粘土層と暗黒色腐蝕質粘土層は、第3区の半ば

より細い砂質粘土層をはさみ込み、ほゞ水平状態で第5区に至っている。この3層下には、第1・2区では見られなかった青灰色砂質粘土層、暗褐色及び青黒色粘土層、そして、青色粘土層から礫層に達し、それは第5区において、20・20・25・10・8・15cmを計測した。なお、この第5区において、最下礫層中より、－45cm、径1m30cm×1m20cmのピット状遺構を発見した。

Bトレンチは、前述の如くAトレンチ第2区より直角に南北方向へ2地区もうけ、南より各々1～4区とし、主として最下層部に横たわる礫層が、自然のものであるか、あるいは人為的遺構であるかを調査する目的で設定した。しかし、人手と時間の不足のためその目的を充分に確認するに至らず、多分に自然的なものであろうとの感を得たのみである。

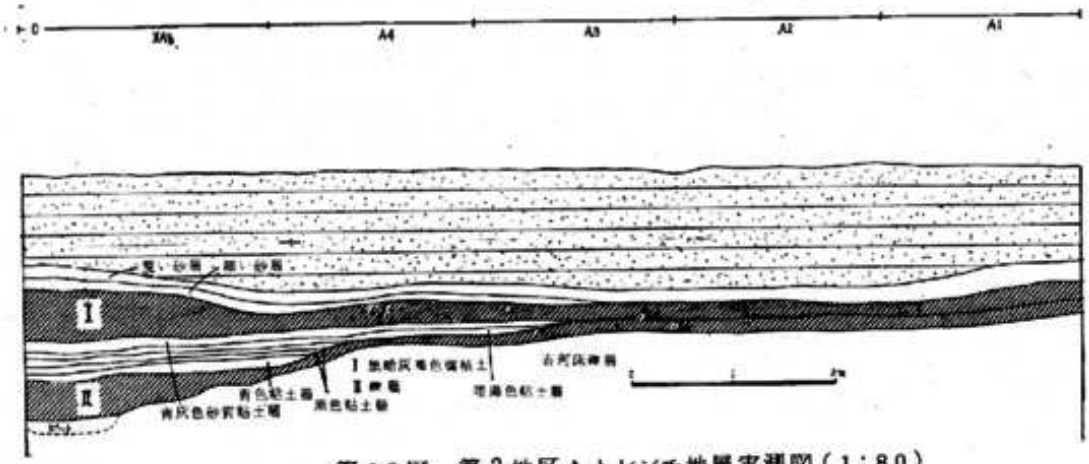
なお、地層についてはAトレンチの状態とほとんど同じ様相を示し、第1・2区においては、現河床下につゞき青色砂層（20cm）、黒褐色腐蝕粘土層（15cm）、礫層と続き第3区より北方に向って傾斜度を次第に増しており、それに伴って地層数もAトレンチと同様に多層化し、第4区で青色砂層（40cm）、黒褐色粘土層（35cm）、黒褐色粘土層（15cm）、そしてわずかの青色粘土層をもって礫層に達している。

次に遺物であるが、A・Bトレンチ共に黒褐色腐蝕粘土層と、下部礫層上部に包含されており、各々上部より遺物包含層上層、下層とし、Aトレンチ第5区のピット状遺構内は別に分層した。

まず上層であるが、これは前述の如く黒褐色を示し、多量の腐植物を含む為と思われ、また、砂及び小さな礫を混じ、その中に縄文後・晩期の土器片を全区にわたって包含している。

下層は、拳大前後の礫が堆積し、その上部よりやはり縄文後・晩期の土器片が多量に散布しており、それに混じってAトレンチ第2区を中心として、1区及びBトレンチ1区にかけて多量の獣骨を出土、その他、矢筈（Aトレンチ第3区、－45cm）1点、石鏃数点も出土している。

Aトレンチ第5区出土のピット状遺構については、その包含層を3層に分類でき、ピット内上部より、それぞれ第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層とした。第Ⅰ層は、ピット内最上部に当り、前述の包含下層に続く



第13図　第2地区Aトレンチ地層実測図（1：80）

ものである。砂と小礫を混じえた黒色土層で３５㎝を計る。その土中に、多量の糞状植物のセルローズ分を層にして含み、その層中より（即ち包含下層より－１０㎝位の所）土器片及び、くるみ・くり・３０～５０㎝の木片を相当量出土している。くるみ・くり・木片等の堆積状態は、あたかも、川の淵に流れつき澱み沈んだが如き感を与えた。第Ⅱ層は、第Ⅰ層に続く１５㎝の厚さの青色砂層で土器片の出土は少量である。また腐植物混入度はほとんどない。第Ⅲ層は、黒褐色の腐蝕を多量に含む粘土層であり、土器片の他、丹塗の石剣頭部（図版２４）も出土し、他にくるみ・くり・その他植物の実が出土しており、この層が当地区の最下層包含層に当る。厚さ８㎝で最下部の青色粘土層に続いている。

以上、第２地区の概要を記したのであるが、前述の如く、この遺物を含む礫層（即ち下層）の性格については、確証が得られなかった（自然状態であろうとの感はある）点が心残りではあるが、地層序が見分けやすかった為、特にＡトレンチ第５区において遺物包含層を５層に分類できた事は、当遺跡のまた、地層の時間的考察、あるいは堆積状態について、何らかの資料が得られるものと思われる。また、遺物包含層の在り方は第１地区Ａ・Ｂトレンチの集石址とその周辺、同Ｃ・Ｄ両トレンチでみられるものとほぼ似ており、この包含層を人為的なものと考えるか、自然とするか今のところ決定しがたい。

第４章　遺　　物

第１節　縄文土器及び土製品

今回の調査で出土した土器は、小型土器の1,2を除いてすべて破片である。しかし　河底の低湿地遺跡という条件にも拘らず、磨滅して文様などが不鮮明なものは意外に少なく、一般的な包含層出土土器とその点大差ない。この事実は、本遺跡が旧河床を流れ、移動して堆積したということでなく、遺跡それ自体があまり動いていない証拠となろう。だが、やはり破片は小さく、文様構成・器形を知る上では条件が悪い。

出土土器は後述の古墳時代土器を除くと大半が縄文後・晩期に属し、編年的に数形式にわたるが、該期としては良好な資料たり得よう。出土総量は約６,６００点、うち口縁部や文様ある破片が1,３５０点で全体の２０％、底部が約３００点で4.５％。残りの約７５％が無文土器片で、該期通有の現象である無文土器の卓越がこゝでも看取された。まだ充分整理が実施されておらず、器形分類や個体数の算出ができないが、口縁部破片から考えて、個体数は1,０００～1,５００個とみて大過ないであろう。

次に出土状態に触れておこう。第３章でも重ねて述べている如く、約２０cm程度の包含層に雑然と検出されたため、層位的観察はまったく不可能であり、地点を異にした第１・２地点の比較結果も、さほど大差なく、本項ではすべてを一括し報告したい。

後・晩期土器の分類には器形の占める役割は重いが、前述の如く小破片であり、以下の分類基準ももっぱら文様を第一義とした。他遺跡資料などとの比較検討を通じ、今後更に該期の追及をすべく準備中である。なお図版は整理用の写真なので、主に拓影によって説明を加える。

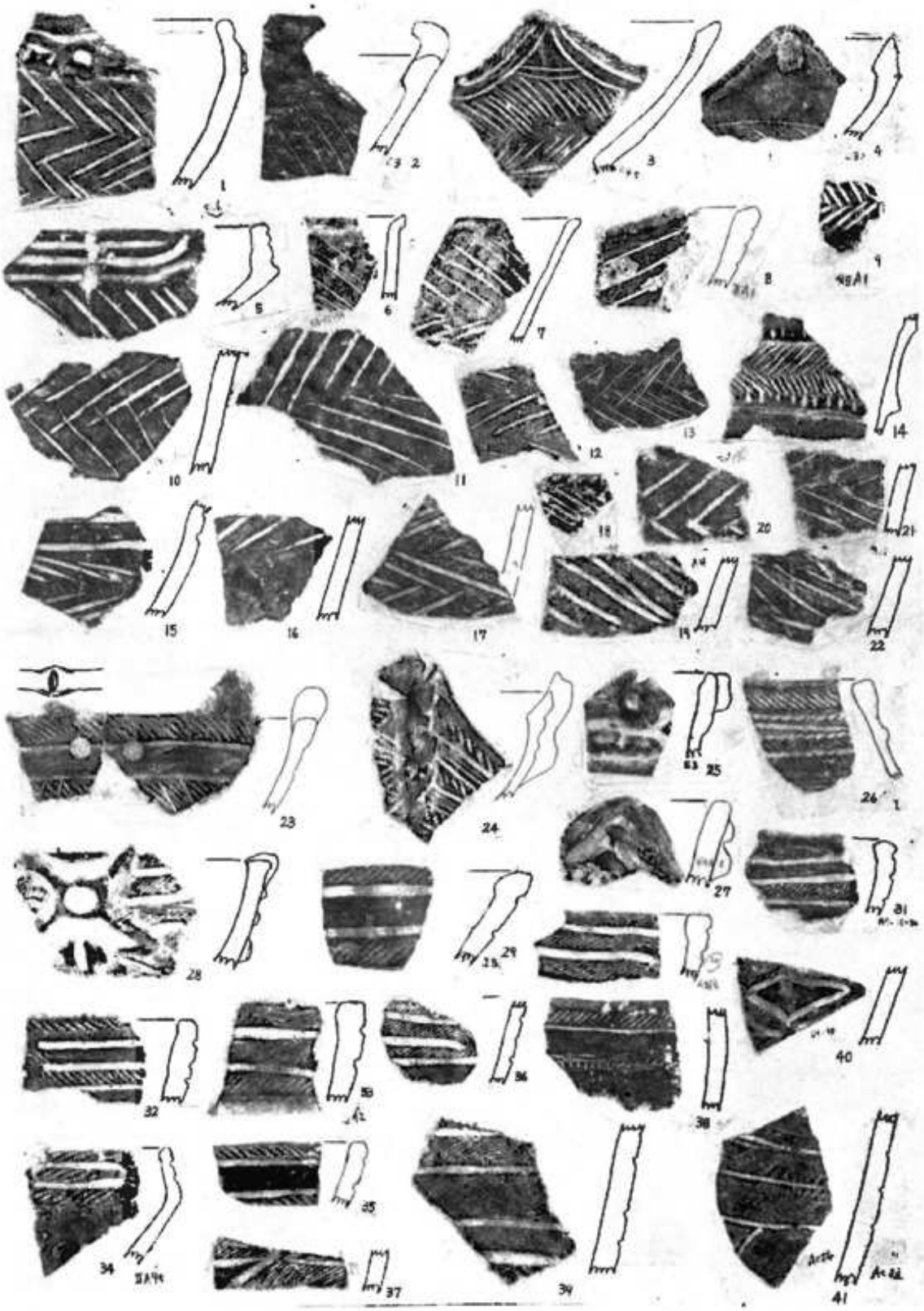
(1) 第１類土器　（第１４図１～２２　図版第８の上）

口縁上部や胴部に沈線による綾杉文を付す土器を一括する。加曾利Ｂ式に伴う文様とされているが、すべてそう帰属するかどうか不明確な点もあり、今後のためあえて一類に分類した。深鉢乃至甕を主とするが、多少形態に変化がある。図示した以外約３０片の小破片がある。

Ａ種：内彎した口縁部の上辺に刻目ある凸帯を一条めぐらし、以下鮮明な沈線による綾杉文を付す１の如き土器で、半粗製の鉢であろう。なお凸帯の上には数ケ所円形の押圧を加えている点、後述第３類凸帯文土器とも関係しよう。類例は多くない。

Ｂ種：肥厚した口縁部と、まげのような突起を波状の縁の波頂部につけたものである。２の如く表裏面ともやゝ研磨されて黒色を呈す。頸部以下の斜状沈線文は多分その下半で綾杉文となるであろう。胴部破片に類例をみる。６～８はやゝ器形が異なるが同種に含めた。８は或は単なる沈線文かも知れない。

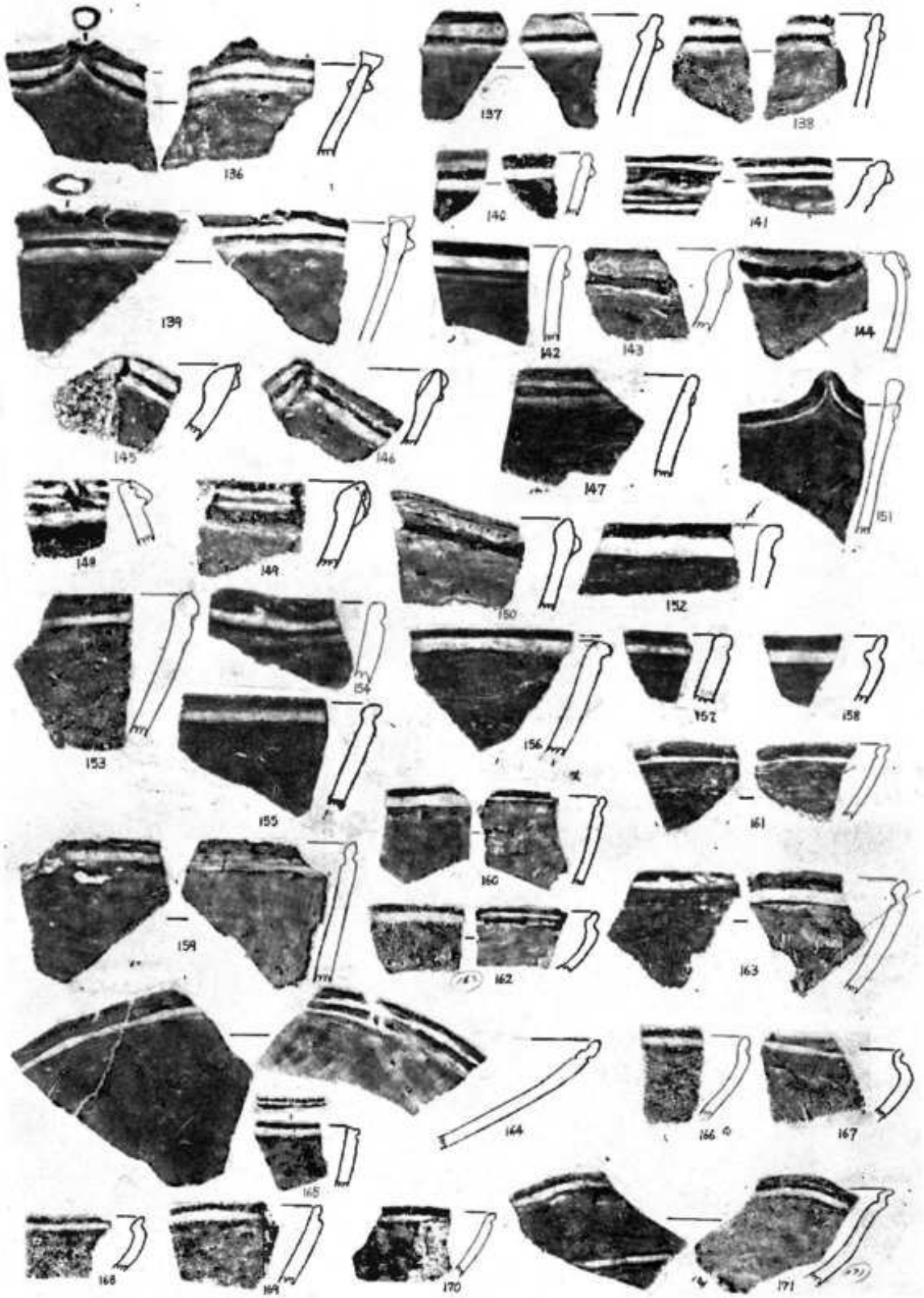
Ｃ種：口縁部が内彎して広く開き、頸部で屈曲し鉢形を呈し、ゆるい山形口縁部は特徴的な



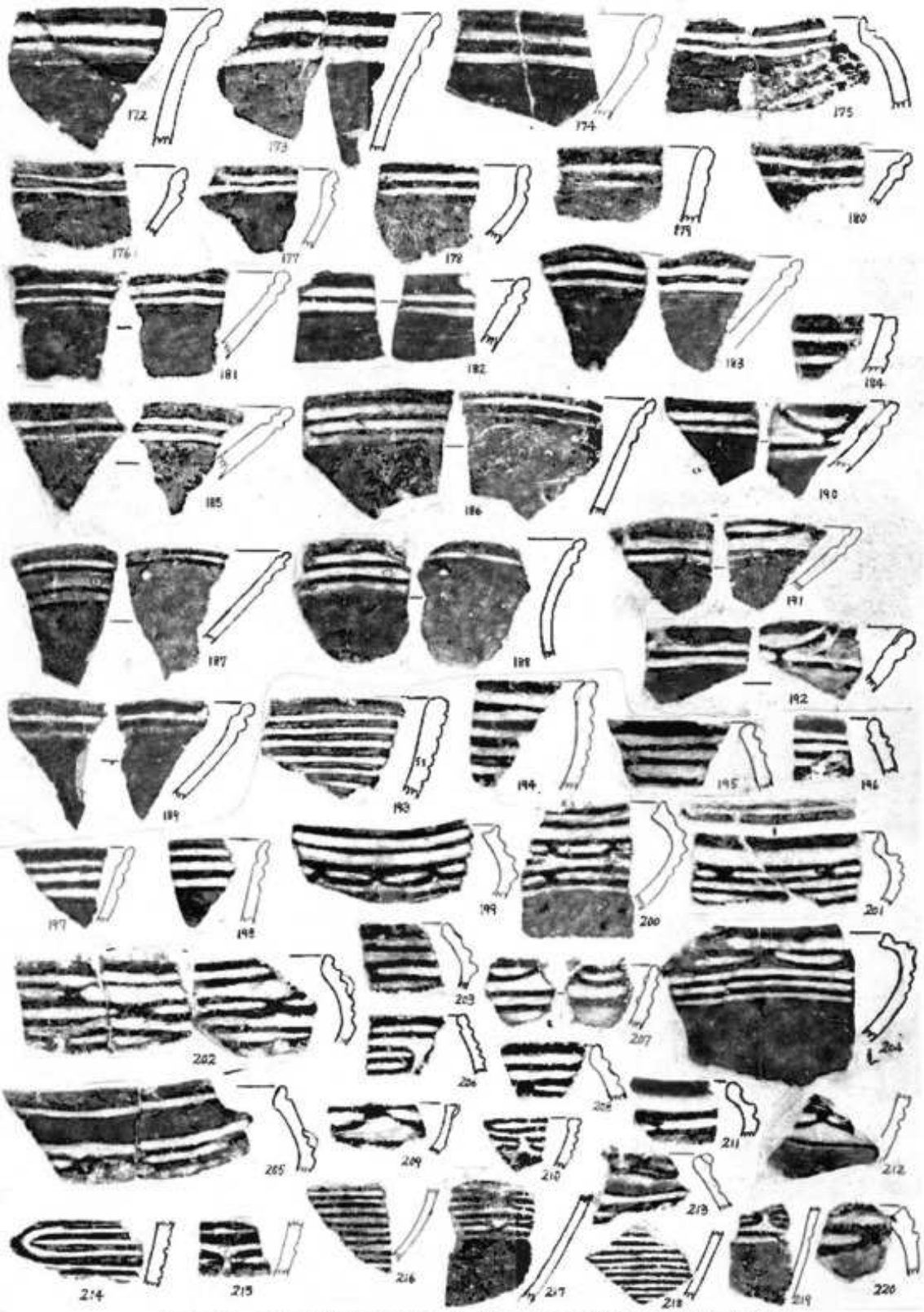
第14図　縄文土器拓影（その1）（1：3）（第1類1～22，第2類23～41）

第15図　縄文土器拓影（その2）（1：3）（第2類42～87）

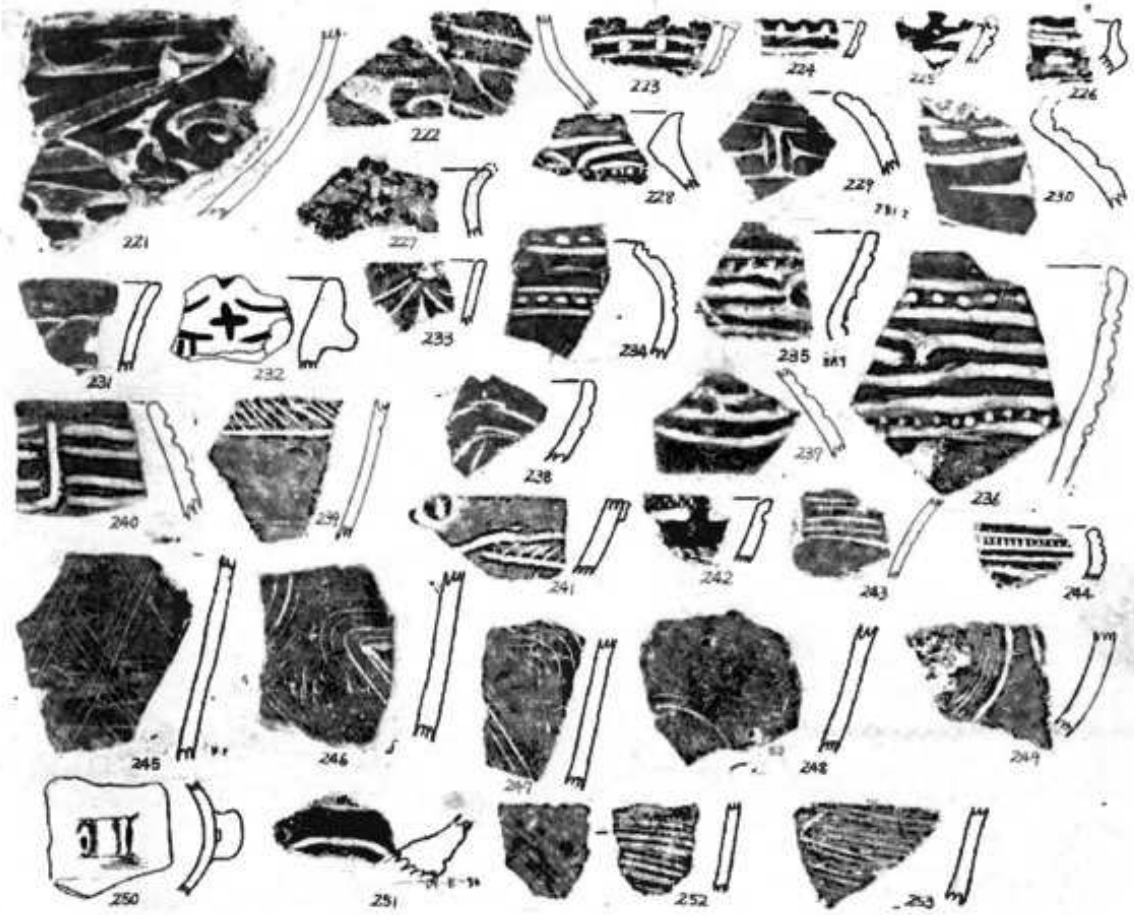
第16図　縄文土器拓影（その3）（1：3）（第3類土器88～135）



第１７図　縄文土器拓影（その４）（1：3）（第３類136～150，第4類151～171）



第18図　縄文土器拓影（その5）（1：3）（第4類172～220）



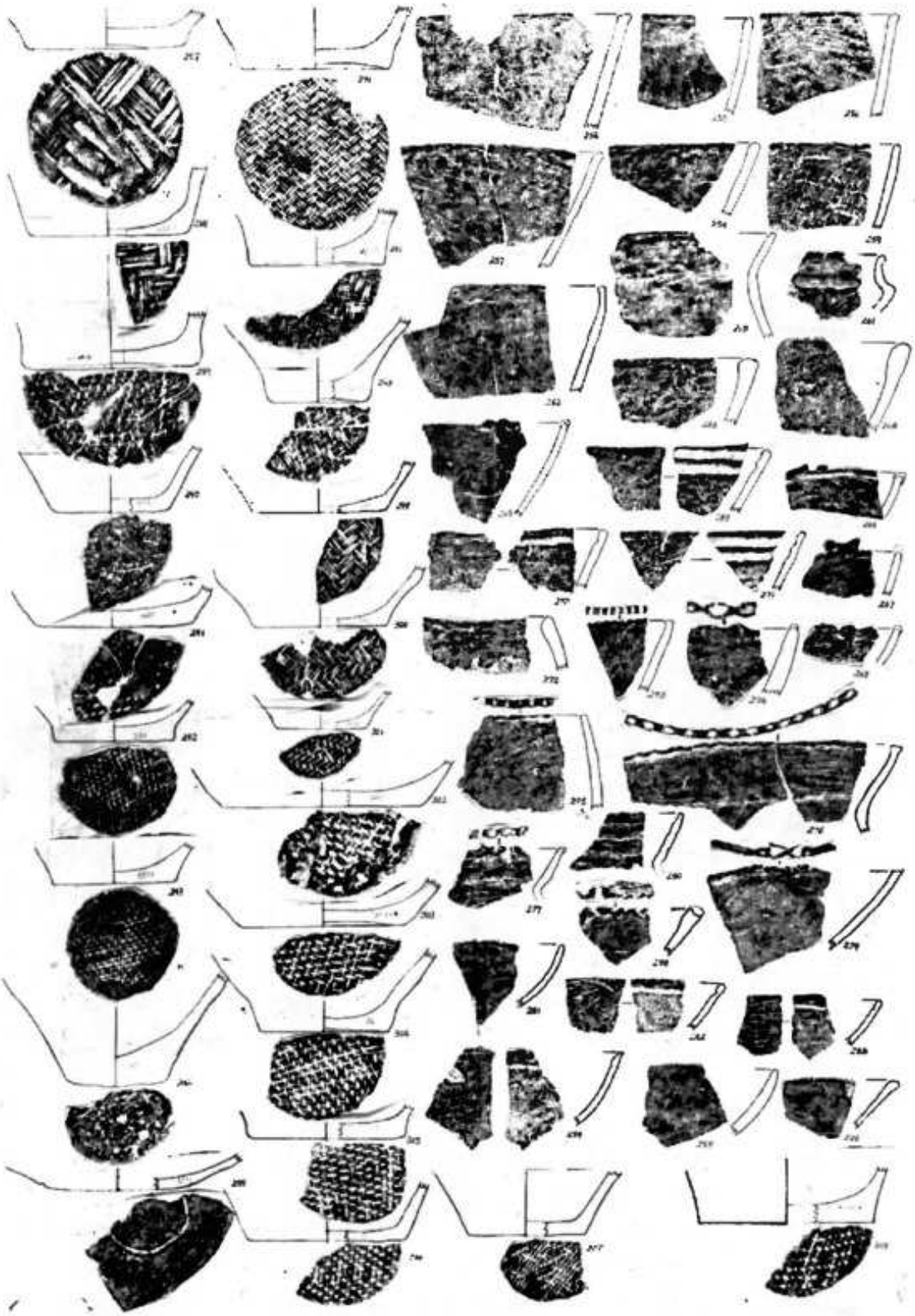
第19図　縄文土器拓影（その6）（1：3）
（第5類221～226，第6類235・236，第7類228・234・244
第8類229・230・234，第9類251・252，第10類227・232・
237～251）

断面三角形の口唇部を示し、製作の良い一群の土器である。文様構成としては3の如き縄文帯と平行沈線、及び綾杉文の併用されるもの、口縁部のみに細い縄文帯を付す4などである。口縁部形態は次の第2類A種24第3類C種129、同F種145など山形の縁を示すものに多く、時期的な類似を暗示しているのではないか。

D種：わずか1片であるが殆ど直立する短い口縁部が頸部で「く」の字状に内屈する浅鉢形の5である。短い口縁部には3本の沈線がめぐり、突起部で八の字状に区切られる独特の文様帯をつくり、頸部以下に綾杉文を付す。

類似が少なく、半粗製に属する。

E種：胴部に綾杉文ある土器を一括した。多く深鉢らしいが、綾杉文自体に精粗がある。また、中には14の如く薄手で二段の低い刻目ある凸帯間を細かく羽状文で埋めるものもある。なお、この種綾杉文の変形した間隔の広くあいた短い羽状沈線文ある土器は南信中の沢・同上の段



第20図　縄文土器拓影（その7）（1：5）（第11類254～286，底部）

・静岡天王山などに存在し、一特徴となっているが、本種の如き綾杉文との関係はまだ充分に検討されていない。しいて求めるならば１５の平行沈線文にある短い綾杉文などを注意すべきかも知れない。小破片ながら数１０片と比較的多い。

(2) 第２類土器　(第１４図23～41、第５図42～87、図版第８の下・１６の上)

縄文が文様要素の主体となる土器をすべて含めた器形は深鉢・浅鉢から皿の一部があらわれてくるなど、編年的にも類型式にわたるらしいが、一応以下の如く細分した。

A種：　縄文ある安行１乃至２式に近似したものをさす。２３・２４が代表例である。２３は肥厚した口縁部に、交互に大小の突起を付し、良く磨消した無文部の上下に縄文帯がめぐる。口縁直下の帯縄文はやゝ高く、下の縄文施文部には平行沈線文がついている。平縁の外傾した口縁部をもち、頸部でしまる深鉢であろう。これに対し、２４は大きな山形口縁とその頂部より垂下する押圧のある突起を特徴とする土器で、口縁部断面は先述した三角形状にとがる特色ある形態を示す。２５・２７もほゞ同類としてよいであろう。２６は帯縄文下の沈線に刺突を加えてあり、かつ口縁は内傾する鉢形。２８は帯縄文もほとんどその高さを失っているが、口縁部に粘土紐による中心に円をおくＸ状の突起部と、その直下に刻目をいれた瘤状突起がつけられた安行式的な要素を示す平縁の鉢形土器である。本種は共に焼成胎土ともよく黒褐色に磨かれている半精製土器といえる。

本種の如き安行１乃至２式に類似した資料は長野県下の後・晩期遺跡で往々にして発見されるが、未だ併出する土器則ち土着の土器について明確な解答は得られていず、後述する如く、後期後半にはまだ問題点は多い。

B種：　A種の如き帯縄文を主として安行式に比定できる以外のもので帯縄文はほとんど肥厚せず磨消縄文を主とした資料をこゝに一括した。

口縁部に数条の縄文帯と無文帯が交互に施され、その間を沈線文で区画している。勿論無文帯は磨消縄文手法による。２９・３３・３５などが典型で、余り複雑な器形はとらず半精製土器に属する。３０・３１は無文帯と縄文帯が交互にならないもの、３２・３６は意識的に沈線が切られている例、３８は刻目を沈線内に付したもの、４０は菱形に区画された無文部を残す例などである。特に３４は５同様の短い直立に近い口縁部が「く」の字状に内屈した形態を示し、口縁部にのみ地文の縄文上に両端でつながる沈線による文様が加えられた例で、後期後半の土器らしい。なおこの種土器には口縁部の肥厚した例が中の沢などで指摘されているが２９・３０・３３などはそれに当ろう。更に本種には６８・６９に示す皿乃至は浅鉢の精製土器がある。この２例は縄文も繊細となり明らかに本種の他の土器とは時期に異なるものであろう。口縁部がないので本類に含めたが、むしろ第２類Ｅ種と同一とすべきであろう。

以上の如く本種はＡ種との関連を示しながらもすべて同一とは考えられず、今後他遺跡との比較によって、細分の可能性が多い一群である。綾杉文ある土器と同じ位の出土量で少なくない。

C種：　４２～４４・５０・５２に示す綾杉文と縄文帯の結合した一群で、むしろ第１類とすべきだが、４２を除く４片の如く、広く開いた浅鉢状の器形を示すこと、及び綾杉文自体の編年

的位置の考察のためあえて本類に含めた。中厚手と薄手の半精製土器である。

D種 ： 磨消縄文手法に刺突列点文が付加される一群で、A～C種に較べ、やゝ薄手になること、及び浅鉢が主体となること、縄文自体がやゝ繊細化する点などが指摘できる。列点文は本質的には口頸部の加飾として用いられ、胴部以下には付されないらしい。48・49・53・54の如き内彎して頸部で「く」の字に屈曲する鉢形や47の浅鉢、46・51・56の単純な鉢形がある。本類中では次のE種と共に最も多出する一群であろう。

E種 ： 入組文・雲形文・三叉文などのある所謂亀ケ岡式土器や安行3式に比定できる一群である。57～60の4片ですべて浅鉢を呈する。所謂搬入された土器ではなく、模倣された土着の土器で、文様自体やゝくずれた感じがするし、胎土・焼成など良好ではあるが、特に選別できるほどの特徴を持っていない。B種とした68・69も同類であろう。67・70～72の4片もほゞ同じ文様要素をもつが、72のみは頸部に三条の沈線がめぐる壺形土器らしい。晩期前半・亀ケ岡式土器との対比では大洞B乃至BC式に併行するものであろう。

F種 ： 縄文と曲線的沈線文の結合した一群をこゝに含めた。61は特徴ある短く「く」の字状に屈曲して内傾した口縁部をもち、文様自体E種の変形かと思うが、縄文そのものはやゝ粗く区分できる。62・63は地文の縄文上にやゝ太い沈線で工字文的な文様を構成する一種で、特に62は上下の沈線間を結ぶ交点は彫去して印刻文（三叉文）的傾向をもっている。胎土・焼成などは粗く、共に深鉢を呈するらしい。64・65・66の三片もまた地文の縄文上に沈線による工字文的文様構成をあらわしている一群で、64には刻目が付加され、65には62同様の彫去部分がある。65の深鉢のほか、64・66とも浅鉢であろう。薄手作りで胎土・焼成の良い精製土器といえる。なお、62・63に似た文様は240などがある。時期的にはどの辺に位置するものか現在のところ明確でない。

G種 ： 一片のみであるが雷文風とも鍵の手文とも考えられる73の如き破片がある。口縁部形態からいえば、やゝ内彎気味で、口唇部が断面三角形となる特色ある鉢形土器で、直線文内の縄文は本類では例の少ない無節のやゝ粗いものである。なおよく観察すると、区画された無文部に綾杉状の波線と似た一部があり、文様構成が充分推定できないのが残念である。類例はない。胎土・焼成ともやゝ他と異なり、軽くやきしまっている。佐野などで晩期前半～中頃に比定した鍵の手文とはやゝ様相を異にする、より旧い部分－後期末～晩期初めのものか。

H種 ： 縄文のみ破片を一括した。斜縄文の他結節のある77・78などもあるが、一般的に縄文自体は余り精緻でないものとやゝ細かいものの二種がある。二・三の口縁部破片以外すべて単純な深鉢の胴部破片で、84のみ浅鉢に近い。図示した以外30片ほどある。粗製土器が大半である。縄文のみで後期～晩期までの区分ができない。

G種 ： 縄文に対し撚糸文あるものを別に区分した。85～87の三片で他に数片同一個体らしい破片がある。H種同様粗製深鉢であろう。

(3) 第3類土器 （第16図88～135・第17図136～150、図版第9・10の上）

凸帯文土器をまとめた。この種凸帯文は、縄文後期から晩期の特色のひとつとされる、口縁部

周辺に一条乃至数条の凸帯（隆帯）をめぐらす土器である。関東地方の細線文、東海以西での凸帯文との脈絡を推定できる一群であるが、中部山岳地帯には広く分布し、今後検討の仕方によっては、本地帯独自の後・晩期土器のメルクマールとなる資料であろう。大別すると凸帯のみのものと凸帯上に何らかの加飾－刻目・指圧痕あるものである。以下更にその細分をしてみたい。

A種 ： 凸帯は低く疑似凸帯ともいうべき上に刻目乃至刻線を加えた一群である。器形がすべて口縁部が段状に屈曲する浅鉢形で、その頸部に当る突出部に縦か斜めに刻みを入れる。厳密には凸帯文とはいえないが、そのモチーフは同一と考え、あえて本類とした。９０はやゝ太い刻目、９１が細い刻線、他はその中間である。９２ではこの刻目部が口唇部に縦につゞき、こゝで凸帯となる例であり、９３は波状に凸帯が付されるものもあり、凸帯文としての分類が妥当な方法であることを示している。胎土・焼成は半粗製に近い。この一群が凸帯文の初源的なものかどうか、今後検討すべきであろう。

B種 ： 指圧痕に近い凹みを凸帯上に付すグループであり、本種中最も多い。器形的には外傾・内彎・内傾など数種の口縁部の深鉢が主体となり、黒褐色・黄褐色系統と二大別できる。粗製といえようが、中に器面調整する例もあって半粗製的なものもある。口縁は平縁が主であるが、ゆるい波状口縁（１０７）や大きな山形口縁（１０１）もあり、また小突起を付す１０３・１０５なども散見される。次に口縁の断面は外傾して単純に広く４４・４６、多少内彎気味の１１１、頸部で屈折した１１２、内傾した９９・１０２などと複雑で、文様との関係は今のところ明確でない。

文様は口縁下１～２cmのところを指頭か他の工具で押しつぶしたような凸帯が一条めぐるのみの簡単な構成であるが、９５・１０３の円形突起、１０５の突出した口縁加飾あるもの、一片ではあるが凸帯文が垂直に口縁部へつながる１０２の如きものもある。一方、この凸帯は口縁端に接してめぐる例も少なくない。１０８・１１１・１１２がその例で、頸部周辺にもう一条付加される場合もあるらしい。また頸部周辺をめぐるものとして１０６・１０７の２片がある。なお、１０９の如く巾広い二波線下に粗大な凹みを付すもの、１１０にみられる正円形に近い押圧を凸帯に加える例などはやゝ特異といえる。

本種などが東海地方特に吉胡などで晩期旧式と呼ばれた一群に近いもので、信州では佐野・保地など北信、上ノ段などの南信、本遺跡と同じ中信のエリ穴など、全県下に検出されている。東海地方との関係のみでとらえるべきかどうか、後述したい。

C種 ： 刺突乃至刻目をつけた一群をまとめた。一部をのぞき、B種とは器形・文様・胎土・製作など余り変化はないが、強いて述べるならばやゝ大型土器が少ないということである。凸帯上の加飾は、B種の如き指頭による圧痕で、明らかに竹管などの工具で刺突・押捺したものである。１１１・１１７はそれが爪形文の如くに表出され、１１３・１１５・１２３・１２８などは刻目というより押捺して連続刺突文を作っている。故に本類はすべて押しながら（引きながら）圧迫を加えて加飾しているので刻目的になったものでも、次のD種とはちがっている。１１４は波頂に刻目を入れた一種であり、１１８もB種の粗大な指頭痕類似の凸帯と平行線文が組合さったものである。１１９の体状突起もある。

この種刺突或は押引き的な加飾も、凸帯自体が細くなり、低くなってくると、むしろ列点文的

な感じを与える。124～127・129・130・135 などがそうで、この手法は深鉢や壺はなく、大半が浅鉢－有段の類部をもつらしいものから、皿に近い形態までに限定されてくる。或は本種にあっても区分すべきかも知れない。

D種 ： 列点を凸帯上に連続したグループであるが、わずか2片のみである。131・132とも沈線間に一条の列点文を施し、より一層文様効果をあげている。第2類D種（53～56）と関係あるものだろう。内彎した口縁部と皿部がふくらむ浅鉢のみで、他と比較し薄手良好な作りである。

E種 ： 純然たる刻目、即ち低く偏平な凸帯上を縦に切断して加飾する120～122の3片である。この中特に 121 は山形口縁や断面三角形の口唇部、平行沈線とこの刻目ある凸帯とによる文様構成など、本類中にあっては明らかに区分される要素をもっている。本類の中ではB・C・D種などよりA種の手法と類似する。

F種 ： 凸帯上に何の加飾も加えない一群である。土器そのものは精製から半精製が主となり、粗製土器は少ない。器形は口縁部形態に内彎する139・143などのほか、外傾する一般的な深鉢乃至鉢が多い。136・139が本種の典型である。ゆるい波状口縁に沿って一条の鋭い凸帯がめぐるのみで他は無文となるらしい。波頂部に円形の突起がつぶれたように付されている。たゞ本類中には内面にも凸帯を付すものが多くなり（137・138）、また太い沈線を付すもの(140)などがある。特に 139 の内面の突起文は、凸帯と口唇部までの間隙が三角形状に彫去されていて時期判定に何らかの役割を果している。

なお、内面加飾のない例の中には、凸帯そのものもやゝ太く整然とせず、器形も口縁部の肥厚した山形口縁を呈するものがある。145・146がそれで、143・149なども同類であろう。148・149では凸帯文が二条となり他と異なる。或は細分すべきかも知れない。141は1片のみの特異な口縁部破片である。表面には凸帯と沈線、口唇部と内面に1本ずつの沈線を付す焼成胎土良好な浅鉢である。

なお、本類の類部文様帯としての資料が2ケある（第22図30・31）。共に台付土器であろう。

(4) 第4類土器　（第17図151～171・第18図172～220、図版第10の下・11・12・13）

有文土器の中では第3類土器と共に最も出土量の多い沈線文のみの一群である。バラエティーに富んでおり時期的にも細分されるべきであろう。

A種 ： 口縁の加飾として一本の沈線を用いただけのものである。(151～171)。まず沈線自体で区分すると、(イ)巾1cm前後の太い、凹み状の沈線（152・156）、(ロ)やゝそれより細いもの（153～155など）に二分できる。これらのうち、内面に加飾のないものはほとんど、平縁の深鉢、粗製土器である。しかし内面に一乃至二条の沈線を加えたもの、及び表面の沈線が中位より以下のより細いものになると、薄手作りで精製土器に近い器形の大半が有段か単なる浅鉢・皿にまとまる傾向がある。161～171がそれで、164 の皿には沈線部分に朱彩が残っている。しかし159・160の如く鉢になる器形もないわけではない。次のB種との関係からみても、

この内面加飾と器形は編年的位置を考究する上見逃すことができない点であろう。なお151は他の沈線文土器とは沈線自体や作りなどやゝ異なり、こゝでは除外して考えたい。

B種：2本の沈線文が口縁部をめぐる一群である。沈線そのものの在り方は、A種と余り変化ないが、ごく細い沈線がなくなること、内面文様（1乃至2条の沈線）が増加すること、これに関連して当然浅鉢を主とし皿を含めた器形が多くなる傾向が認められること、更にもうひとつ土器そのものが概して良好となり、半精製乃至精製土器の率がA種より多くなることなどを指摘できる。

まず内面に沈線のないもの72~79・84をみよう。72~74は2条の太い凹線を伏す類で、72・73は口縁部の外反する深鉢、74・79はやゝ内彎する同形態で、この凹線は先のA種と同一である。時期的にも同種としてよいであろう。75は無類の壺らしく一例のみである。76~78は短い直立する口縁部が頸部で「く」の字にしまる鉢で、やゝ後期的な形態が窺える。

次に内面加飾のものは80~83・85~92にあげたが、大別すれば凸帯を付す80・90~92と残りの沈線に区分でき、沈線には1本と2本の別がある。凸帯を付す例はすべて浅鉢か皿となる。特に90~12は弧と直線を結んだ特徴的構図をとり、次のC種との関連を暗示する。91は多少波状口縁をなす。81~85は内面2本の沈線ですべて浅鉢である。86~89は内面が1本となり86・89が深鉢、87・89が浅鉢である。以上の観察から土器表裏面に沈線文ある種類は今後型式設定の一基準となる予想ができそうである。本類中ではA種とほゞ同じくらい発見されている。なお、本種の小型定形土器が1ケ検出された（第22図28）。

C種：3本以上の沈線が工字文的文様あるグループを一括した。一般的に工字文ある土器は文様帯を構成する口縁部から頸部まで、極端に内屈しており識別が容易である。また胴部以下は皿に近い器形を除くとほとんど無文となる。なお3本以上の沈線あるものを本種に加えたのは破片なので工字文の可能性を残すためである。しかし93などは明らかに本種中では異種であり、6本の沈線自体細く手法もちがう。94・95は沈線自体は本種に近いが95~98はむしろB種と同一視すべきか。

工字文手法は口縁部に1条（201・202・204）か2条（199・200）の沈線を引き以下1条の小突起を中心としたレンズ状文をおき再び沈線を数条か、1条ずつ交互にレンズ条文－工字文手法を付すかの両者があり、以下無文となる。口唇部加飾がないことも付記したい。305などその点例外である。また中に306・307の如く、沈線間の三角形部分を強調するものもある。特に307は内面にも同一文様を配し、B種90~92との関連を明瞭に示している。胴部文様としては314の如き例は少なく、316~318に示す繊細な沈線文が多いのだろう。本種の中にも例えば先述した295~298や、309・312・313・320などやゝ工字文としては粗雑なものなど、同一視できないものもある。今後今少し他遺跡資料との比較検討が必要である。

199~205の資料は現在県下では断片的に検出されるが、まとまって出土したのは本遺跡が一番多いであろう。同じ中信地域でもエリ穴からはほとんど発見されていない。またエリ穴に近い石行遺跡では浮線網状文が多くなるという晩期後半の編年に興味ある現象をみせている。いずれにしろ本種は本遺跡の下限をきめる上に重要な役割を果す土器である。工字文自体の展開など

今少し追及しなければならないであろう。

(5) 第5類土器　（第19図221・226、図版第13の下）

所謂亀ケ岡式乃至安行3式系統の土器を一括した。第4類までが本遺跡の主体となる土器で本類以下は図示した以外ほとんどない客体的資料である。だが少なくとも時期推定の上には大きな意義がある。本類に関係する資料としては第2類E種（57～60）があるが、本類はそれ以外の縄文加飾のないものを一括した。

221は全面朱彩の皿乃至浅鉢土器で、胎土・文様からみて搬入品と考えて間違いない。半肉彫風の雲形文はシャープで本遺跡中最も美しい土器といえる。それに較べやゝ磨耗しているが222などの入組文（？）ある壺形土器は模造品であろう。223～226は口唇部加飾と羊歯状文くずれらしい文様をもつ、ごく薄手の浅鉢乃至皿形土器で、222と共に胎土・焼成など余りよくない。以上が晩期前半に位置する土器であることは間違いなく、なお小破片ながら、231には入組文らしい形跡が認められ晩期初頭の大洞B式的文様構成をみせる。

(6) 第6類土器　（第19図235・236、図版第13の下）

永峰光一氏が初めて提唱した中部山岳地帯の土着土器として特異な分布をみせる所謂「粗大な工字文」土器をあてた。わずか235・236の2片のみである。やゝ太い沈線（凹線）による粗大な工字文風文様に列点文を加飾している。235は頸部が「く」の字に屈曲し、236はやゝ内彎した深鉢である。晩期の大洞C_2式に伴う千曲川流域を中心とした土着の土器という見解に新例を加えたといえよう。本種と前述した第4類C種工字文土器との関係は興味ある問題である。

(7) 第7類土器　（第19図228・234・244、図版第13の下）

刺突列点文帯をもつ土器である。縄文を伴う例は第2類D種（45～56）としたが、本類も縄文の加飾はないが同類と見做してよいであろう。234は内彎した浅鉢、228は断面三角形の肥厚した口唇部に沈線文と併用される鉢、244は同じ列点文でも胎土・製作がまったく異る土器なので除外した方がよいらしい。

(8) 第8類土器　（第19図229・230・234、図版第13の下）

三叉文ある土器である。229は横に三叉文を使った特異な例であろう。230はくの字に屈折した頸部上半は沈線文を境に点列を加え、以下の無文部に三叉文の一部がみえる。333も口縁部の一部に集まる2本ずつの沈線間の「八」の字間隙に三叉文を充塡した一部が認められる。典型的な三叉文は本遺跡では本類程度なのであえてこゝに細分しておいた。

(9) 第9類土器　（第19図252・253、図版第16の下）

わずか2片であるが条痕風の土器をあげる。252は表面は斜行、内面には横走する条痕があり、253は表面のみ横走する条痕がある。これが貝殻による条痕か否か今は明確にできない。

東海地方の所謂条痕文土器とは異るであろう。比較的薄手の良好な作りの胴部破片である。一般に信州わけても中信地方の晩期遺跡では本類は少ないが2片といえど除外することはできぬであろう。

⑩ **第10類土器** (第19図227・232・237～251、図版第16図下)

有文土器のうち第1～第8類に分類できぬ例外的な資料を一括した。付記すべきもののみ説明を加えたい。232は刻目ある口縁部突起下に十字の印刻文を付す凸帯文系の土器である。十字印刻を除く種類はエリ穴などにもある。237は壺形土器の頸部破片で、沈線文の在り方がやゝ興味ある。工字文土器の一種とすべきであろうか。241はボタン状突起のある例。245～249は245の格子目状の沈線文以外流水文的沈線文ある土器で特に246・247は後期的な傾向が強い。249では沈線文が無文帯と区切られ、特に内彎した胴部と共に注意すべき資料であろう。

⑪ **第11類土器** (第20図254～286、図版第14・15)

再述する如く出土量の大半を占める無文土器を一括した。こゝでは口縁部破片のみを摘出し説明を加えたい。その大半が中厚手の深鉢か甕形を呈する粗製土器で、半精製・精製の有文土器に比べると口径20cm以上の大形のものが多い。器形・口唇の加飾などから以下の如く細分した。

A種：単純に口縁部が外に開く深鉢乃至甕である（254～259）。中で255・258はやゝ表面にへらけずりの形跡があり、その上内面にも多少研磨を加えた黒色の半精製土器であるが例は少ない。257・259の如く器肌がざらざらした感じの粗製土器が多い。また口縁部が内彎した262、反対に「く」の字に頸部が屈曲する260、口縁部が肥厚する263・264・272などは例が少ない。

B種：内面に沈線ある土器である。269～271の如く太い凹線を1本か2本付すものは深鉢、中位の沈線を1本付す282～284は浅鉢を呈する。前者はやゝ厚手．後者は薄手という相違もある。これらは第4類土器との関係が濃厚である。例は多くない。

C種：口縁部に突起をもつ例で20数片ある（65～68）。小突起が2ケ一対で平縁かゆるい波状口縁の波頂部に付されるのみである。焼成・胎土はやゝ良好、内彎した中厚手の鉢形が多い。

D種：口唇部に加飾するグループである。C種と同様20片以上検出されている。口唇の押圧が強く、口縁端に粘土がはみ出し、口縁がぎざぎざを呈する例が多い。大きな指頭痕の274・276・277、刻目や列点を付す273・275、中でも特異なのは、細い粘土紐をX字状に付した279などがある。本種は深鉢・浅鉢に多い。279などは晩期としてよいであろう。器形は種々あり、単純な深鉢の273・274、頸部でくびれる276～279の如き鉢がある。

E種：浅鉢、皿形の無文土器である。261は段状に頸部がくびれる浅鉢で、頸部はあらい研磨痕がある。281・285・286は浅鉢乃至皿であるが半精製が多い。

以上の無文土器をどのように編年区分するか、東海地方の例などを参考として区分すべきだろ

うがまだ本県独自の無文土器分類の基準が不明確なので、こゝでは分類のみにとゞめたい。

土器底部（第２０図２８７～３０８）：底部破片の約２０％に網代痕がある。底部器形は網代痕あるものと変らないので、図示するのは網代底のみとした。大形・中形土器が主で、やゝ上げ底のものもある。２９５は皿の底部に円を沈線で画くものであろう。特徴を摘出することはむずかしい。網代の種類なども今後の研究課題とした。木葉底のないことを付記したい。

注口土器：わずか２ケの注口部のみが検出された（第２２図３３・３４）。他の土器破片から注口土器と推定されるものはなかった。

まとめ：本遺跡発見の土器を主に文様要素を中心に１１類２８種に分類し、説明を加えた。勿論この分類が編年的序列でもないし、最終的基準となるものでない。むしろ今後の捨て石の意味を含め相当無理な方法もとった。いずれ、附近の同種資料を比較して再検討はしたい。今回はいくつかの問題のみ摘出し、大方の教示をお願いしたい。

本県における縄文後・晩期土器の研究は、遺跡数の少なさ、加えて調査例も少なく、縄文土器研究の中では最もおくれ、特に後期は甚しい。しかし晩期は千曲川流域で、佐野・氷二遺跡の正式報告書が刊行され、大きく前進した。それに較べ中・南信地方ではまず資料がやゝ貧弱という点、複合遺跡で編年的分類が不可能という点など、佐野・氷に匹敵する報告がない。たゞ北信で保地、東信で中の沢、中信でエリ穴・石行、南信で平岡南など、個別的に有意義な報告が発表されている。以下簡単にまとめてみたい。

1. 本遺跡出土土器の上限は第１類Ａ種や第２類Ｂ種、第１０類の一部（２４５～２４９）など後期中葉の加曾利Ｂ式、特にⅡ式あたりかと考えられる。しかし問題点としては、この中綾杉文土器を簡単に加曾利Ｂ式に比定してよいかどうかということである。なぜならば、まず本遺跡から円面施文あるようなティピカルな加曾利Ｂ式は１片も出土していないという事実である。結論を先にすれば、綾杉文自体、後期末葉（安行１・２式）まで残存するのではないかと私考している。その理由として、綾杉文と本遺跡で第４類Ａ・Ｂ種の太い沈線文を口縁部に一乃至数本めぐらす手法が、新潟藤生遺跡では明らかに結合しているし、富山勝木原遺跡でも晩期初頭に縄文帯ある土器の胴部文様として存在している。更に本県の中ノ沢ではこの綾杉文の変形した沈線文が主体的に晩期前半土器に伴出し、報告書によれば東海地方－静岡天王山などにも系譜がたどれるという。特に本県にあっては、後期末　の安行１・２式に比定される時期はほとんど解明されていないのである。そこで第２類Ａ種とした安行１・２式類似の土器などがこゝでクローズアップされてこよう。いずれにしても本遺跡の上限が後期中葉から末葉であることは間違いない。
2. 上述した後期末葉問題を考えてみたい。前述したものが未だ安行１・２式に比定される型式名は勿論、内容そのものも本県では不明確である。安行１・２式類似土器は本県でも屢々断片的に発見されているが、型式的考察の可能な資料はない。ために漠然と「後期新」とか「後期後半」として説明されがちであった。これは大半の該期遺跡が後・晩期の複合遺跡であり、晩期前半のみは亀ケ岡系土器の伴出によって容易に編年観が示され、丁度エアポケッ

ト的に後期末葉グループがスポイルされるためではなかっただろうか。本遺跡資料のみでは速断のそしりをまぬがれないが、堀之内・加曾利B式、即ち後期前半までは比較的関東的色彩の濃かった本県に安行1・2式頃ー後半から末葉（更に晩期）にかけて東海地方との交流がより強いファクターでおし進められたのではないか。そのため、末葉の土器そのものが、晩期前半土器との分離が不明確なまゝ特別な考慮をうけなかったと私考する。

では、本遺跡にあってはどうだろう。まず第2類A種の帯縄文ある安行1式土器を基準とし、第3類凸帯文土器、第4類沈線文土器の何種かゞ土着的土器として登場するのではないか。勿論その主体は無文土器であろう。この点まだ確証が把握不充分なので明言できないが、口縁部の肥厚するものか、或は断面三角形の口唇部をもつ類（山形口縁となる場合が多い）、拓影では121～122、145～146などの凸帯文土器と、155・156に示す太い沈線文ある深鉢などである。これらに第2類とした縄文ある土器が付加されるであろう。

以上の如く後期後半は現在の時点ではまだまだ究明されない面が多々ある。特に今後東海地方との関連を重視したい。

3. 次に晩期前半にはいると、佐野遺跡の報告があり、ほとんどその内容に関しては追加すべきものはない。たゞそれ以外本県では、中ノ沢・保地・エリ穴の3遺跡の報告が重要な役割を果しているので、それとの対比を行なってみたい。

まず、佐野に一番近い保地では、亀ケ岡文化外殻地帯としての様相は佐野と同様であるが、より東海地方からの強い波及がある点を指摘している。この点本遺跡など地理的位置からいって当然保地より東海的様相は濃厚であり、反対の意味で「東海地方文化の外殻地帯」としての様相の中に、「亀ケ岡文化」の様相が多少波及しているとの表現も可能である。それは保地・佐野における亀ケ岡系土器の出土に較べ、本遺跡は約3分の1程度しか認められないという事実であろう。ちなみに山梨や関東地方に隣接した中ノ沢よりも更に本遺跡における亀ケ岡系文化の色彩は薄いことも指摘できる。

次に、中ノ沢の報告は非常にユニークなもので、特に報告書が東海地方の該期土器に精通している関係上、土器そのものの捉え方に参考となる部分が多い。「土着の型式」としていち早く凸帯文・沈線文などを区分している点、高く評価されるものであろう。中でも本遺跡との関連をみると土着の型式としたA～G種すべてが合致しないが、Aの凸帯文、Bの口唇部を肥厚させ突起を付すもの、Dの平行沈線文帯あるものなどは、明らかに本遺跡に系譜を同じくするものがある。たゞCの波状沈線文に類似したもの、Eの曲線文様あるもの、Fの沈線間に突割の施されたものなどは、やゝ傾向を異にし、空間的な相違からくる現象と考えられる。中ノ沢では伴出した安行・亀ケ岡両形式とも比較的良好な資料であり、その点幸運であったといえよう。

次に、本遺跡に近いエリ穴に触れてみたい。耳飾を多量に出土し特殊な遺跡として著名なこの遺跡もまだ最後的報告が未刊であり、第1次のみで対比しなければならない点あらかじめ了承されたい。報告書では後期を意識的に除外してあるが、内容的には晩期前半が中心となり、最も本遺跡と類似した土器様相を示す。しかし相違点のみを2、3指摘するならば、

凸帯文土器の内容がやゝ本遺跡とは異る点がある。本遺跡の第3類A種（88～93）などはないらしい。特に顕著なのは第4類沈線文あるグループがあまりバラエティーに富んでおらず、中でも筆者が重視する太い凹線を一乃至二条口縁部へめぐらすもの（172～174）、同じ手法だが内外面により細い沈線をもつもの（181～189）などについての記載が抜けている点やゝ不思議な感がある。未だエリ穴の資料との充分な比較検討を行なっていないのでこれ以上のことは差控えたい。たゞ報告書でみる限りではエリ穴にも晩期前半のみでなく、後期末葉の資料の分離ができそうである。

以上をまとめてみると、晩期前半－関東地方の安行3式、東海地方の大洞B・BC・C_1各型式程度までが、本遺跡の主体的土器であることが言えそうである。特にこの場合、こゝに分類した凸帯文・沈線文ある土器を中心として土着の型式を形成していることである。晩期前半という数型式にわたる時期をまだ細分できぬ点残念であるが、今後今少し研究して明らかにしたい。

4. 最後に本遺跡の下限の問題にはいりたい。当然こゝで第4類C種とした「工字文」系土器が取上げられるだろう。再述するが本遺跡出土のこの種やゝ太い凹線に近い工字文土器は、まとまった資料がない。佐野は勿論、保地・中ノ沢・エリ穴の各遺跡でも余り注意されていない。むしろ後出する氷遺跡の浮線網状文は保地やエリ穴に近い石行で検出されており、特に石行では良好な氷遺跡出土土器類似資料が多く発見されている。さすれば本遺跡の下限は少なくとも氷や石行に認められる大洞A乃至A′式に属する晩期末葉にはすでに遺跡は放棄されていたことになる。換言すればこれら工字文土器は大洞C_1ないしC_2式の 晩期中葉に比定されることになるであろう。その際第5類とした亀ケ岡乃至安行3式の土器などはやゝ古い時期に比定すべきか、或はこの工字文グループと併行さすべきかの問題点も残る。この工字文土器そのものもやはり土着の型式として今後晩期の編年的位置を考えねばならぬだろう。

以上、雑然としたまとめとなったが、時間的余裕のみでなく、筆者自身の力不足のため特に必要な個々の出土土器の検討ができなかった。はじめにも記した如く、今後更に他遺跡資料との比較検討を通し、より前進した論攻を発表したい。参考文献なども充分利用できなかったし、わざわざ資料提供までしていたゞき種々御教示いたゞいた永峯光一氏の御好意にもむくいることができなかった。なお採拓には土屋長久・百瀬升治・白沢幸男・白田武臣各氏の御協力を得た。記して感謝したい。

（樋口昇一）

参考文献

永峯光一他　『佐野』　長野県考古学会研究報告書3　昭42

永峯光一　「氷遺跡の調査とその研究」　石器時代9　昭44

向坂鋼二　「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾」　第四紀研究2ノ1　昭36

藤沢宗平　「松本市北内田エリ穴第2地点遺跡(1)」　信濃19の9　昭42

〃　「松本盆地における縄文文化から弥生文化への推移について」　一志茂樹先生喜寿記念論文集所収　この中に石行遺跡の報告あり

関　孝　一　「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」　考古学雑誌５１の３　昭４１
立教大学博物館県講座調査報告４　「葦生遺跡」　昭４２
小島俊彰他　「勝木原遺跡Ⅰ」　富山県立高岡工芸高校地歴クラブ　昭４２

12 土製品　（図版１８・１９、第２１図）

土偶とはっきり断定できるものは２個のみで他はやゝ不明確である。図版１８の下の土偶首部が本遺跡調査の契機となったものである。この首部と後日発掘の結果発見された同図版上の体部とが同一個体かどうか、現在でも意見が統一されない。一応こゝでは別個体として説明したい。

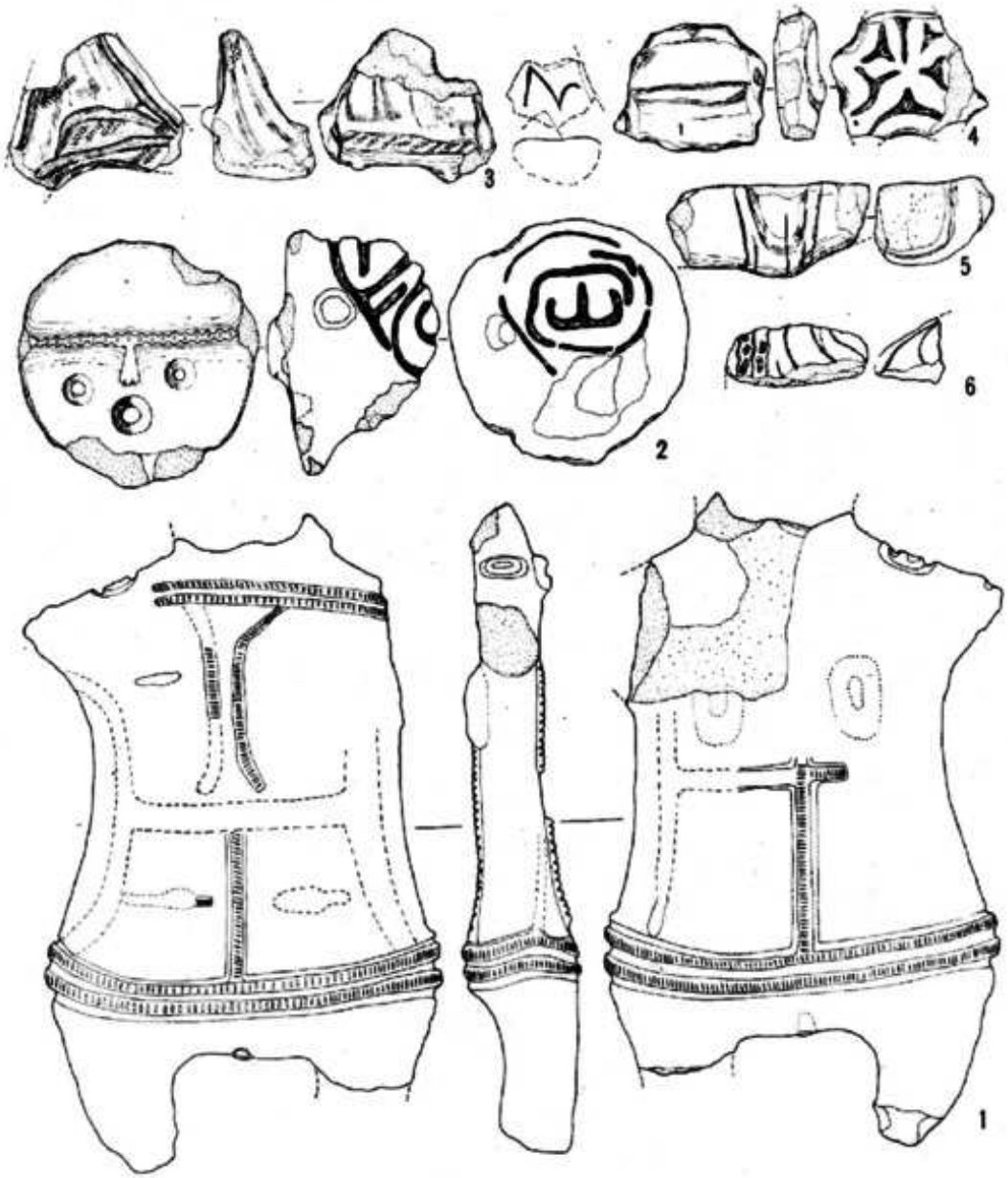
まず首部から述べてみよう。巾９.５cm．厚さ７cmで、顔面は円形に近く、後頭部が相当の厚みをもち、一部欠損する部分があるが、ほゞ現形をとどめる首部である。まゆは刺突文あるやゝ高い粘土紐で直線的に表現され、その中心から短く太い鼻が垂下し、先端には小さな鼻孔が浅く形式的に付けられている。目は径１.３cmの円形の粘土塊に浅い凹みをつけて作られており、右目がやゝ下っている。鼻の直下に径１.５cmの口がやゝ右にまがって、０.７cmの穴をあけて作られている。まゆ・鼻・目の凸部と口の凹部以外はほとんど平坦で、他に装飾らしきものは何もない。土偶特有の非常に簡単な造形ながら、半ば開いた口、単純な目など、あどけなさと素朴さの表情がよく描出されている。まゆの両端が欠損しているが、或は耳などの付加物があったかどうか不明である。

顔の正面に対し、後頭部に特徴あるのが本品であろう。半球上に突出した後頭部の中央には「山」の字風の沈線文を中心として渦巻状の曲線文が太い凹線で付けられている。何かマジカルな意味をもつものか、或はマゲの類の表現か？

全体に相当の重量があり、この首部を支える胴部は当然大形となるだろう。胎土には小石粒が混入されているが、作りは比較的良好で、全体に灰黄色の白っぽい感じがする。欠損部からみると次の胴部とはやゝ胎土など相違がありそうである。

次に体部は現長２５.０cm、巾１５.５cm、厚さは最大部の腰で４.７cmを計る大形品である。首・右腕・右足を欠損するほか、体部の文様帯に剝落部が多少ある。断面図でわかる如く起伏凹凸の少ない板状土偶である。

まず全体的にみると、短い水平に広げた両手と、同じく短く太いやゝ内側に彎曲した両足を含め、長方形の板状をとるが、腰部がやはり厚さも前後から巾を増して最厚部となる。体部文様はすべて刻目ある凸帯によって飾られており、その側端に沈線が加えられるのみである。表面の両乳房は剝落しているが痕跡からみると同じ凸帯が粘土塊により表現されたらしい。痕跡は環状だが造られた乳房もそうとはいえないらしい。長さ３.３、巾２.２cmを計る。みぞおち部分から十字形の文様帯が腰部まで付されるが、剝落部からすると左脇ははじから付けられなかったらしい。この胴部の表現が何を意味するのかよくわからない。腰部は２本の凸帯が裏面までめぐり、両足がやゝ内側につぼまって付けられている。この両足の中央に下から巾８mm程度の小孔を深さ１cmほど穿っている。陰部であろう。

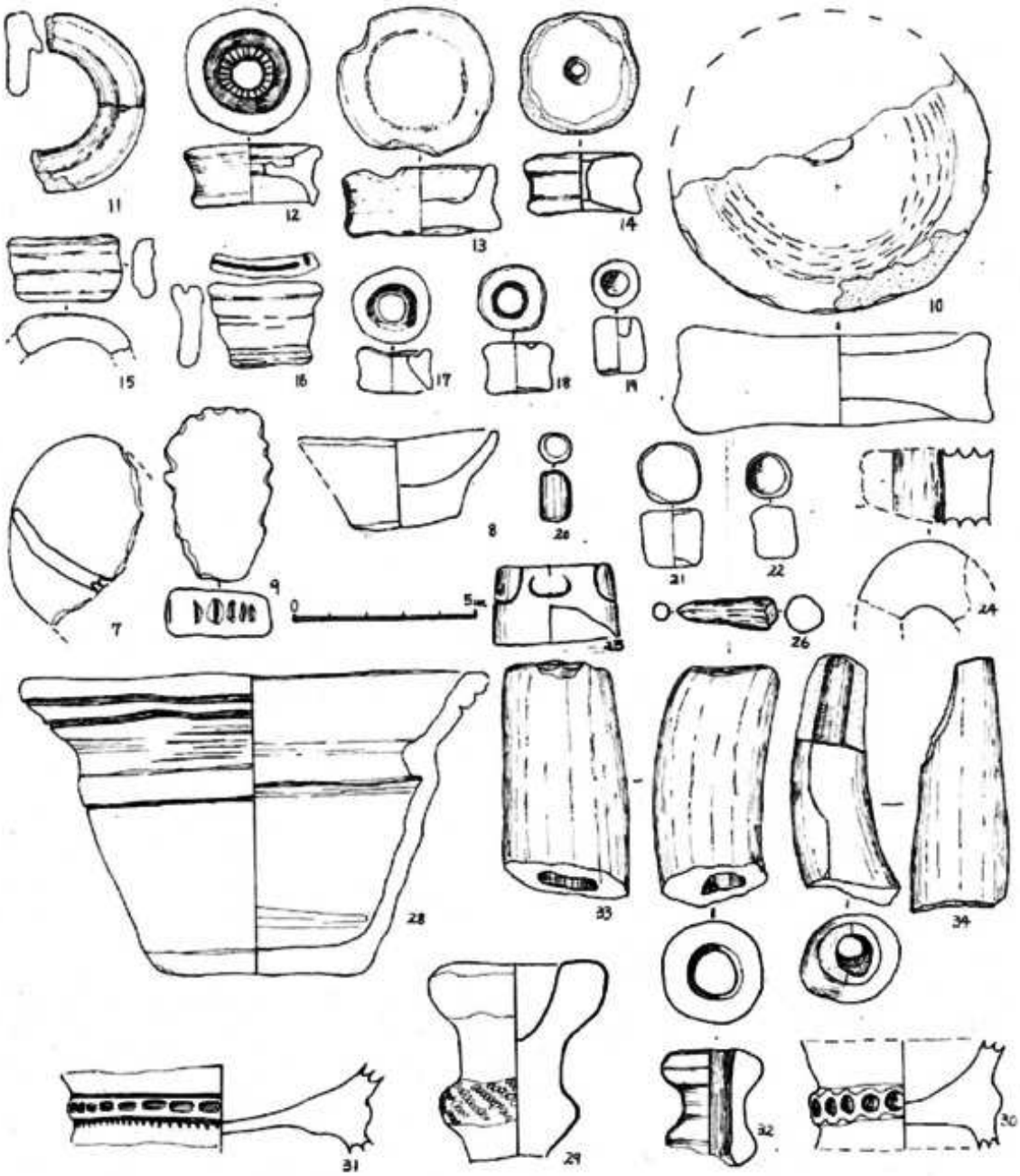


第21図　大型土偶および土製品実測図（1：3）

裏面の文様帯もまったく同一の凸帯であるが、脇腹などにやゝ太い部分がある。文様そのものはむしろ裏面の方が複雑で、肩に2条、胸部には細長いX状、下腹部には横に2つのシャモジ状の凸帯がそれぞれ表面の文様帯以外追加されている。

足は右足が欠損しているが、左足も先端がやゝ欠損し、果してこの程度かどうか考慮すべき点もある。足の指の表現など不明であるが、一面この足だけで全体を支えられるかどうか理解に苦しむ点もある。垂直に立たないとすれば、その使用法などおのづから限定されてくる。

胎土には繊維痕などの挟雑される部分があってやゝ悪いが、足の先などをみると先の首部とま



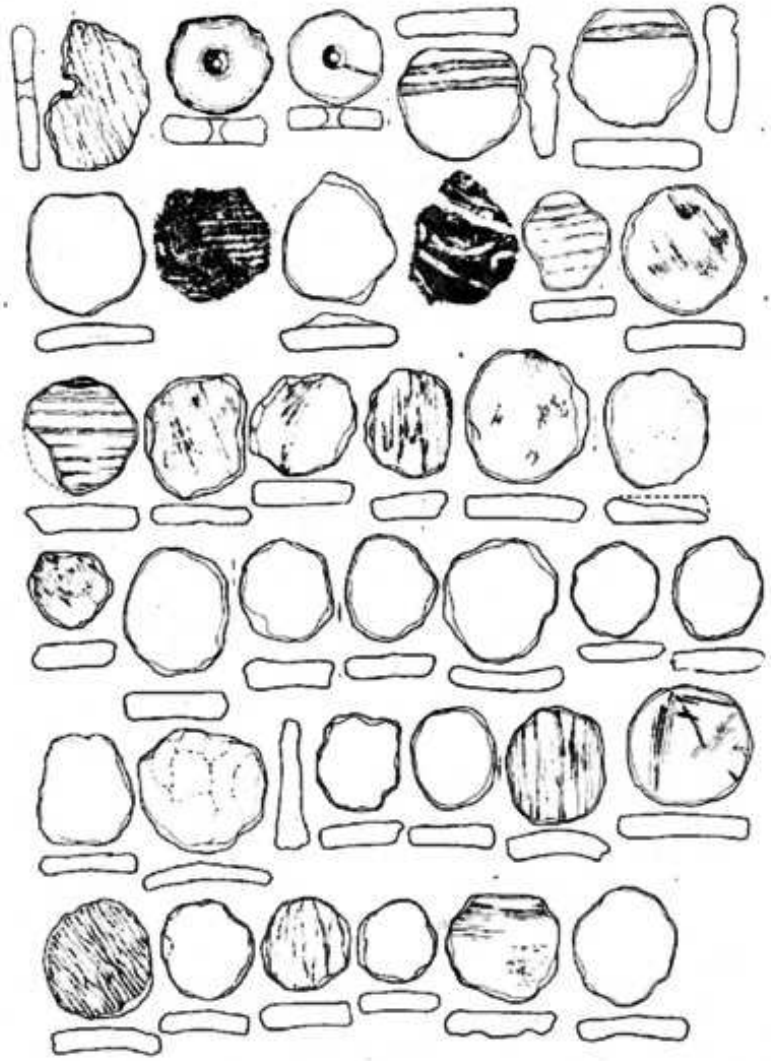
第２２図　土製耳飾および土製品実測図（１：２）

ったく同じ作りである。全体的に泥湿地から検出されたという点を考慮しても晩期特有の光沢のある土偶などに較べて、やゝ精巧な作りとはいえない。

次にこの１・２の土偶の時期であるが、土器文様の中の凸帯文とほとんど同じであり晩期前半としてよいのではないか。

この他土偶らしい形状の破片が２、３ある。第２１図３は現形はほゞ三角形であるが、その頂

点がすべて欠損しており、側面は加工のあとがあり、推定した復元の形状もさだかでない。表面には太い沈線でわくどりされ、下辺には縄文を付した突起があって「ヘソ」とも考えられる。断面図にみる如く、上部は薄く下辺が厚い。裏面にも縄文を付した凸帯がある。黒灰色でかたい作りである。第1地区C3区発見。



第23図　土製円盤実測図（その1）（1：3）

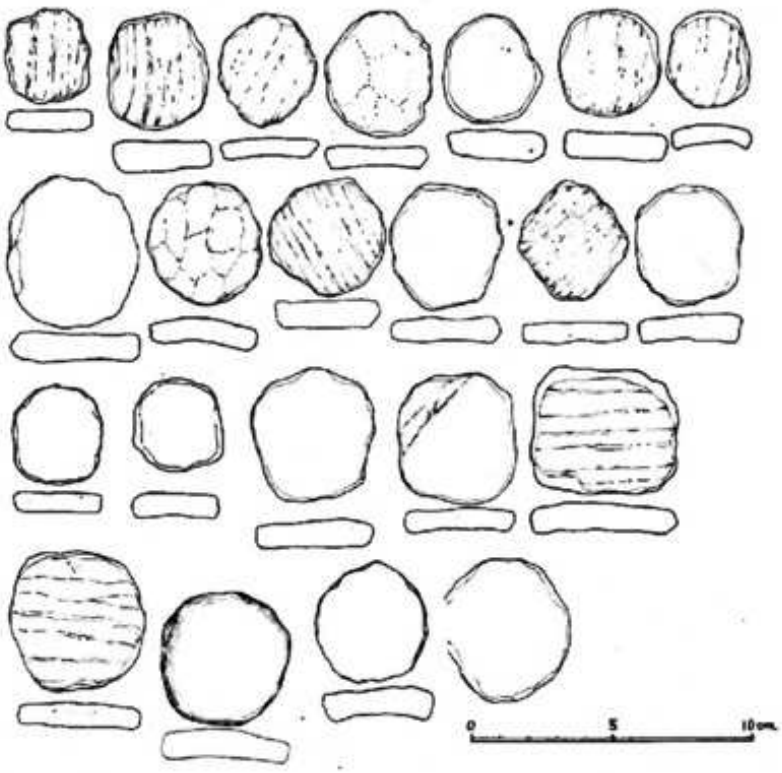
5もまったく不明の土製品である。図の上側面と両側が欠損している。中央部が高く隆起し、その両側に2本の沈線がひかれている。土偶としてもどの部分か？むしろ独鈷石状の土製品かとも考えたがさだかでない。小石粒や砂をやゝ多めに含む粗い作りである。黄褐色、出土地点は3と同じである。

この他図示しないが足部と考えられるものもある。足の長さ3.5㎝、巾2.0㎝、厚さ5㎜で太い足首部らしい。文様その他は不明で、黒褐色のやゝ粗い作りである。小形土偶の足としてよいであろう。第1地区C5区出土。

耳　飾　（図版19、第22図10～24）

15個発見され種類も多い。10は半欠品であるが、装飾の全然ない滑車型で、直径約9㎝、厚さ2.5㎝の大型品である。製作はやゝ粗で研磨部分も光沢が余りない。12は中心の穴附近に放射状の沈線文を加飾した薄手精巧なものである。すかし彫りなどはないが、今回の発掘品では

最良品である。この１２を小形化したものが１７である。１３は内面が深く凹んでおり、反対に中心に小孔のある１４は表裏面とも凹みが浅い。18～22は臼状乃至栓状耳飾の小形品である。最少の２０が長さ1.4㎝、径８㎜を計る。１１・１５・１６は環状耳飾であろう。復元すれば直径７～８㎝の大型品となる。この他２４も同類にはいるかも知れない。２３は文様ある例である。良好な作りである。



第２４図　土製円盤実測図（その２）（１：３）

以上耳飾について述べたが、滑車型にしろ、環状にしろ、晩期特有のすかし彫り手法がほとんどないことが注意される。エリ穴遺跡では有文の例が少なくない。ほゞ同時期の遺跡ではあるがエリ穴は耳飾製造址と考えられており、遺跡の性格に起因する現象か、或は時期的な相違か今後更に検討したい。

円　盤　（図版第２０、第23、24図）

５０ケ以上が発見された。すべて土器片を利用し、周辺を打ちかいたり研磨した、直径４㎝前後のものである。最大は約5㎝、最小は3㎝である。文様の残るものがあって時期が判明するがほゞ伴出土器と同じくするようである。形式的には中心に一孔あるものとないものに大別できる。その使用法については未だ定説はない。ちなみに同期の遺跡を検するに保地－６、佐野－６、氷－約３０などで本遺跡は多い方である。最近調査した後期を中心とした南安雌山遺跡も相当量発見された由であり、今後は使用法と共にその所属する時期も追及すべきであろう。

その他の土製品　（図版１９、第２１図）

第２１図４は土版などにみられる三叉文的な半円彫り風の文様が注意される。形状的に土版とすれば表面が平坦でないのみか欠損部がやゝおかしいし、土偶の一部としても欠損部からは復元が不可能である。胎土・焼成など良い黒褐色を呈し、一部に朱彩が認められる。同６は現有部の

二面が明らかに剝落したあとを示し、図示した列点文と沈線文ある面のみが残っている。これまた欠損部から考えて、土器の突起、土偶など形状がまったく不明である。第２２図７は薄い作りで、スプーン状の一部欠損品である。これは把手などでなく独立した土製品であろう。同９は長楕円形の周辺にわずかの刻目をつけ、側面にも同じ刻目をつけた板状出土製品で、これまた類例がなくこのままでは名称も使用目的も不明である。同２６は角状に研磨したもの、同２９(1)３２は把手の一部と思うが、２９などは他の用途も考えられる。

第２節　石器及び石製品

(1) 石　鏃.　　(図版２１、第２５図)

出土石鏃の総数は５０点であり、石質は黒曜石製が３６点、チャート製が１７点である。出土地点別には第１地点では、Ａトレンチより１４点、Ｃ－２０点、Ｅ－２点、Ｄ－２点、Ｇ－４点、第２地点のＡトレンチ２点、Ｂ－４点、採集品は５点である。

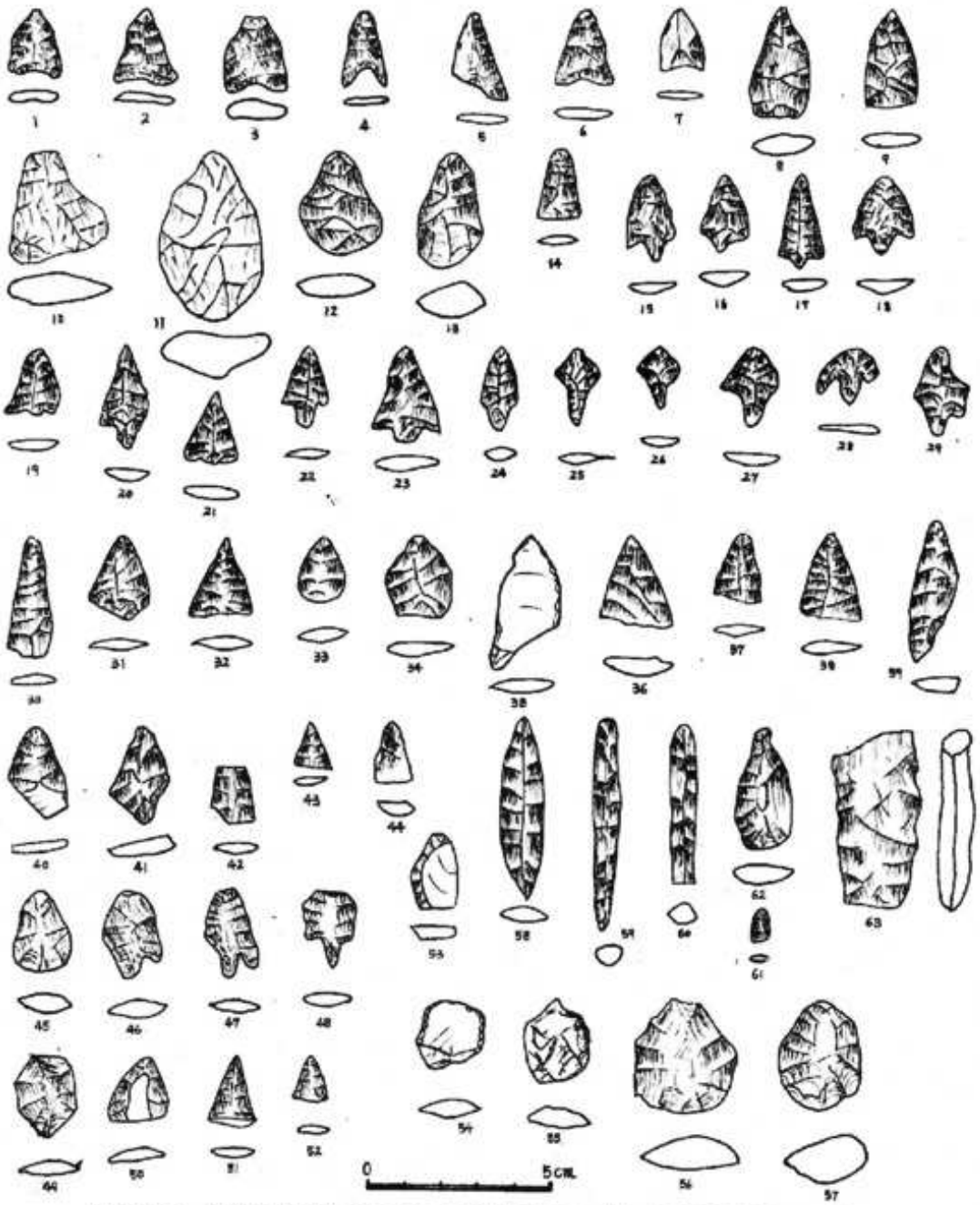
形態別に分けると、無茎と有茎鏃に大別され、無茎１４点、有茎２１点、欠損のため明らかにし得ないものが１５点である。無茎鏃の中には三角形の底辺をくぼませたものが６点、平なものが５点、底辺のふくれたものが３点である。有茎鏃２１点の中には五角形の２９、４８があり、３３は有茎の部分だけが欠けたものらしく、有茎の石鏃としては変った形である。材質でみると無茎石鏃では黒曜石製が７点、チャート製は４点、有茎石鏃では黒曜石製が１５、チャート製が６点である。５３は石鏃の欠損したものであるかもしれないがはっきりしない。採集によるものは、５点で、１３・２７・３４・３９・５１である。

(2) 石　槍　　(図版２１、第２５図)

石槍とするには問題があると考えられるが一応５８を石槍としておきたい。石材はチャートである。出土地点は第２地点のＡトレンチである。

(3) 石　錐　　(図版２１、第２５図)

石錐は３点発見され、石材は６１の黒曜石を除いてはチャートである。６０も一部が欠けてお



第25図　石器実測図（その１）（石鏃・石槍・石錐・不明石器）（1：2）

り、完全なものは５９のみである。

(4) **不明石器**　　（図版２１、第２５図）

不明とした石器は９点あり、石質は黒耀石が、５５～５７、６２、チャートが１０、１１、

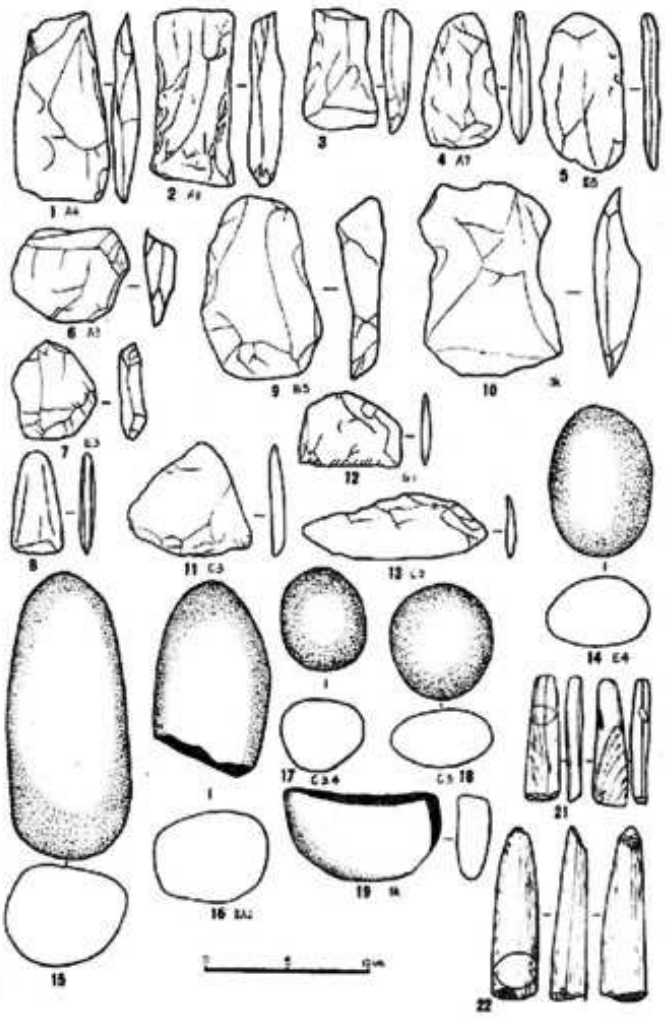
６３であり出土地点別はＡトレンチが１１・５６・５７、Ｃトレンチが１０・６２・６３、Ｄトレンチが５３、第２地点Ｂトレンチが５４である。６２はつまみらしいものがあるが、はっきりしない。

(5) 石　斧　　（図版２２、第２６図）

石斧は８点出土し、内７点は打製石斧であり、１点が磨製石斧である。石質は粘板岩であり、打製石斧は３・６・７を除いては完形品である。出土地別は、Ａトレンチより１・２・３・４・６、Ｅトレンチより７・９が出土し、８は磨製石斧であるが、施工業者により工事中に採集されたものである。

(6) 礫　器　　（図版２２、第２６図）

こゝに取上げた礫器は、その名称も不適であるかもしれないし、石器かどうかの疑問もあるが、一応礫器として報告する。９は大きく打欠いていて、打製石斧に類似するが、製作手法においてやゝ違った点が感じられる。１０は自然面が半面にのこり、特に中央を欠いて一見撥形の石斧と考えさせるが、石斧を製作しようとした意図とは別な手法を感じる。両者の石質は砂岩であり、他の１～８迄の石斧とは石材が違っており、用途の別を考えたい。



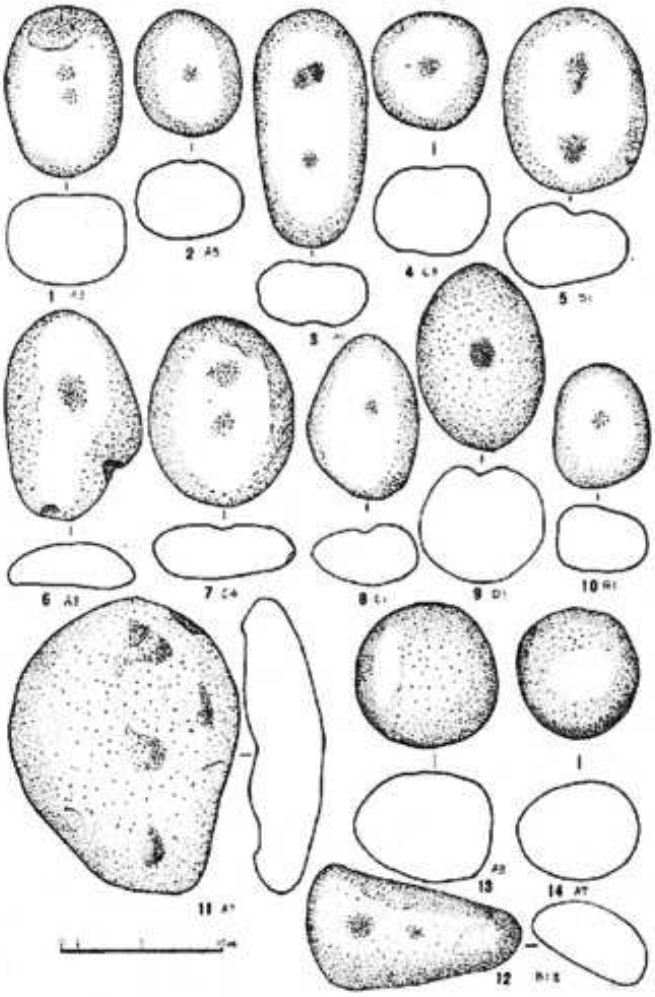
第２６図　石器実測図（その２）
（石斧・礫器・磨石・石刀）（１：５）

(7) 凹　石

（図版２３、第２６・２７図）

凹石は１２個出土しており石質は石英安山岩のものが多く、女鳥羽川のものを利用したと考えられる。１０は砂岩で石質を異にし、使用痕も浅い。１１はやゝ大きくなり穴のくぼみ方も他の石とは違っており、凹石とは違った用途をもつものであるかも知れないが類

似しているので凹石とした。１～１０までの９を除いた凹石は何れも磨いた面をもっており、磨石としても利用され、両面が利用されているものもある。出土地点は、Ａトレンチが１・２・３・６・７、Ｃトレンチが４・７・８、Ｄトレンチが５・９Ｇトレンチが１０で１２は第２地点のＢトレンチ出土である。



第２７図　石器実測図（その３）（１：５）

(8) 磨　石

（図版２３、第２６・２７図）

磨石は８個あり石質は１６の砂岩をのぞき他は石英安山岩である。使用された面が凹石と同様に両面にあるものがある。出土地点別は、１３・１４がＡトレンチ、１７・１８がＣトレンチ、１４はＥトレンチ、１６は第２地点のＡトレンチ、１５・１９は採集品である。

(9) 石　刀　　（図版２４）

半欠品が３点出土した。２１は第１地点のＤトレンチ、２２は同Ｂトレンチ。２０は第２地点Ａトレンチの腐層内より発見された。石質は３点共粘板岩で、２０・２１が黒色に近く、２２は青灰色を呈す。２１・２２は刃部が作られている。２０は頭部で、飾りに矩形の文様が左右に刻まれ、その様には細かな刻目があったらしいが今は消えて一部分にしか見られない。また全体に漆が塗られていたらしく、赤漆の残部が処々に見受けられるが特に付根附近がよくわかる。文様からして縄文晩期の優品の一例であろう。

(10) 剥片石器　　（図版２１、第２５図）

こゝに取上げた剥片の石質は打製石斧等と同じ粘板岩であり、石器とするには異論もあると考えられるが、３片共調整痕か使用痕とみられるものがあり、石器として報告する。偶然の一致で

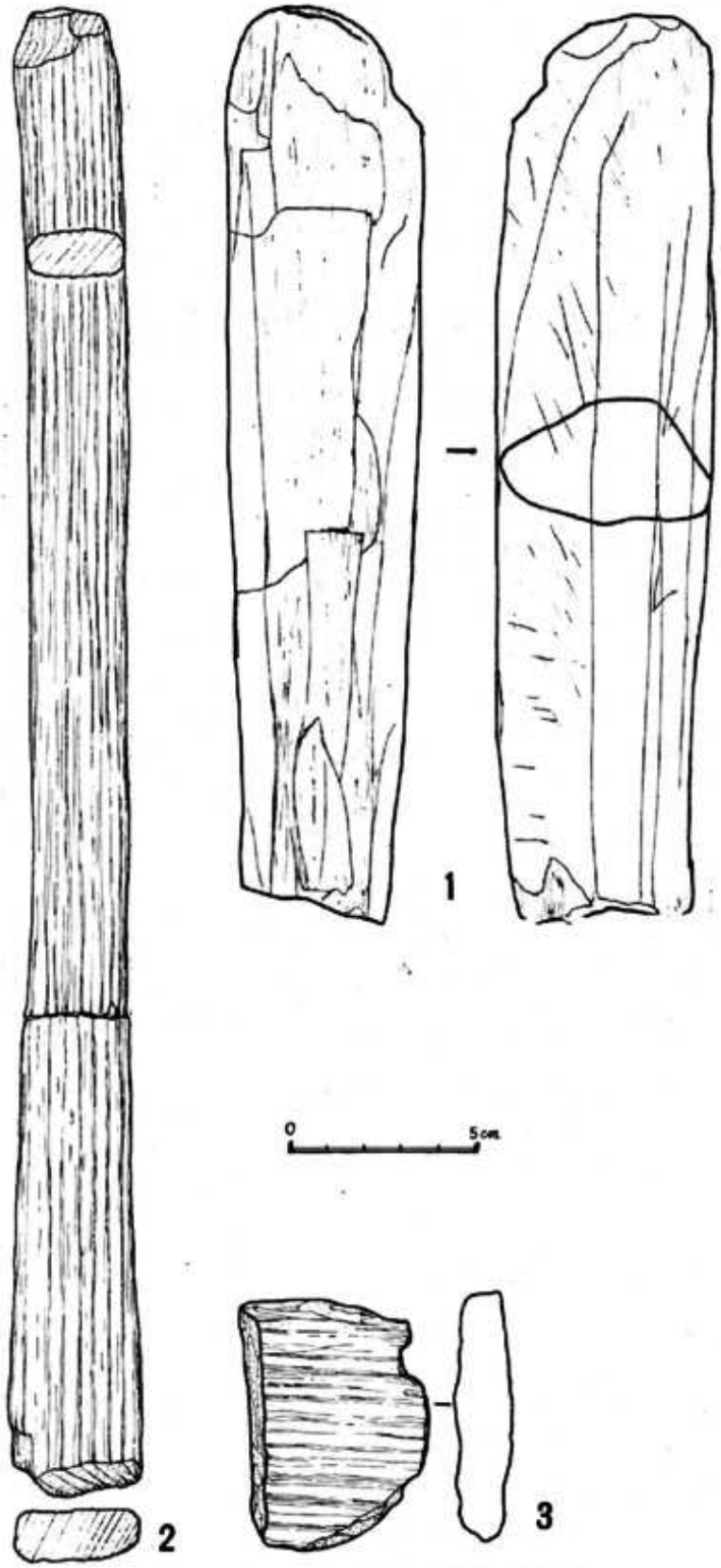
あるか、この3片が弥生式の石庖丁に石質・形態が類似し、12は少し欠けている。稲作に使用された石庖丁としても、今回の調査で稲作があったとする植物性の遺物は花粉以外は発見されず、たゞ遺跡立地が稲作に都合がよかったと考えられる位である。しかし稲作が縄文晩期より始まったと考えられないこともないと思われ、このころより一部の試作があったと考える時、3片を石庖丁の祖形として考えたいので報告をしておく。

(11) 砥　石

（図版24,第28図）

砥石はBトレンチの出土であり、土師期の砥石として間違いないであろう。石質は粘板岩で、割れて半面がのこったもので、三面にかなり使用した痕が見られる。

（小松　虔）



第28図　砥石および木製品実測図（1：2）

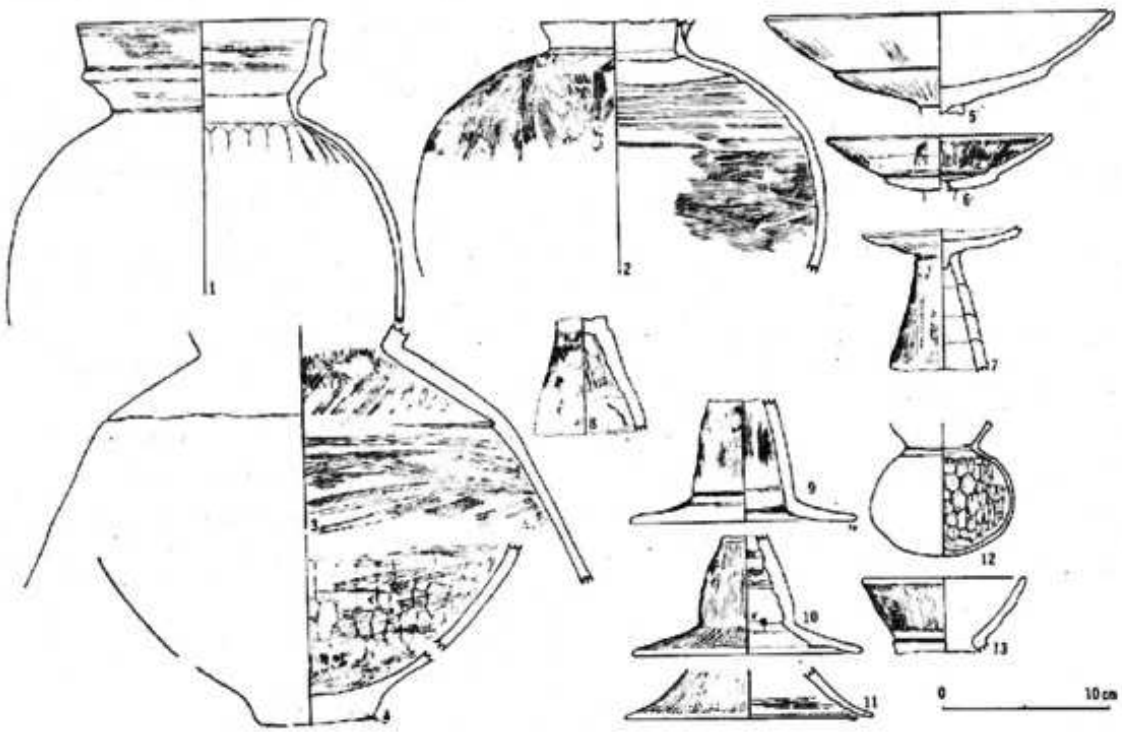
第３節　土師器・その他

第１地点Ｂ・Ｆトレンチを中心に、青灰色シエルト層を切って構築された溝は、浅いもので、南北に蛇行し、溝内より土師器等が発見されている。溝は上部で幅１．５m～１．７m、底幅０．４m～０．５５mで、ほゞ南北に走り、深さ２０cm～３０cmの規模で、壁は緩傾斜している。底部に自然礫が露出し、土師器片が散在し、被覆層は、植物質繊維を含む腐蝕土で、これには縄文後晩期土器片が多量に包含していた。

遺構付近の層序は、現河床礫面下１００cmで、遺物包含層の黒色腐蝕土、次に青灰色堆砂粘土、青灰色粘土層となり、青灰色粘土層は深志シエルト層といわれるもので、きわめて厚く、Ｈトレンチでも約２mとなり、女鳥羽川旧河床礫層となっている。

遺物は、溝に密着し検出され、器形の判明するものは１３点となる。甕・高杯・壺形に近い土器・小形丸底、いずれも溝の傾斜した壁上にあり、その他多くの破片があり、それらの土器片はいずれもまめつはなく、新鮮な色調が観察される。丸材・角材のクイに交わり散在する。クイにそってＥトレンチ２区から別記の如く砥石１箇が発見されている。

さて、溝址の性格であるが、調査地が限定されており、判然としない。流域に形成される自然溝か、人工的な用水溝等と推定される。またここは縄文後・晩期、特に土偶の伴う集石址遺構面よりも約３０cm低い位置にあたる。Ｄトレンチ断面では、砂の混入した青灰色と黒色粘土層が幾重にも



第29図　土師器実測図（1：5）

堆積し、砂質礫層の堆積が観察されている。用水溝及び礫層から出土した遺物の大半は土師器であって、その他には女鳥羽川現河床礫、及び湯川流入口の礫層から、灰釉陶器片・須恵器片の検出があったにすぎない。

(1) 土師器　　(第29図・30図)

① 甕形土器

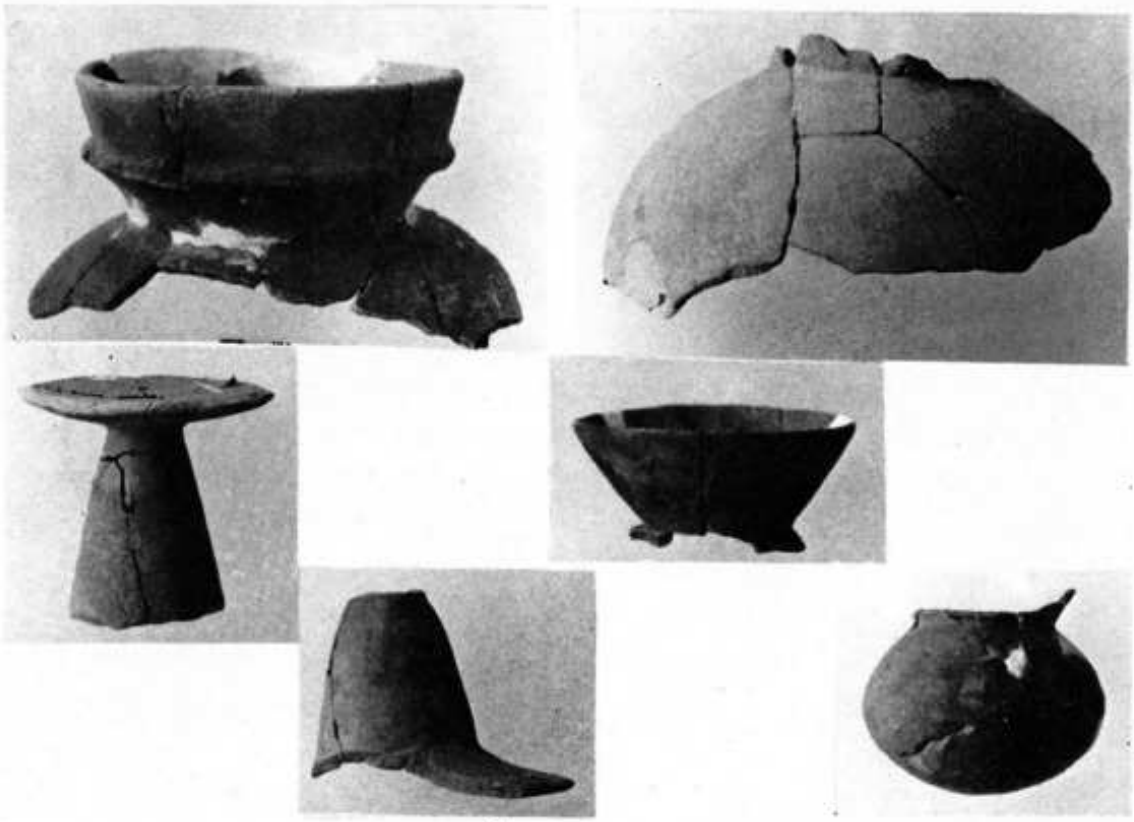
1は口径14.8cm、胴部以下は欠損する。口縁部は器厚0.9cmを計り、やや直状を呈し、口頸部に至り、強い「くの字」状となる。口縁部に鋭く稜線が出ており、器面内外共にヘラ状工具により横に良く研磨されている。胴部は卵形に近い壺状を呈する。内面は調整をみない。胎土は良質の精選された青灰色粘土を用いており、白砂粒子の混入がみられる。焼成は良く、固い感じを与え、外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈している。2は口縁部の欠損をみて、口頸部と胴部のみであるが、口頸部は1同様強く外反りを呈し、むしろ壺形土器に近いといって良い。口縁の器形は判明しないが口頸部の幅は8.2cmである。器面、口頸部及び土器内側は横のそして、外側は縦のヘラ状工具で研磨され、ことに内側の一部には刷毛による調整がみられる。色調は内外淡赤色をなし、その器厚は0.8cm、胎土は青灰色粘土層を用いており、白細砂・黒雲母の混入が認められる。3・4は溝西壁より発見されたもので、同一個体である。この中にはいって伴出したのが13の小形丸底形土師器である。3は色調・黒灰色に変じ、壺に近い器形を呈し、口縁部は欠損し、口頸部は1・2同様に強い外反りを呈している。胴部上方は軽い稜線がみられ、土器の胴部と上部の接合部が観察され、輪積のあとを残している。器面内外部は良く研磨されており、内面はヘラ整形あるいは指による整形が行なわれている。また底は軽いあげ底となっている。胴部の幅、現高は34cmである。

② 高坏形土器

高坏は個体数8以上に及び、全形を残すものはないが、製作にあたって、坏と脚が別個に作られた後、接合された傾向がみられる。いずれも欠損品で、坏は口辺部から緩く張りのあるカーブを描いて外反し、5・6では口縁部と底部接合部の稜が段をなし、鋭く出ており、口辺の外反度が強く、口唇部は反転する傾向を示している。一般にはヘラによる縦の研磨が施されている。焼成は良好で固い焼となり茶褐色を呈する。脚台は反転するような拡がりをみせ、全体に裾広になるものと(9・10)、中膨みの柱状部が存するもの(8・10)、及び柱状部が直線的なものとなるもの(7)がある。坏と脚の接合には何れも坏から出たほぞ状の突出部が観察され、脚の整形は、輪積み手法により、内面にその痕跡が著しいが、9・10ではヘラで縦方向の整備が加えられている。表面の調整はヘラ状工具による縦の研磨が一般的で、台における横方向の整形がみられるものもある。色調は赤褐色を呈し、焼成良好のもので、胎土は青灰色を示し、中には白色・黒灰色に変色化しているものもある。欠損した坏から全容をみるに、高さ13～14cm程のものと推定される。

③ 小形丸底土器

12は若干扁平気味の球形胴部に、外反する直線状の口縁がつけられ、器面の表側は、よく



第30図　B・Fトレンチ発見土師器

研磨されており、内面は指により整形され、縦にヘラを加えている。口径10.2㎝、高さ10.1㎝で、胴部幅は　9.5㎝となっている。色調は黒褐色、口縁は緩らかなカーブをなし外反している。ヘラ状工具で良く研磨されており、色調は赤褐色となっている。

(2) 灰釉陶器

湯川河口付近礫堆積層に検出された破片2点で器形全容は判明しないが、坏形土器らしく、白黄色をなし、灰釉でも新しい時期と推定される。

(3) 須恵器

灰釉片に交じて、礫層中より3点出土し、大形甕片で器厚0.8㎝を計る。青灰色をなし、器面には浅い条痕が観察される。

以上女鳥羽川遺跡における土師器・灰釉陶器・須恵器を述べてきたがこの一群の土器をみると、総体的には関東の和泉式土器に対比される器形上の特徴を多分にもっている。特に高坏の様相は、更埴市城の内遺跡（註1）出土の土師器の古い部分や、小県郡丸子町鳥羽山洞穴（註2）の埋葬例や、上高井郡小布施町堀回遺跡（註3）、農耕祭祀である長野市駒沢祭祀遺跡（註4）、最近調査

された住居址内から滑石製石器の検出をみた、下伊那郡阿智村中原遺跡（註５）．小形丸底土器の多量伴出した松本市岡田区山伏塚遺跡（註６）等に通じるもので、これ等は平出第２様式に併行されるものと思われる。しかし小形丸底土器は、若干新しい現象を呈しはじめており、岡田山伏塚同様和泉式の新しい部分に属するものであろう。以下小形丸底土器出土遺跡を表に示しておこう。

小形丸底形土師器出土遺跡一覧表第１表

番号	遺　跡　名	遺　構	個数	伴　出　遺　品	文献
1	小県・丸子・鳥羽山洞穴	洞穴埋葬			註２
2	上高井・小布施・堀	住居址			註３
3	更埴・城の内	住居址			註１
4	長野・駒沢新町	祭　祀	多数	甕，高坏，坏，滑石製祭器	註４
5	松本・岡田・山伏塚	住居址	6	甕(1)，高坏(1)	註５
6	松本・女鳥羽川	溝	2	甕(3)，高坏(8)	
7	塩尻・平出	住居址			『平出』
8	茅野・下原				
9	下伊那・阿智・中原	住居址	3	甕(2)，高坏(5)，坏(1)，滑石製祭器	註５

（土屋長久）

註１　木代修一、岩崎卓也「城の内」更埴市教育委員会
　　岩崎卓也「古式土師器考」考古学雑誌４８の３
２　関　孝一「東信濃鳥羽山洞穴における古代祭祀遺跡」考古学雑誌５２の３
３　永峯光一「長野県上高井郡小布施町中条堀　古墳時代住居址調査報告」信濃７の３
４　大場磐雄「長野市駒沢新町農耕祭祀遺跡について」信濃１８の８
５　大沢和夫・宮沢恒之他「長野県下伊那郡阿智村中原遺跡調査報告」長野県考古学会誌６
６　昭和４５年５月小松康氏の調査による。
　　藤沢宗平「浅間付近における弥生・土師・須恵遺跡とその遺物」長野県東筑摩郡本郷村

第４節　木　製　遺　物

この遺跡は、低湿地遺跡の特徴である有機物の残存状態が良好であるから、生物遺体や木製品などの発見が顕著であった。

木製品などが、比較的多量に発掘された遺跡として県下では、上伊那郡箕輪町箕輪遺跡（弥生中期以降）や、当地方では東筑摩郡本郷村大（大村）字堂田の大村廃寺址（平安末期以後）などがある。これらは共に自然流の沿辺に所在する低湿地遺跡である。

本遺跡が縄文時代後晩期と古墳時代和泉期（土師器）との一部複合した遺跡とはいえ、後述のように木製品の出土した地層が、縄文式土石器を包含する地層と相違している点から縄文・土師両時

代を同一遺跡の中で考えるために必要な遺跡地点と言える。

木製品の出土した地点は、C4区・B1区～7区・F1区～5区・D3区～4区・G2区～4区内にかけて、北北西から南南東に走る溝状遺跡（当時は自然の小流）の内外からであった。この外縄文土器を多量に出したAトレンチ7区・同拡張区、Aトレンチ6区拡張部から発見された木製品については、その層位が、縄文土器包含層の上層に位置しており、また土師器包含層と同時代層と推定されることから、この木製遺物も同期と見做してもよいとは、当然である。

これらこの遺跡から出土した木製品は大別して、建築材・土木材・その他に分類される。

建築材は全部丸太を縦に四つ割とし、内側を若干剝ぎ取ったもので、断面が台形をなすいわゆる博木形材であって、その割面などには刃物による加工のあとが見られないので、割ったまま建築材として利用されたものらしい。以下一覧表をかゝげ個々について簡単な説明を加えよう。

番	出土地	備考	番	出土地	備考
1	F2	材木（丸）	28	F1	材木（丸）
2	B4	立状クイ（丸）	29	B1	横状材木
9	B4．F3	材木・クイ（丸）	30	G3・4	立状クイ（丸）
11	C4	材木・立状クイ（丸）4本	32	F1	加工状木器
12	F5	材木（丸）先端加工有	33	B1	材木（角）
16	F2	立状クイ（丸）	34	F1	クイ
19	F3	立状クイ（丸）径6cm	35	B4・5	木クイ
20	F3	立状クイ（丸）径4cm	36	B5	木クイ
21	F4	立状クイ（丸）径6cm	38	B2	木クイ（丸）
22	F4	木製品　長さ39.7cm	42	A7・拡	クイ
23	F4	横状クイ	43	A6・拡	クイ
25	D4	立状クイ（丸）径6cm	45		クイ
26	D3	材木（丸）径10cm			

第7図№26は、長さ2m80cm、約10cm余で、溝状遺構を直角に横断し、中央部でくの字形に折損しており、材質はもろくその形を残存しているに過ぎない。№29は、長さ32cm、巾6cmの三角柱状のものである。№42は、1本の打込の杭を中心として、放射状に、長さ18～22cm 3～5cm角の5本が発見されているが、何に使用されたものか不明である。

土木材としてみられるものは杭で、その出土した場所も溝状遺構内から横倒れのままのものと、この遺構の沿辺に杭として利用された状態のまま発見されたものとに分けられる。前者はここより上流で使用されていたものが、流れてきたものか、またはここで使用された後に投込まれたものか、一部分の発掘のため全体を知ることは困難である。

溝状遺構内からのものは遺構に並行し水平状態のままで、尖先を南方に向け出土したもので、長さ2.2m直径7cmであって、尖端は鋭利な斧などによって切られている。そしてその偏面からは、

鉄の角釘が打込まれた孔の配列のあとが残されているから、単に杭として利用されたものか、または建築材として併用されたものか不明である。

№12は、溝状遺構の中へ東岸辺から、尖端を斜め下にして、流れ込んだ様子であった。長さ45cm、直径8cmで、尖端は鋭利な刃物によって、切られており、他の一端は腐ち折れていた。№20のものは、溝状遺構に対して、直角に水平の状態のままで発見された、長さ1.28m、直径7～8cmで、西側にある尖端は刃物によって前記のように切られており、かつ皮の付いたままであった。№1は境界線上から、溝状遺構に対し直角で水平状態のまま尖端を西に向けて幾つにも折れ損じていた。長さ1.48m、直径5、6cmで尖端は前例の如く削られていた。№34は、溝状遺構の西岸沿辺から水平状態で出土した、尖端は前例の如くであって、長さ40cm、直径7cmである。

この外に№25、35、36、37、43の5本の木製品は、主として水平状態で発見され、長さは40cm～90cm、直径3cm～5cmの木材であって、杭であるものか、または単なる棒であるものか判別に困難であった。

実際には、杭として現場で使用されたものは、前記溝状遺構の西岸沿辺上に配列して打込まれている№7、№28、№16、№19、20、№21、23、№27、Gトレンチ2区内の1本、Cトレンチ2区の1本の10箇所と、Gトレンチ3区の1本が溝の中心にありBトレンチ4区№2、1本のみ遺構の東岸にある。その外はなれてAトレンチ7区拡張№42が1本あるが、これらは総べて直径6cm～8cmのなら・くぬぎ・くりなどの木材を皮付きのまま下端を鋭利な斧などによって削られ、黒色腐植土層下にある青色砂礫層まで25cm～30cm位深く打込まれている、この配列については第1図を参照されたい。尚以上の建築材、土木材共に木材としては原形を留めているが、その木としての性質は完全に失われており、さわればぼろぼろに分解する状態である。

其の他注意すべきものとしてFトレンチ4区№22がある。（第28図1）長さ39.7cm、巾2cm、厚さ1.1cmの板状材である、製作は丸太を割って作られ一方を刃物によって削られている、溝状遺構の中へ、尖端を下にして約45度角で発見されたもので、その使用目的は祭器として、幣の心木とも推考されるが、また他の使用目的があったものか判然としていない。材質は松と見られ他の木製品と異なり保存状態が良くて堅い、現状では二つに折れてはいるが、発見時は1本のものであったが、発掘の際不注意によって、折損したのは残念である。

以上の木製品全部は、黒色腐植土層及びその下層にある青色砂層が青色砂礫層上部から出土したものである。

（倉科明正）

第5節　骨　　器

骨器は第Ⅱ地区より出土し、2点あり、何れも下部を欠損しており、18は針状のものか、飾りのピン等に類するものかはっきりしない。19は括の頭部でないかと思われるがはっきりしない。（図版21、第32図）

第６節　自　然　遺　物

(1) 動物遺体　　(図版２６、第３１図)

① ニホンジカ　Ceyuus nippon mippon Temminck

鹿の骨は出土骨の大半を占めたが、出土地点が第2地区に限られたことも注意すべきことかも知れない。骨片は大小合わせて２５０余片ありほとんどが鹿の骨であると思われる。鹿の角が4点発見され、１１～１３がそれにあたるが、１０は磨いたらしく表面がすらっこく、ざらざらした面がない。１３は抜け落ちたものである。１１は若い鹿の角である。歯は９の１点があるのみである。

② イノシシ　Sus lencomysta lewcomysetak Temminck et Schlegel

猪の骨は１４の上腕骨が1点と、距骨が2点出土し１５、１６にみる歯が出土しており、１５は右上上顎の2、3大臼歯で、１６は下顎の第3臼歯である。

③ クマ　Ursus (Selenarctos) thibetanus japonicus Schlegel

熊の骨としては距骨の１７１点があるのみである。

④ キツネ　Vkpes vilpes japonica Gray　右側上顎犬歯1

⑤ タヌキ　Nyctereutos proiyoides Viverrin Temminch　右側下顎骨片1

⑥ キテン　Martes cp melampus melampus Wagner　右側上顎犬歯1

(2) 植物遺体　　(図版２７、第３２図)

① オニグルミ　Juglans Sieboldiana Maxim

胡桃は２０数個発見され、種類はオニグルミである。出土地点はAトレンチより１０、第Ⅱ地区Bトレンチより、4・6・7・8・9・12・14・15の8個Aトレンチからは１１が発見されている。断面等よりの採集は、1・2・3・5・13の5個が採集されている。

② トチ　Aesculus turnata Bl.

栃の実は第2地区のAトレンチの6区の礫層の中より他の遺物と出土したが細片となって、完全な形で取上げることはできなかった。

③ ノモモ　Myrica rubra Siebet Zucc.

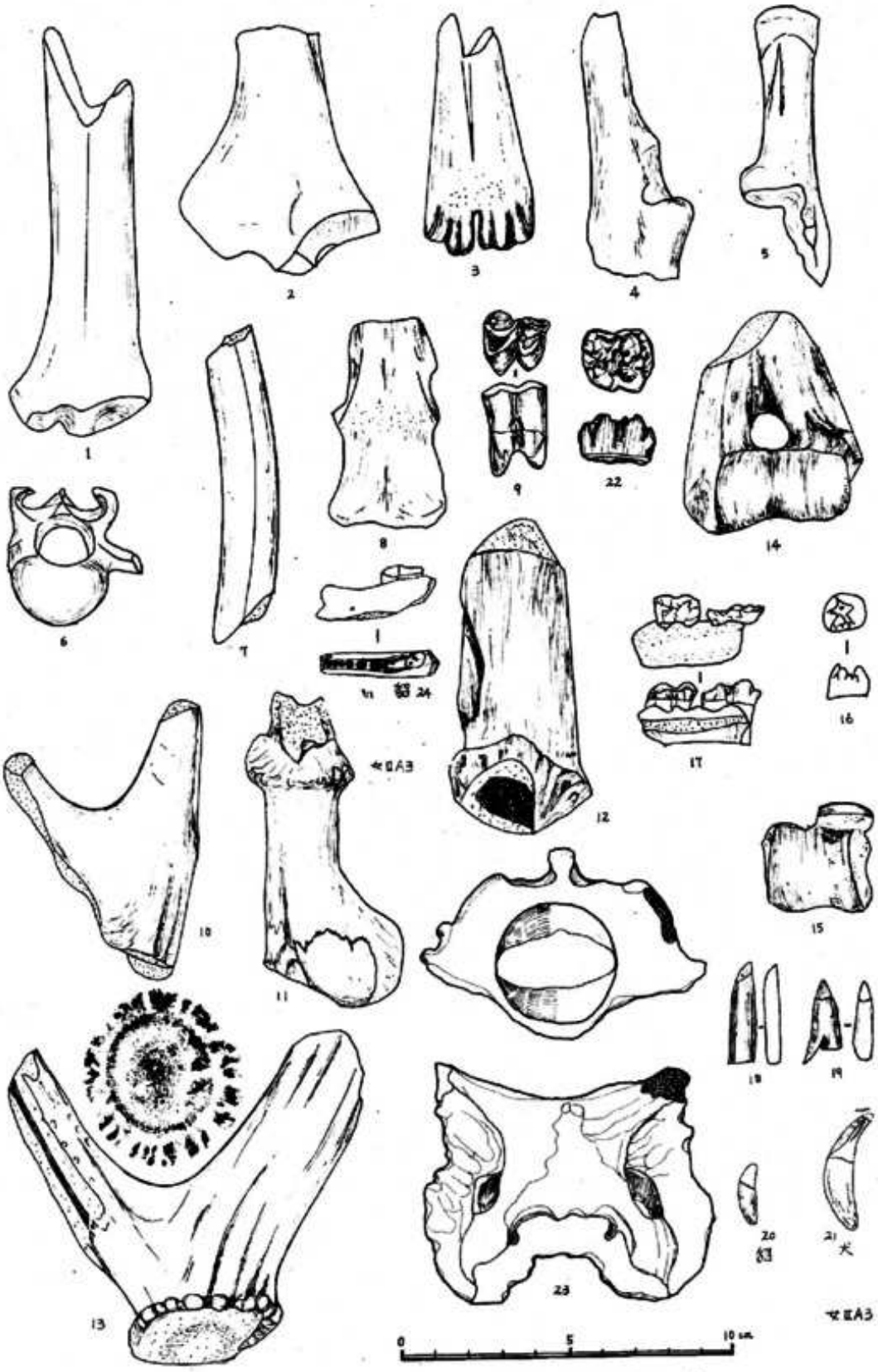
桃の実は1個で、断面より採集されたものである。

④ クリ　Castanea crenata Sieb et Zucc.

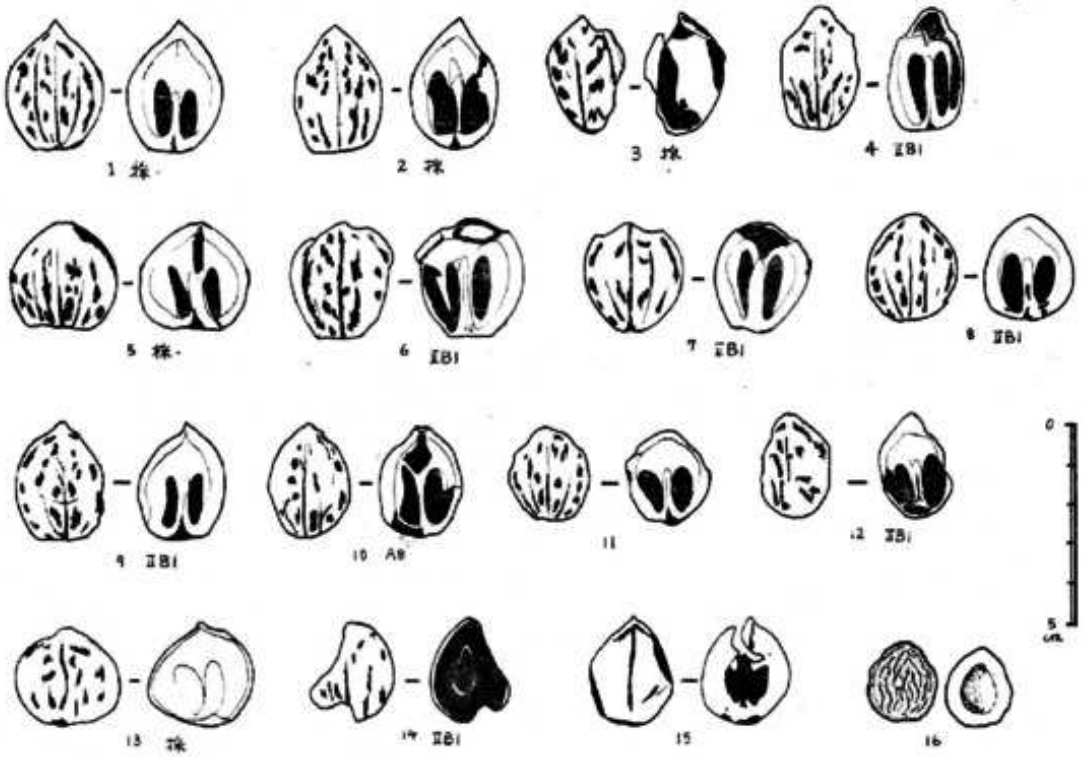
栗の実は2個あり、第2地区の礫層の発掘中に出土した。

⑤ ヘウタン　Lagenaria leucartha Rosby.

瓢箪はBトレンチより出土、図版２７でみるように完全な形はとゞめていない。土師期の日常生活に使用された器の一つであろう。



第31図　骨製品及び動物遺体実測図（1：2）



第３２図　植物遺体実測図（１：２）（１～15クルミ，16ノモモ）

報告書の作成にあたり石質については信大理学部助教授山田哲雄氏に、獣骨については信大医学部第二解剖学教室、植物遺物については早稲田大学教授直良信夫氏の御指導を受けた。記して感謝の意を表したい。

生物遺体について

早稲田大学教授　直　良　直　夫

松本市元町女鳥羽川流域遺跡出土物

松本市教育委員会の原嘉藤氏から私のところに届けて下さった自然遺物は、次のようなものであった。

植物遺体

オニグルミ	Juglans ailanthifolia Carriere	核殻片 4
クリ	Castanea crenata Siebold et Zuccarini	炭化種実片 1

トチノキ	Aesculus turinata Blume	種皮片 1
ノモモ	Prunus Persica Batsik var. Subspontanea Makino	核殻片 1

動物遺体

キツネ	Vupes vulpes japonica Gray	右側上顎犬歯 1
タヌキ	Nyctereutes proiyonoides viverrinus Temminck.	右側下顎骨片 1
キテン	Martes cp. melampus melampus Wagner.	左側上顎犬歯 1
ニホンジカ	Cervus nippon mippon Temminck	右側角枝端破片 1、左側距骨 1、RP^4 1
イノシシ	Sus leucomystax leucomystax Temminck	左側上顎第二後臼歯 1

すなわち植物遺体では、すべて双子葉類で四科四属四種、これらのうちノモモだけは栽培種で、あとは女鳥羽川流域に繁生していた雑木類である。

動物遺体は哺乳類だけに限られ四科五属五種、キツネ・タヌキ・キテンは食肉獣、ニホンジカ、イノシシは偶蹄類、すべて森林系の野獣である。

これらの生物相から究明される当時の環境は、大体現時の松本平のそれとほぼ同様であったことが察知される。特別に変ったものとしては発見されていないが、ただより以上、この地に林相が豊かであったことが納得されよう。

ノモモの遺殻は長さが18.7ミリ幅6.4ミリ厚さ（破片）が7.2ミリほどの小形品である。縄文晩期の遺物を出土する文化層の存在が注意されているが、寒冷高燥の地であるが故に、その栽培が容易でなかったことの一証左をそこに見出すことができるような気がする。女鳥羽川流域では縄文晩期の文化形態を有していたにしても、この桃栽培の技術は、四近の畑地農業生活者の影響をうけていたものであることを否定することはできないであろう。

第5章　地学的調査

第1節　自然環境

(1) 松本盆地の堆積物

糸魚川・静岡線に沿って数個の山間盆地が並んでいる。松本盆地もそのうちのひとつで、第四紀洪積世になってから造盆地運動が顕著に行なわれ、今日に至っている。

盆地の西側は松本盆地東線および松本盆地西線と呼ばれる断層で限られている。（平林.1967、1968）。

盆地の西側の飛騨山脈は中生代以前の先第三紀の堆積岩や火成岩が主体をなしている。これに対して、盆地の東側の中信山地は、新第三紀の堆積岩が大部分を占め、北部フォッサ・マグナに属している褶曲山地である。松本盆地はこの古い西側の岩石と東側の新しい地層との境界部の弱線に沿って陥没した地溝状の構造盆地である。

松本城を中心として発達した市街地の部分は、松本盆地東線よりも、北部フォッサ・マグナ側にはいり込んでいる。（第1図）。城山の西側の断層崖と中山の西側とを地図上で結んでみれば松本市街地は、明らかに筑摩山地に喰い込んだ小盆地とみることができる。この小盆地と同じ状態のものは中信山地地域で、会田盆地、西条盆地などがあり、これらの山間盆地群は、松本－長野線（平林、1970）上に配列している。松本市街地の小盆地は西側が松本盆地に向かって開放されており、盆地の新しい堆積物は松本盆地のものと交錯している。松本市街地での第四紀の堆積物は１００mに達すると推定され、松本盆地の３６０m（山田哲雄、1968）には及ばないが、会田や西条の盆地の堆積物に比較するとはるかに厚い。このような特徴をもつ松本市街地の小盆地（仮に深志盆地と呼び以下これを本報告では使用する。）の形成にあたっては、南北方向、北西－南東方向および北東－南西方向の断層線の存在や南北方向の褶曲構造も関係しているものと推定される。

松本盆地の北半分は高瀬川水系（乳川を含めた）、南半分は梓川水系（鳥川・黒沢川・鎖川・奈良井川を含む）の堆積物によって満たされている。両水系の上流部の古期岩類は、前者が花崗岩質であるのに対して、後者は古生層であるため堆積物の区別も容易にできる。

深志盆地も北半分は女鳥羽川水系（大門沢川を含む）、南半分は薄川水系に分けることができ、その中間に小規模ながら湯川の堆積物がある。これらの河川はいずれも奈良井川へ流入している。

松本盆地の地表面では大規模な合流扇状地が発達しているが、その地下には砂利まじりの粘土層の厚い堆積物をもっているところが多い。これは過去における河川の運搬力が現在より弱かったことや、部分的には滞水状態の地域があったことを示している。これに対してローム層におおわれた洪積世の段丘が発達している地域もある。特に松本盆地南半分では段丘の発達やローム層の分布が広く、詳しく研究されている（Kunio KOBAYASHI, 1960）。松本盆地の扇状地は

第３３図　松本市街地付近の地形図（水系と標高６００ｍの線，斜線，×印女鳥羽川遺跡）

（１：５０００）

隆起量の激しい飛騨山脈側に発達し、東側の北部フォッサ・マグナ側では小規模である。深志盆地における女鳥羽川および薄川のものは比較的大きくて東側では異色的な存在である。なお、南深地の水道用ボーリング資料では、地表から２５mまでは薄川の礫で、２５～５７mでは薄川と女鳥羽川のものが混入し、５７～７０mではこの両川の礫に梓川のものが混入し始め、７０～８５mでは薄川の礫より梓川の礫が多くなり、８５m以下では梓川の礫が主体で、これに薄川のものが混じる程度となる（東筑摩郡松本市誌、1957）。このように深志盆地の地下の堆積物をみると、地表の扇状地堆積物のように単純ではなく、松本盆地の梓川の礫さえ侵入してきているのである。前述のボーリングは９５mでまだ岩盤に到達しておらず、伊勢町でも６５m、国府町で５５mくらいまで砂礫層があることがわかっている。

深志盆地の以上のような堆積物は、構造的に急激な沈降作用のあったことを物語っているものであり、周辺地域の広範囲にわたる地質構造的考察と、層位学的資料を基にした考察が必要となってくる。しかし、このたびの遺跡は堆積物のごく上層部の問題である。

(2) 深志盆地周辺の地質

松本市の市街地は、筑摩山地によって囲まれている。この山地を構成している地層は、北部フォッサ・マグナでは下部に属する古いもので内村累層が大部分を占め、北部では別所累層も分布している。これらの地層は新第三紀中新世前半のもので、内村累層は緑色凝灰岩によって特徴づけられるが、砂岩や泥岩および礫岩もある。別所累層は黒色泥岩が主体である。なお別所累層堆積後に地下から貫入してきた石英閃緑岩やひん岩（松本城の石垣の石）が松本市の東部の山地には分布しており、美ケ原高原の基盤にもなっている。美ケ原高原の複輝石安山岩や三城の白色の凝灰岩は第三紀末の鮮新世頃、美ケ原地域の陥没盆地に堆積した三城累層（田中・平林、1963）のメンバーである。美ケ原は北部フォッサ・マグナの新期火山を除けば、異常に高く王ケ頭は２,０３４mに達している。これは上記のような地質的条件によるもので、これは上記のような地質的条件によるもので、隆起量の激しさは、浸蝕量の旺盛さに関係し、下流に厚い堆積物を形成することにもつながる。

女鳥羽川も薄川も美ケ原高原の周辺から発源し、北と南に分かれるのであるが、上流に分布している岩石の組成に相違があるために、河床礫はいずれのものか見分けられる。

女鳥羽川も薄川も比較的大きな扇状地をもち、山地沿いには河岸段丘を作っており、ローム層におおわれている段丘面が多い。薄川は北側の山麓部には北西－南東方向の明瞭な断層地形があり、女鳥羽川も中流部の東側は断層の存在を暗示する地形を呈している。これらの線に沿って山辺や浅間の温泉群がある。

松本市北部の城山の山塊の松本盆地に面する奈良井川側は、松本盆地東縁に平行した断層崖地形を呈している。しかし女鳥羽川に面した東側では急激な傾斜の変換部分はない。このためこの山塊は東へ傾斜する傾動地塊と考えられている。山塊の表面は８００～１,０００mの定高性で、第三紀層堆積後平坦化された大峰面に対比できるものである。この大峰面は１,０００m内外の高度で中信山地全体にその跡をたどることができるもので、松本盆地形成前に飛騨山脈から直接この平

坦面上に搬出された巨礫があり、これを山砂利と呼んでいる（小林、平林、1955）。

第２節　地　学　的　考　察

(1) 概　要

女鳥羽川の周辺部の地質に関しては自然環境の項で既に述べた。女鳥羽川が美ケ原高原の北部に発源し、田川に流入するまでの２３Kmの間の微地形や堆積物の様子および流路変遷などについて述べ、第２図に示した遺跡付近の層位学的問題を、遺物の出土状況と合わせて考察したい。

しかし、広大な女鳥羽川の堆積地域のごく一部分の発掘を、しかも緊急に行なった結果であるため、女鳥羽川流域の第四紀層について論じるには資料が不十分である。できるだけ発掘地点を中心として広い地域にわたって概査を行なったが、松本盆地と関連させながら深志盆地の第四紀の研究を進める必要さを痛感した。今回の調査からも地質学的にも貴重な新事実を得ることができた。

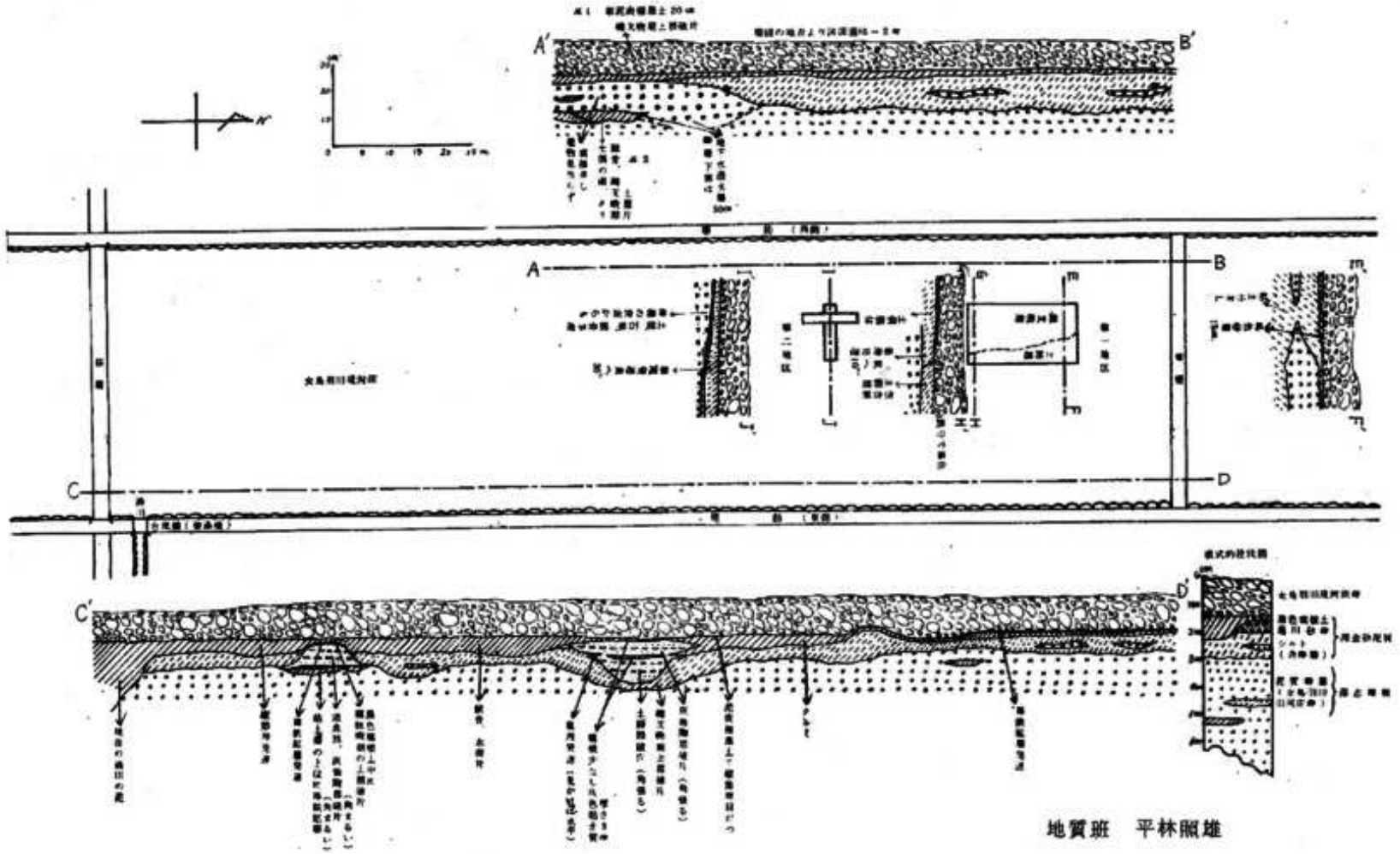
(2) 女鳥羽川の堆積物

女鳥羽川の上流部は、扇頂部の稲倉付近まで急流で、本流も支流も下刻作用が激しく、Ｖ字谷を穿っている。これは新しい時代に上流部が激しい隆起をしたことを示し、多量の岩石砕屑物を下流に搬出したことを示している。現在の流路は伊深付近で大きく南に曲がり、山城から清水橋の間では直線的で、清水橋付近でほぼ直角に西に屈曲し田川に注いでいる。

女鳥羽川の河床礫の最も古いものは城山から国立療養所付近にあり、成層しているのが確認され、海抜７００mに達し現河床よりも１００mもの高所にある。城山山塊は東南に向かって傾動し、土地の隆起につれて河岸段丘を作っている。この段丘は上位から下位に向かって、城山面・上の平面・深志面・丸ノ内面および宮淵面などと区別されている（両角昭二、1958）。なお、段丘礫層は古い城山礫層と、これと不整合関係の新しい元原礫層とに大別されている（田中、1958）。城山礫層には厚さ２０cmくらいの火山灰質粘土をはさみ、これが東南へ２０°～２５°傾斜し、この山塊の傾動の論拠にされている。城山での礫層の厚さは６０m以上あり、亜角礫が多く直径１０cmくらいで、砂層を介在している。なおその下には不整合関係で基盤岩の内村累層が露出しているところも多い。

元原面まではローム質土壌におおわれており、洪積世の堆積と考えられる。元原礫層は城山礫層より粒径が大きく、固結の程度も弱く水も通しやすい。厚さは３０mくらいである。

女鳥羽川の河道の変遷は、地質的背景から推定すると、城山の山塊が東南に傾動しているため、北西から南東へと平行移動的に行なわれた傾向がある。地形的に最も明瞭な旧河床は、伊深から矢作東、岡田町西、田中、西村西、白金町東、沢村、鍛ケ崎東、宮崎町、宮淵を経て奈良井川に至る低地部で、現在の大門沢川の流域とほぼ一致している。この旧河床には岡田町西のように瓦焼用の粘土を産出したり、水田となっている低湿地が多い。現在の大門沢川およびその支流は、この旧堆積物を下流から頭部侵蝕を行なっている。現在流水のある部分や低湿地の間には、古く



第34図　女鳥羽川遺跡地質断面図

から水の恐れのない洪積世段丘面が残っていて、縄文時代から住居地となっていたところも多く、特に古墳時代には低地は農耕地とされ、段丘面や残丘は集落として利用されていたと考えられる。

城山山塊の山麓部には、放光寺、神沢、塩倉、矢諸などの集落があり、崖端湧水や樹木の茂っている背後の山地から動植物を求めて、より古くから居住地として利用していたものと考えられる。しかし、この当時の旧河道流域は大部分が生活地としては不安な状態にあったと思われる。

大門沢川流域と女鳥羽川の現河床との間には、古くから伊深、岡田町、反目等の集落が発達し、付近には自然堤防的な高まりがあり、その南端は信大、元原町、旭町に延びている。この高まりには全面的にはローム層はない。一般に15～100cmの褐色表土ができており、その下には女鳥羽川の巨礫を含む砂礫層がある。地下水は低く、反目では15m以上でないと安定した水面に達しない。砂礫層の間にはときどき砂層が発達しているが、粘土層はほとんどない。この高まりの縁辺部では地下水は高く、湧水もみられる。

浅間温泉のある谷から水汲部落、中原町、深志高校から城山の南端部を結ぶと東北から南西への地下構造が推定される。この一部分、すなわち、水汲橋付近から追分付近までは、古い時代の河床であったことも考えられる。小林国夫（1957）の電探による深度27～30mの扇状地下に地下谷があるとの推定も、この地下構造と関係があると思われる。なお、浅間温泉のボーリング資料では砂礫堆積物は一般に20mくらいで、山田沢出口では35mに達し、基盤は内村累層である（東筑摩郡松本市誌、1957）。

現在の女鳥羽川は稲倉から、原橋までの間では、東岸側には断層崖を思わせる第三紀層の斜面があり、その一部には洪積世段丘の一部分が残存している。女鳥羽川の現河床の人為的付け変えの問題に関しては、新河床礫の分布や歴史学的な面からの綜合的な判断を必要とする。次の項でこれに触れたいが、前述のように、城山山塊の傾動の結果から考察すると、女鳥羽川が漸次その河道を東偏させる自然的必然性をもっていることは否めない。

(3) 女鳥羽川現河床礫層

女鳥羽川の現河道は、山城から清水橋の5Kmの間ではほとんど直線的で、特に築堤工事の完備した水汲橋以南は一直線である。堤防完成前には上流部のように多少蛇行していた。原橋より上流部では河岸の両側に段丘地形もあり、河床に第三紀層の岩盤が露出していたり、稲倉から原橋の間では砂礫層は1mくらいで、その下には青い粘土質の層がある。原橋からスポーツ橋のやや上流までの礫は巨大が多く、スポーツ橋と浅間橋との中間までの礫には50～60cm大の巨礫が混じってくる。なおこの付近では河床に流水も多い。しかし、スポーツ橋と曙橋の中間では地表水は伏流してしまうことが多く、西岸からの湧水がみられる。このスポーツ橋付近から曙橋の間の河川勾配は1000分の32で、それより上流の原橋までの1000分の20より大きく、また下流の曙橋から桜橋付近までの1000分の18よりもはるかに大きい。すなわちこの部分は女鳥羽川の遷急点に当たる急流部で、スポーツ橋の下流部では砂壌土質で草本類の根を含む旧地表面が露出し、礫層はきわめて薄い。また礫は上流部より巨大で1mに及ぶものもあり、数個の堰堤によって河床の下刻を防いでいる。曙橋付近から巨礫層が多くなり、桜橋付近まで漸次厚さを増し、

清水橋のカーブ以下では再び礫径は小さく、砂礫層も薄くなる。この曙橋付近から桜橋付近の礫層の厚くなる部分では地表水が伏流してしまう。護岸工事が進むにつれて出水時には下流まで巨礫が運搬され易くなり、清水橋付近の屈曲部で停滞し、かつ水害の多い事実も起ってくる。以上のような河床の異常さは天然の流路としては不自然さを感じさせる。なお女鳥羽川は天井川であるといわれるが、浅間橋付近より上流では、両岸の地表と同じレベルで、それより下流では1～2m河床の方が低い。これは最近における河川の改修の影響を考慮しても、薄川などと比較して堆積量の少ないことが感じられる。また、旧河床の大門沢川流域の河川が頭部侵蝕を盛んにしているのに女鳥羽川の現河床はその傾向も乏しく、自然に流入する支流もほとんどない。この点から考えても古くから大河川の自然流路があったとは断定できかねる。また、里山辺から来る湯川は小流の割合には堆積量が多く、天井川の傾向があり、その下流部は1000分の10の勾配で、清水橋付近でかつて合流していたものとすれば、それより下流の女鳥羽川へ無理なく延長できるし、勾配も一致してくる。

発掘地域での女鳥羽川の現河床礫は予想外に薄く、平均1.5m程度である。最大礫は直径70cmのひん岩である。曙橋上流では100cmに及ぶ梓川流域の花崗岩の円礫が稀に見られるが、これは山砂利の転落したものと思われる。最大礫の多くはひん岩や風化の進んだガラス質安山岩および緑色凝灰岩である。これらは明らかに女鳥羽川上流に分布している岩石が搬出されたものである。深志盆地の河床礫を取扱う場合に主要な河川の構成礫種の相違を知っておくことが必要である。1m²内の広さの河床から大きいものから100個採取して調べた結果は次表の如くである。

	女鳥羽川	薄川	梓川
粗粒砂岩（第三系）	18%	0%	0%
緑色凝灰岩（〃）	29	火成岩起源多し12	0
泥岩（〃）	1	0	0
礫岩（〃）	2	0	0
安山岩	内村系統 14	美ケ原系統 54	乗鞍焼岳系統 24
ひん岩	26	0	1
石英閃緑岩	10	52	0
蛇緑岩	0	2	2
チャート（古生界）	0	0	10
硬砂岩（〃）	0	0	ホルンヘルスを含む 45
粘板岩（〃）	0	0	10
石英斑岩	0	0	2
花崗岩（両雲母）	0	0	6

原地小学校南での薄川の河床礫は、最大径でも３０㎝程度の美ケ原安山岩または石英閃緑岩であり、平均粒径も桜橋付近よりは小さいが砂礫層は厚い。

女鳥羽川の東側地域は湯川やその支流の堆積物で、表土の下には西岸のような女鳥羽川の巨礫層の存在が確かめられない。すなわち現女鳥羽川は扇状地の東縁を流れていることになる。発掘点付近での分級度は下流部でありながらきわめて不良で、砂質部分は少ない。水の作用のない乾燥脱水した底部には、厚さ数㎝の黒褐色の鉄盤層が発達している。礫層は常に全体が地下水面上にあり、下部層に至るまで、今日の生活物質を混入しており、その堆積がごく新しいことを示している。

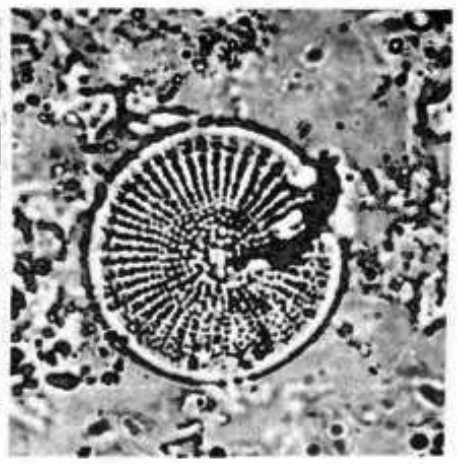
(4) 深志砂泥層

女鳥羽川現河床礫の下位にはローム層や砂壌土質の表土がなく、直接腐植質の黒土が広く分布している。その下位にはシルト層があり、この中にはレンズ状に泥質礫層や砂質層を介在している。この女鳥羽川現河床礫層の下位の砂泥質層を深志砂泥層と仮称しておく。深志砂泥層の最上部の黒色腐植土は粗しょうで、縦節理が発達しているところも多い。低位泥炭質で半巧物のイネ科、カヤツリグサ科の遺体を多く含んでおり、湿草地土といえる。多年生草本が、砂泥とともに１～２㎝幅の茎を堆積させている。泥炭様部分の腐植分は１５％程度である。また黒土から下位のシルト層まで、垂直方向に貫いている太さ４～５㎜の根茎が全層にわたって認められる。黒色腐植土の厚さは２０～８０㎝くらいで西または南に向かうにつれて厚くなる傾向があり、土井尻では厚さ１５㎝に達する。しかし、発掘地点で認められる範囲では厚さは不定であり、この中に縄文晩期の土器片が多産し、第一地区では土偶・石器、耳輪なども産出している。この黒色腐植土は女鳥羽川現河床礫とは比較的平滑な面で接しているが、両者の間は層位的には不整合関係で、沼沢地が完全に陸化し表土を作らない間に何等かの理由で河川敷となったものと思われる。

黒色腐植土の下位には腐植の少ないシルト層が１００㎝以内の不定の厚さで分布し、その間は漸移的である。しかし、黒土とシルト層が互層状態になっている部分もある。

西岸の断面の南端部（第34図）では２０㎝内外の厚さの黒色腐植土の下には１００㎝に及ぶ厚さの腐植や泥を含んだ礫層があり、その下部にはいわゆる褐鉄鉱層があり、さらにその下には地下水をよく通す礫のみの部分がある。この厚い礫層は遺物を含んでいないらしいが、その下位に縄文晩期の土器片、土偶頭部、鹿の角やその他の獣骨や歯を包含する黒土が数１０㎝の厚さで分布し、北へ行くと尖滅する（第３５図左上）。第二地区ではシルト層の下位の泥質腐植質礫層から、縄文晩期の土器片、獣骨、石器、食用植物（クリ・クルミ）の遺物が多産し、西岸の断面とは趣を大いに異にしている。包含層はもちろん人為的な擾乱が加えられており、また河川や湖沼の堆積物は層相の変化に富むものであるから、局部的な観察で早急に対比したり、細かい地層区分をすることは危険である。いずれにしても女鳥羽川の西岸と発掘地点と、東岸とのそれぞれの断面の様子は、第２図に示したように変化に富んでいて、細かく対比することは困難である。

シルト層は第一地区の北西では２mを越える厚さがあり、ときどき泥質礫層を介在している。また水の作用を示す葉理や層理の発達がみられ　10°～20°東へ傾斜している。シルト層に介在



第３５図　女鳥羽川東部河岸断面および珪藻類顕微鏡写真

（左上）女鳥羽川遺跡西岸砂礫のはさみ　（右上）同東岸湯川の旧合流点の地層

（左下）同附近の須恵器、灰釉陶器混在の層－中央部

（右下）Stephanodiscus Hantzschii Grun（斉藤氏撮影）

している礫の大きさは揃っておらず．最大級のものは３０cmくらいである。なお、黒色腐植土にもシルト層にも拳大以下の礫が散発的に含まれている。

シルト層の組成は５６％が粘土分で、残りは0.2～0.05mmの細砂で、0.1mm内外の粒子が多い。石英粒が最も多く不規則なかど張ったものである。長石は粘土化し、形の整った結晶粒は少ない。緑色が強い角閃石や緑泥石および金色光沢に見え、多色性の乏しい褐色雲母や褐色のガラス質鉱物粒のほか、磁鉄鉱粒も少量ある。

湿潤時の仮比重は2.84、乾燥時で2.33であり、ＰＨは5.0以下の強い酸性である。このシルト層中の粘土は上流から運ばれたハロイサイトやベントナイトが主体らしいが、精密な混合物と思われるが、目下粘土鉱物に関しＸ線分析は信大渡辺晃二氏によって行なわれつつある。考古学の面での参考に供するために次のような焼成実験を行なってみた。胎土として深志砂岩泥岩層のシルトの部分を用いると、３００～３５０℃で約３０分間焼けば縄文式土器の程度に近いものができる。なお５００℃で６０分焼成すれば完全に使用できるものになり、焼き上がりの感じはむしろ土師器に近く金属音さえするものとなる。さらに７５０℃内外で３０分焼くとやや堅さは増すが、表面に粘土質の強い上塗りでもして焼かないと水は浸みる欠陥がある。第一地区の土師器出土した砂質層のみでは、７５０℃内外で３０分間焼成しても脆弱で使いものにならない。なお出土した縄文晩期の土器片を７５０℃で３０分間焼きなおすと土師器に近い色合いの堅焼きのものとなり、炭化物は完全に消えてしまう。以上のことから、従来考えられているよりも、はるかに低火度で簡易に焼くことが可能であったと思われる。しかしこの実験は女鳥羽川遺跡に多量に分布している深志砂岩泥岩中のシルトを用いて、ＬＰＧ焼がまを用いた結果である（温度は熱電対による）。シルト中および第二地区の獣骨の多い部分には、藍鉄鉱（Vivianite）$Fe_3P_2O_8 \cdot 8H_2O$が斑点状や骨片に付着している。比較的多量に含有されており、単斜晶系の結晶と土状のものとがある。獣骨肉からの燐酸分が鉄やアルミニウム分と化合して含水燐酸塩類を作ったものであれば、藍鉄鉱のほかに銀星石（Wavellite）$Al_3(PO_4)_2(OH)_3 \cdot 5H_2O$（未確認）などの存在も可能である。

これらの鉱物が多量に含まれていることは縄文時代の食生活の一面を示す手がかりとなる。また、サワグルミやノモモの実や花粉の存在は当時の食生活を物語るものとして意義がある。なお獣骨片とともに小さな木炭片も出ている。花粉や獣骨から多くの種類の木本類や哺乳類が検出され、背後の山地や台地は当時の生活物質の重要な供給地域となっていたらしい。また、前述の湧水や土器用の胎土の豊富さと合わせ、また原始農業に利用しうる低湿地と、礫質の安定した高まりとが混在していたことなどを考え合わせると、当時の地理的生活条件は恵まれていたものと推定される。

第一地区の土偶包含層は粘土分の多い黒色腐植土で、半巧状態のアシ様の植物遺体が水平方向に多量に埋没している。この包含層は水分３４.４％、有機物５％であった。なお、この付近には集石址といわれる礫の分布がシルト層の下位にある。この礫には女鳥羽川の現河床にはみられない美ケ原安山岩（鉄平石）の１０数cm大のかど張ったものが混在し、礫の堆積状態も自然ではない。また、第二地区では３０cmのシルト層の下位に遺物と腐植を混入した泥質の礫層があり、東

へ向かってその表面は低下し、獣骨に付随して鉄鉱も多く認められる。石器のうちには黒曜石のほかに梓川流域でみられる赤色チャート製のものがあり、5cm大の原石の円礫も一緒に産出した。また石剣もやや砂質の粘板岩でそのほか点紋粘板岩製の石器もあり、これらも梓川流域から求められるものである。第二地区の礫質の包含層が、西岸南端の無包含の礫層と同位のものか、後述の深志礫層の表層部であるかは確認できない。これを知るためにはさらに深く掘るか、西側の掘割りとの間をトレンチする必要がある。いずれにしてもこの包含層は人工的な手が加わっている事実は認めざるを得ない。

深志砂泥層は全層にわたって、同一の鉱物組成からできており、前述のシルト層で述べたとおりである。本層には淡水性の珪藻が少量ながら認められ、目下分類中で、これによりいずれは当時の堆積環境が考察できると思われる。今回の報告では緊急のため間に合わず残念である。

深志砂泥層には全体的に縄文晩期の遺物が包含されている。しかし、当時の生活面が本層の表面にあったか否かは層位学的に決定することはできない。今回の発掘で特筆すべきは、本層の一部に古墳時代から平安時代の遺物を包含する部分があることである。

第一地区の東部には土師器の比較的保存のよい土器や、立杭や人工の手が加えられた木材が産出する。また東岸の堀割では、須恵器、土師器および灰釉陶器の破片を含む砂礫層がある（第35図左下）。須恵器と灰釉陶器の産出地点は第35図左下のような地層である。これらの古墳時代以降の包含層の上位も、薄いながら腐植層や粘土質土壌がおおっている。第一地区の土師器包含層はトレンチした部分の局部的な解釈からみれば、北北西から南南東へ延びた溝状を呈し、腐植質黒土はほとんどなく、50cm厚みの砂質のシルト層で、これに土師器が含まれており、その下位に礫層がある。この包含層は水分31.5%、有機物7%であり、第一地区の南西隅の葉理層の発達した粘土質部分では水分23.1%、有機物6%である。しかし第一地区の土師器包含層と、縄文包含層の間では不整合関係は確認できない。また人工的に堀り下げられた様子も認め難い。東岸の土師器とそれより新しい土器包含層は砂層と礫層の互層で見掛けは水平層である。この層は湯川側からの堆積物の一部と推定され、第一地区の土師器包含層とは層相も異なり、その延長部とみることは控えたい。

以上のように深志砂泥層は縄文晩期から土師期までの遺物を包含しているが、その表面は黒色腐植土におおわれており、女鳥羽川現河床礫はこの上に不整合で重なっている。本層のほとんどは常に地下水面下に浸漬されているグレイ層であるが、東岸の露出部でみられる土師時代以降の土器片を含む砂礫互層（おそらく湯川系の堆積物と思われるが、しかし、現在の湯川の出口には第34図のような厚い泥層が堆積している）（第35図右上）やシルト層の一部は地下水変位層である。深志砂泥層の最上部の黒色腐植土は縄文晩期の土器片を含んでおるのにもかかわらず、その下位の砂礫互層に土師器や須恵器および灰釉陶器の破片を含んでおるのは、一見時代的に矛盾している感じを受ける。筆者はこれに対して、黒色腐植土の形成期が新しい時代のもので、その中に包含されている縄文晩期の破片は二次的に混入したものと考えている（第34図）。しかし、腐植土が厚い部分では早くから腐植の堆積が行なわれていたと思われる。やはり深志砂泥層の表面における住居址を確認し、当時の生活面を知る必要がある。

西岸の南端部で採集した表層部の黒色腐植土（第34図№1）と礫層下の黒色土（第34図№2）とを酒井潤一氏によって、花粉分析を行なってもらった結果は次の如くである。

№1では針葉樹としてPinus（マツ属）、Picea（トウヒ属）、Abies（モミ属）、Cupressaceae-Taxaceae（ヒノキ-イチイ科）が多く、その他にTsuga（ツガ属）、Cryptomeria（スギ）が含まれている。また広葉樹はQuercus（ナラ属）、Fagus（ブナ属）、Pterocarya（サワグルミ）、Castanea（クリ）が比較的多く、その他にBetula（カンバ属）、Carpinus（クマシデ属）、Ericaceae（ツツジ科）が含まれている。なお草本では、Gramineae（イネ科）Artemisia（ヨモギ属）が多量に含まれ、その他にChenopodium（アカザ属）、Conpositae（キク科）が含まれている。

№2では針葉樹としてトウヒ属、モミ属、マツ属、ヒノキ-イチイ科が比較的多く、その他にスギ、ツガ属が含まれている。また広葉樹ではサワグルミが比較的多く、その他にハンノキ属、ブナ属、ナラ属、クマシデ属、Ulmus-Zelkova（ニレ-ケヤキ属）、Fraxinus（トリネコ属）、Styrax（エゴノキ属）、Salix（ヤナギ属）が含まれている。草本は№1と同様にイネ科、ヨモギ科が圧倒的に多く、その他に、キク科、アカザ科がわずかに含まれている。また№1にも№2にも多量の胞子が含まれている。

これらの結果から結論として、№1、№2とも花粉の組成は類似しており、その特徴は、木本ではマツ属、トウヒ属、ヒノキ属-イチイ属（多分ヒノキ属）が多く、ブナ属が含まれており、草本ではイネ科、ヨモギ属が多いことである。花粉構成の違いからみると、№2のほうが、広葉樹の種類がわずかに多く、広葉樹花粉の比率がわずかに高いという点があげられる。

これらの特徴的な花粉構成から推定される当時の古気候は、現在よりわずかに涼しかったといえよう。また、花粉生産量はあまり多くないはずのヨモギ属、イネ科の花粉が多量に含まれることから、遺跡周辺には、かなりの草地ないしは広地が広がっていたと推定される。

以上は酒井氏による分析結果とその考察であり、当時の古気候や遺跡付近の古地理を推論するために大いに参考になると思われる。なお、イネ科の中にイネ（Oryza sativa）が存在するか否かを検出することは難しいといわれているが、大切な問題なので金沢大学藤則雄氏に依頼中である。

(5) 深志礫層

深志砂泥層の下位は、不規則な境を隔てて礫層が分布している。これは深志盆地の地下に厚く堆積し、南源地のボーリングの資料では９５m以上に及んでいることが判明している。この砂礫層を仮に深志礫層と呼んでおく。発掘地点においては本層のごく上層部を見ているに過ぎず、地下深くでは、シルト層や粘土層を何枚かはさんでおり礫層の礫の種類も変化に富んでいる。

深志礫層は地下水面下にあり、上部は砂泥質で、比較的炭化した植物遺体を含んでおり、礫はかつての女鳥羽川水系のもので、緑色凝灰岩が目だち円磨度も大きい。最大級の礫は２０cm大で、一般に３～４cmの直径であり、分級度は現河床礫よりは良い。礫の間の砂は０.５～２mmの粗粒で石英は不規則なかど張ったもので新鮮である。長石は風化が進み自形の結晶粒はあまり見当らな

い。

深志礫層の上部は旧深志湖（小林国夫 1958）と称せられる滞水期を示すもので、深志砂泥層は陸化寸前の沼沢化の産物であると考えられる。

深志盆地の泥質堆積物は松本盆地の奈良井川流域の低地部に及んでいる。同様な堆積物は松本盆地の最低部の穂高町付近でも見られる。このような地層は扇状地の末端部がデルタ的堆積を行ない、湖盆を埋積して行く環境で形成されたと思われる。現在の諏訪湖は周囲の山地が急峻でないため礫の搬出は少ないが、埋積の過程にあり、いずれは沼沢地化して陸化するものと予想され、深志盆地や穂高付近のかつての堆積環境を推定する参考になると思われる。

旧深志湖に関してさらに考察を進めてみる。たとえば宮淵付近の奈良井川を１５m堰塞すれば、発掘地点の桜橋付近（等高線で６００m）まで湛水し、第１図の斜線部は湖沼化してしまう。この宮淵の東側は断層崖で、西側からは古梓川の流路のひとつとみられる槻木川の扇状地の押し出しがある。ここを堰止めていた扇状地層が、犀川の下流方向からの侵蝕が上流に向かったために排水されたか、または人工的に排水したか、いずれにしても宮淵より下流部の奈良井川河床は礫層がきわめて薄く、基盤の第三紀層の別所累層が露出しており、西岸では梓川の砂礫層を下刻して河岸段丘を形成している。また奈良井川と梓川の合流点付近は、その上流部や下流部より河川勾配が２倍も急で1,000分の１０近くである。しかし、深志礫層の深い部分での堆積環境は造盆地運動と関係づけて考察しなければならないが、最上部層の湖沼化は、上述のような堰止めによっても行なわれ得る。旧深志湖には周囲からの各河川がデルタ的に礫まじりの砂泥堆積物を進出させ、宮淵付近における堰止めが排除されると深志盆地は沼沢地化から陸化へと移行していったものと推定される。旧深志湖の周辺部を６００mの海抜と考えれば、それ以下の低地部は泥層の部分が大部分で、所によってはやや安定した礫質部もあったと思われる。しかし、先史時代にこの低地部が住居地として利用される状態になっていたとは思われない。この６００m等高線付近に段丘地形があり、大門沢川の水系の各河川は元原礫層を下方侵蝕している。また、この段丘ぎわに湿地や湧水が多い。海抜６００mから６２５m付近までの間の地域では縄文式時代の中期頃からすでに安定した居住地の部分と、不安な氾濫原とが交錯しており、沢筋や城山ぎわでは湧水が求められていたと考えられる。このように周囲の古地理的環境から推論して、発掘地点付近は縄文式時代はもちろん古墳時代においても、地表面は低湿地の状態であったと考えられる。しかし、前述の岡田町から南に延びる女鳥羽川の砂礫層の高まりは、その先端部が岡ノ宮付近にまで及んでいる。この高まりは数１０cmの厚さの表土の下に２０～３０cm大の亜角礫が堆積している。原史時代はもちろん先史時代の頃から、小灌木や草地であり生活面となり得たところである。また、女鳥羽川東岸地域も数１０cmの表土の下に、湯川水系や山地からの崩土崖錐の礫質堆積物があり、縄文式時代や土師時代の遺物や古墳が存在する。したがって、発掘地域の北西部や東方には縄文や土師時代の住居址が、今後発掘される可能性がある。もっとも考古学の面から発掘地域に、なんらかの意味をもった遺跡の存在を究明されるかは別問題である。発掘地域付近が安定した地表面であったのに、その後なにかの原因で浸水し沼沢地化した事実が確認されれば、発掘地点以下の低地にわたって住居址があってもよいはずである。しかし、現在の地学的調査の結果で

は、少なくとも縄文中期以降は草湿地で、生活の場として不適当な状態にあったと思われる。

今後は河床部分のみでなく、西岸地域の微地形や層位の調査を進め、既知の出土地点や古墳などの分布を、時代別にまた生活面ごとに確認していく必要がある。なお、大門沢川や湯川上流部の低湿地の存在理由や水利および農耕地としての開発などを、集落の発達と合わせ、歴史的に考究する必要を感ずる。かくして、松本市北部一帯の女鳥羽川水系の先史時代以降における生活状態が浮き彫りにされると思われる。

(6) あとがき

女鳥羽川遺跡は河床にある特殊なもので、包含層を中心とした地層は第四紀の問題であるうえに、考古学の面にも暗い筆者には労多くして意義ある報告ができず、今後に委ねる問題も多い。しかし、調査以来地質学のそれぞれの分野での研究者の協力を得て、1ケ月余の短期間にまとめをすることができた。地学的な面からの考察の要点を次に挙げ、ご批判をいただければ幸である。

① 海抜600m線付近から低い部分は、4Km四方くらいの旧深志湖なるものがかつてあり、湖沼から次第に沼沢地となり、現在はそのほとんどが松本市街地の部分になっている。この堆積盆地は松本盆地と構造的に分離させ深志盆地と仮称した。

② 深志盆地は砂礫層を主体にした100mに及ぶ厚い第四紀層で埋積され、その終末期には湿草地土を形成した。この上部層は縄文晩期および原史時代の遺物包含層で、深志砂泥層と命名し、その下部の礫質層を深志礫層と呼んだ。

③ 深志砂泥層は女鳥羽川現河床礫層によって不整合におおわれている。砂泥層の厚さは1～1.5mで上部は黒色腐植土、下部はシルト層で、しばしば礫層を介在する。

④ 女鳥羽川の現河道は、自然的な流路としてよりも、稲倉以下特に原橋付近より下流の河況の不自然さや、両側の堆積物などの相違から新しい時代に流路変更されたと解釈される点の方が多い。また、湯川の流入の状況もこれを裏付けているものと考えられる。しかし、この問題は人為的なものであるだけに歴史的な証拠によって判然とされるべきものと思われる。

⑤ 城山山塊の段丘地域と、旧女鳥羽川流域と思われる大門沢川流域の低地部と、女鳥羽川の現河床と大門沢川流域との間の岡田町から南へ延びる高まりなどの微地形は、考古学的に重要な歴史的・地理的意義を包蔵しているものと考える。

⑥ 女鳥羽川流域の第四紀層地域は、南向きの緩斜面で、先史時代から人類の生活には好条件を備えていた。周囲には針葉樹と広葉樹の原生林の山地があり、各所に湧水があり、低湿地と台地や段丘とが混在しておって、狩猟生活から原始農耕生活へかけて永住の地域であったと思われる。

⑦ 包含層である深志砂泥層は、層相の変化に富む環境での堆積物であるうえに、先史時代以来人為的な擾乱を受けている。したがって細分すれば複雑にみえるが、花粉や層位的観察から、層位学的にはほぼ同時代にできた一枚の単層として扱うべきものと考える。

⑧ 深志砂泥層中に多量にあるシルトを胎土として焼成実験を試みた結果、従来考えられていたよりもはるかに低火度の300～500℃で縄文や土師程度のものができることを知った。美濃

方面の花崗岩から由来したカオリンの焼成温度と異なるので、手近で得られるこの胎土の粘土鉱物をX線分析中である。

⑨ 深志砂泥層を土壌分析、焼成実験、花粉分析、粘土鉱物のX線分析、珪藻の分類などにより考究し、また分析中であるが、これらの地学的方法によって、先史時代の古地理、古気候などを究明し数多くの新事実と、残された課題を得た。

⑩ 深志砂泥層中の縄文晩期の包含層に多量に存在するイネ科の花粉から稲自身の検出を究明中である。

このたびの女鳥羽川遺跡の調査に地質学的な面を加え、綜合的に研究する機会を与えられた責任者や当局に敬意を表する。

なお短期間に一応の報告ができるためには花粉分析では酒井潤一（信大）、藤則雄（金沢大）、粘土鉱物のX線分析では渡辺晃二（信大）、珪藻の分類では斉藤豊（信大）、ご意見をいただいたり原稿の校閲では田中邦雄、小林国夫（信大）、調査研究の便宜を計って下さった教育センター所長小松敏宏の諸博士、および焼成実験、化学試験、生物実験に際してご協力下さった教育センターの田中純夫、古村豊雄、高村正幸、秋田正人、神林信雄の各専門主事、考古学の知識では原嘉藤、土屋長久両氏、地学的な面では太田守夫、北沢和男両氏、以上のかたがたのご指導ご協力を得ましたので、ここに心から感謝申し上げます。

（平林照雄）（46. 1. 31）

追補（地質班）

(1) X線分析の結果

信大理学部渡辺晃二氏による深志砂泥層のX線分析の結果は次図のとおりである。横軸は2θの角度を示している。第1図は上部の黒色腐植土、第2図はその下のシルトの部分で、いずれも過酸化水素で処理して腐植や砂粒をできるだけ除いた資料で分析してもらった。鉱物粒は偏光顕微鏡で見た時と同様に、石英（Q）が最も多く、斜長石（P）は分解したためかあまり多くは出ない。これらに次いで石英閃緑岩などから供給されたと考えられる風化した黒雲母（B）がある。緑泥岩や角閃石は少量のためグラフには表われない。粘土鉱物のカオリンは加水していないハロイサイト（H）と、これより少量のモンモリオナイト（M）からできている。この両者はいずれも二次的に生成される鉱物であるが、生成の条件が異なるものであるから、移動してきて混合し堆積したものである。縄文時代の土器の胎土としては好適であるが、良質の陶器の原料としては不純である。第3図はシルト中の藍鉄鉱をX線によって確認してもらったが、その結果は肉眼鑑定と一致しており、結晶水の脱水を実験されたところによると、260℃と330℃および360℃であった。以上から黒色腐植土の鉱物組成はシルト層と同様で、シルト層は低火度で焼成できる土器の材料として好適であり、藍鉄鉱を含むことが確認された。

(2) 珪藻分析の結果

信大教育学部斉藤豊氏に珪藻の分析を行なっていただいた結果は次のようであった。

試料は東岸南端部のシルト層から採集した5gについてで、藍鉄鉱が斑点状にはいっている部

分である。珪藻の量は５ｇ中に４００～５００個体で少ないが、採集方法やさらに多量の試料について検討すれば、いっそう詳しい結果が得られる可能性がある。今回は急を要するため上述の分析結果から判断されたことを記述する（第３５図右下）。

優占種は淡水種の Stephanodicus hantzshii Grun （円心目）で、これが全体の９５％以上を占め、ごくまれに Cyclotella comta・Fragilaria borialis などが認められる。この試料に関しては湖沼か、河川の場合ならば水の停滞しがちな場所と判断されるといわれ、現地調査での考察と一致している。

斉藤氏によると、野尻湖の場合には、円心目は湖心に多く、河川の流入口では、ごくわずかである。しかし、野尻湖の場合の円心目は Melosira 属・Cyclottella 属が優先種で、Stephanodicus 属はごくわずかであり、志賀潮沼群では Stephanodicus は認められないという。したがって深志砂泥層のように Stephancdicus が優占種であるような湖沼の環境はどのようなものであるか今後の課題であるといわれている。旧深志湖の中心部にいたるまでの砂泥について、層の上部から下部にいたる珪藻分析の必要性を感じさせられる。

(3) イネの花粉分析の結果

第１発掘地域の縄文晩期の遺物包含層および土師包含層の黒色腐植土およびシルト層についてイネの花粉分析をした。深志砂泥層に多数の花粉が含まれており、酒井氏による分析の結果は本文で記載したが、このなかにイネ科の花粉が多いこともその時判明した。そこで金沢大学の藤則雄氏にイネの花粉を検出してもらうべく、上記の採土試料をお送りした。困難な仕事であるにもかかわらず３０枚のプレパラートについて、前後半月にわたって鑑定をしていただけた。

その結果はイネ自身の花粉は皆無であり、他の花粉の保存の良さから考えて、存在するものならば必ず検出されるはずであると報告された。縄文晩期はともかくとして、土師期にさえ、発掘地域においてイネの花粉が見あたらない事実はむしろ意外であり、今後に残された問題であろう。しかし、本文で既述したごとく、この地域の古地理的な考察によれば、岡田町から女鳥羽町へ延びている高まり以西の、現在の大門沢川流域と女鳥羽川遺跡は相違した環境にあり、むしろ生活地域や農耕地としての地理的条件に恵まれていなかったことの裏づけになるとも考えられる。現在の女鳥羽川流域の当時における考古学的考察にさいして、この結果は大いに参考になると思われる。イネの花粉についても女鳥羽川流域の広範囲にわたる分析の必要を感じさせられる。

（平林照雄）

第6章　総括と考察

第1節　総　　括

(1) 遺跡の状態と種類

遺物は女鳥羽川の現河床下凡そ2m下層の暗色泥質粘土層中の水生植物遺体の堆積と混じて出土している。河床は比較的狭い範囲の調査であったにかかわらず、全体的にみるならば河床の層位は複雑に乱れ、平穏な湖沼の姿のままでないことは、平林氏の報告によってもわかる。第1地区の場合発掘地区の西部が縄文後・晩期の遺跡、東半部が土師時代前期の遺跡という複雑さである。しかも西部が砂泥質粘土層であり、さらに集石部があり、石鏃はじめ多くの遺物が出土しているのに対し、東部は地下水を源とする小清流の跡がはっきりと残り、砂は美しく洗われ、その地区から出土した土師器や材も泥土の中からではない。川のほとりには地面に打ちこまれた杭が何本もあり、使途不明の木材や、祭祀用に使われたと思われる笏（剣？）状木造品、水汲に使われたと思われるヒサゴの出土、土師器も祭祀用に使われたと思われる小型坩・高坏が発見されている。この川は現在の河床の中央部から東に振れて南に流れていることは、川の流れの跡と、第1地区の北に掘られた断層中にわずかに浅く凹みとして残る砂層断面によっても知ることができる。第2地区は第1地区の西部とほとんど同様の状態で暗黒色または暗青色粘土層中に砂礫まじりの堆積があり、この地帯からは多量の植物遺体（自然遺物）と獣骨等が出土している。この調査範囲中に住居跡としての炉跡、柱跡の発見されなかったことは偶然の未発見か、遺跡の本質からくる未発見かは全く不明である。また遺跡の範囲は今次の調査では東西の河岸外はもとより、川の上下でさえも確認されなかったが、遺跡地帯の南桜橋直下近くまで、土器の分布・動物遺体の混在が認められている。しかし、元町橋直下まで登ると、泥土層は深くなり表層から厚い砂礫の堆積のみで上方に及んでいないように思える。

なお奈良井川改良事務所では、昨年に引続き護岸工事を上方に進めたが、遺物混在の地層の発見がなかったので、遺跡の北方への展開は認められないと思っていたが、最近高校生によって北方約80m付近から再び弥生式土器（櫛目文）を中心とした遺物出土が確認され、本遺跡の拡がりや附近の遺跡について再考をよぎなくされてきている。この点今後の究明に待ちたい。

遺跡の種類が散布地か包含層か住居跡か、信仰遺跡かと頻々問題を投げかけているが、考察の項で藤沢委員の見解が述べられている。

(2) 遺物と出土状態と種類

遺物の上からみると第1地区南方西部の工事断層中から発見された径9cmの大型土偶の首（面）部をはじめとし、第1地区発見の大型土偶の胴体、及び小型土偶・身体装飾用の土製耳飾、土器・石器類、その他自然遺物を含めると多量となるが、第2地区からも多数の土器片・自然遺物に

混じて 陰刻に朱彩のある石刀頭部、矢の筈かモリに着けたと思われる骨器等その数も多い。第1地区東部出土の土師時代の遺物もまじえて表示すると次のようになる。

土偶及びその破片	8体分
滑車状耳飾（含破片）	20個分
石　刀（含破片）	3個
砥　石（砂岩・粉板岩）	10個
石　鏃（黒曜石片を含む）	441片（内50鏃）
縄文後晩期土器片	6,300片（完形なし）
（縄文土器底部（網代底など））	304個
動物遺体（角・牙・歯・骨片）	256片
植物遺体（クルミ・クリ・トチ・モモ）	200片
土師器　（大型壺4・高坏7・坩1）	12個分
木材木器（祭祀用木器・杭・材）	36本
ヒサゴ	1個

となり総計においては7,000点近い数となる。この中で縄文後・晩期の土器片が圧倒的に多いが、完形が1個もないこと、器形の推定が甕・深鉢の数が多く、若干の注口部・把手部・深鉢・皿・朱彩小型土器片のみであったことは顕著な特色である。また土器の破片を中心として造られた径3cm余の円板（打ち欠いたもの）が60個以上出土していること等も、この遺跡の性格を知るに必要な資料である。

なお今次の調査においては、対象が女鳥羽川の河床に発見された遺跡であることから、考古学的調査と併せて地学関係の調査を同時に行なったが、このことについては幸にも長野県教育センターの専門主事平林照雄理学博士の協力を得、同氏の手を経てなお専門の自然学者の手をわずらわした。地質時代以降女鳥羽川の川筋が何回となく変り、また松本盆地を造る営力となった薄川や田川・奈良井川の運搬堆積作業、凡そ標高600mの線をもって想定される旧深志湖の提唱、遺跡地帯泥土中の植物鑑定、顕微鏡調査による花粉分析や遺跡時代の植物相の復元等、価値ある多くの調査結果を得た。

ヨモギ・ススキ等植物の他か、ヤナギ・クリ・クルミ等の木本、またイネ科の花粉の発見もあり、遺跡地から直接籾や籾痕のある土器の発見こそなかったが、やがて弥生式時代を迎えて農耕文化にはいる直前の姿を思わせるものがあった。またここの砂泥質粘土を使っての土器焼成実験も、平林博士による新しい試みであった。

植物遺体の中にあった多量のクルミの核の発見、クリ・トチの皮の発見は遺跡時代人の食用に供したものであり、動物遺体によるシカ・クマ・イノシシ・キツネ・テン等の歯や角・骨も当然遺跡時代の人々の食用に供されたものであろう。中でも最も多く発見されたのはシカの遺体の部分であるが、中には落ち角もあり、細工のために拾ってきたものも混在している。こうした動物遺体の中に鳥骨や、亀甲・魚骨の無かったことは予想外のことであったが、魚鳥の骨は獣骨と異って保存され難い理由によるもので、実際には旧深志湖の魚鳥は多く捕食されたことであろう。

遺物包含層の土層中に藍色の変質物を多くみたが、これは平林博士の分析結果によると鱗化鉄とのことであり、動物質の混在が証明される。当時の自然相については、動植物遺体の一部を鑑定していただいた早稲田大学の直良信夫博士も、凡そ現在の自然相に近い姿であったであろうと所見を述べておられる。なおこの川筋が中世末か近世において人為的に改められたとの説もあるがその点については論及を避ける。しかし、自然力による川筋の流路変更はしばしばあったことが証明されている。また多量の出土をみた後・晩期の縄文土器片については、樋口昇一氏の詳細な報告があるように、複雑な文化相の一斑が明らかにされ当地方縄文後・晩期の研究に一石を投じ、藤沢宗平氏の考察はまたさらに総合して他の類似遺跡との関係に及んでいる。　（原　嘉藤）

第２節　考　　察

(1) はじめに

河床から考古学的遺物が出土するということは、その包含状態によっては、その河川の成立を物語る意味で、出土遺物の内容のもつ意味とは違った、これらの地域の自然と人間との交渉の歴史という別な意味をもつ。

松本平においても、かつて、田川の平田橋付近で河床から須恵器が出土し、それ以北の現在の流れが、或は、この頃成立し、それ以前には、現在、平田橋上流付近から分離しているのではないかと思われる「寺安渡堰」（穴田川）と呼ばれる小流が、当時の田川の本流ではなかったかということを考えたことがあり、また、現在の松本市丸の内の日本銀行建設の地下工事中に、地層の堆積状態を、断面から推定して、植物繊維の腐植層が幾つにも濃淡を示して存在し、その形成の過程において、時に陸化し、時に水中に没したことのあることを知ったが（拙稿「松本市大柳町所在低湿地遺跡」『信濃』９の１０）、同時に、その層に砂利層がレンズ状に介在し、現在は、地表から観察できない地下に東北から南西に小流が流れていたことを知ることができた。

今回の調査は、以上の小規模な知見の上に、新しく大きい知見を与えてくれたという意味で、重要な調査ではなかったかと思い、なお、師走も終わりの２５～３０日の調査では、必ずしも、十分な調査とはいいがたいので、今後の再調査が期待されるのである。

今回の調査の一般的意味については、前項で原団長も述べており、私も上述の如く簡単に記したが、次に、その調査の成果の内容と、そのもつ意味について若干ふれたい。

現河床下にある遺物の包含層は、縄文土器を含めて後・晩期の縄文期の遺物と、古墳期の土師器の類など共に現河床の下につづく腐植土層を黒色粘土層と、それを横切って流れたと思われる小流に沿って発見されている。従って、縄文期の遺物と土師期の遺物は、もちろん、その時期を異にし、かつ、これらの包含層の下層には、再度、大小礫を混じえた砂礫層が存在し（勿論その間に青灰色粘土層などを含むが）、これが、古女鳥羽川ともいうべき流路の河床となるのではないかと思われる。普通には、女鳥羽川の流れは、浅間橋付近でその多くが伏流し、桜橋付近で再び湧水し、かつ、湧川の流水を容れて、それ以下では常に絶えない流れとなっているといわれているが、遺跡は、正に、その中間にあって、元来、流量は、余り多くはなかった地点でもある。

換言すれば、腐植土層（黒色粘土層）は、その枝状河川の地形の間に点々と島状にあったのではないかと推測される洲状のものではなかったかと思われる。しかも、その上に砂層の存在することは、縄文期の生活が営まれたあとにその流れのあったことを物語るものではないだろうか。

なお、この遺跡のそのような変遷については、前章において平林照雄氏が詳述されているのでここでは、遺物の存在した地層について考古学研究の上からの知見を大雑把に述べることにとどめておきたい。

(2) 遺　構

縄文期の遺構と思われるものは、第1地点では、主として、A・Eトレンチとその拡張部及びCトレンチにみられた。

先ず、A・Eトレンチとその拡張部の遺構と思われるものについてふれてみたい。

ここでは、拳大前後の自然石（角礫となって）が、ほぼ、東西約4m、南北6.5mの長楕円形に1つ並べに配石された状態で発見され、その角礫の間に土器片が、石器の類とともに、無数に介在して、あだかも、角礫と小土器片とを一定範囲に敷詰めたごとき観を呈していた。

いうまでもなく、その範囲外は、角礫・小土器の発見がないというのではないが、あまり、みられない状況で、この配石状態は、一つの人為的な遺構と思われた。

ただ、この配石遺構が、いかなる内容をもつかということになると、決定的な資料を欠くために適確にはいいがたいが、住居趾・工作趾ないし宗教的な遺構などという考えが浮んでくるだろう。かりに、住居趾とすれば、炉趾とか柱穴趾とか、その他傍証的資料でもないかと、調査中も注意を払ったが、普通のローム層内の施設とは違って、柱穴の発見も困難であり、ついに、柱穴趾と思われるものを確認できなかった。炉趾と思われるものにもあわなかった。もちろん、ただ、礫・土器片の敷き詰めた状態の部分が、一定の範囲に限られること、低湿地に地盤の安定を計るために礫や土器小片などを敷詰めたと思われる点などが、住居を営むためには都合がよいのではないかと思われただけであって、石器（石鏃・打製石斧・石匙・凹石・礫器・石錐・砥石など）や土偶・耳飾りの存在も、それを裏づけることは、必ずしもできない。

配石趾の東側に、黒曜石屑の蝟集するのがみられた。この事実からいえば、この配石遺構は、工作趾と考えられないこともない。礫や土器片などをある範囲に敷詰めた状態も、工作址の場としての地固めとも理解される。しかし、この場合も、石屑の存在ということだけで工作址と速断することはできない。

Aトレンチ第3区南西部、現河床より30cmの黒色粘土層中に、長さ25cm、腰部最大巾14cm、頭部が欠損し、西北－東南の位置に、背を上に胸を下に、水平におかれていた大型土偶の発見があったが、配石址との関係は、その直上にあった訳ではないが、その西南隅にあって、配石面の上10cm～20cmである。今回の調査の契機ともなった大形の土偶の頭部は、上述土偶の頭部に合して一つのものとなることを期待されたが、文様の構成は、やや、似ているものの文様要素の違いから別なものと私考され、期待は裏切られたが、どちらかといえば、二つの大形土偶の存在は、この配石趾と関連づけてみることも無意味なことではない。

配石址は、もし、実用的なものとすれば、住居ないし工房としての存在が考えられ、配石の範囲はあくまでも、軟弱な土地の安定化のためであったと考えられ、非実用的なものとすれば、土偶の存在とも考え合わせて後・晩期縄文人の儀礼施行の場であって、土偶、それが、かりに、破片であっても（あるいは破片であることに意味があるかもしれない）、土偶を埋めること（水平におかれた状態は、あだかも、人間の大の字形におかれた状態である）そのものを一つの信仰的行為の表現とみることもできる。

なお、この配石址のやや北に寄って１本の杭の頭が角礫直上に僅かに出ていたが、これは、後述するように、この外の木材ないし杭と同時期のものであって配石とは無関係のものと思われる。

更に、この時期の配石址については、この地域では、晩期前半期のエリ穴遺跡に集石址（拙稿「松本市北内田エリ穴第２地点遺跡－耳飾りと土偶と集石址－」『信濃』１９の９・１１）があり、石鏃・耳飾りが多数に出土した外、類例を聞かないが、県内では、例えば、下高井郡山ノ内町佐野遺跡では、７ケ所の集石址を認め、集石址付近に遺物の出土が多く、二集石址の間からは比較的多量に獣骨が出土し、１集石址では１０余ケの石鏃が混入し、焼土もみられ、結局、埋葬に関する遺構としての兆候はないが、広く何かの儀礼的行為に関係ある遺構と考えられている。（長野県考古学会研究報告書３『佐野』）

埴科郡坂城町保地遺跡でも、炉を中心に約４m四方に配石があり、鹿・猪・犬などの自然遺物とともに、土器・石器（磨製石斧・石刀・石槍・石皿・石錐・石匕・石錐・石皿など）、円板・石冠などの石製品、土偶・耳飾り・円板などの土製品、骨角器などとともに抜歯のある人頭骨が存在し、炉中心の住居の存在とともに、埋葬とそれにともなう儀礼的行為の存在を考えさせた。（関孝「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』５１の３）

前述のエリ穴遺跡では、長軸は北西から東南に約２m、巾１mの長楕円形プランの拳大ないしそれより大きい自然石１００余個が、やや、くぼめられた地形に集石され、その自然石そのものないしその周辺さらにその下層に動物の細かい火熱を受けた骨片が発見され、なお、耳飾り・石鏃・土偶などが集石遺構とその周辺に集まっていた。これも、埋葬遺構とは思われないが、何か儀礼的行為の表現と推測された。

本集石遺構も、やはり、これらの集石遺構と類似し、埋葬遺構の徴候は全くないが、一応、信仰の場であったように思われた。

Ｃトレンチも、礫層（現女鳥羽川河床）を除いた青色粘土層から発掘を始め、黒色腐植土（粘土）層、青色粘土層、黒色腐植（粘土）土と重層し、遺物は、第二層目の黒色腐植土（粘土）層中から出土する。この地点も、黒色腐植土層の上層に腐植土と混じって礫が集石するが、Ａトレンチとは異って円礫が主体をなし、その間に縄文遺物が出土する。その状況は、第２区に同じではないかと思われる。

土師器の遺構と思われるもの、ないしその遺物は、Ｂトレンチの第１・２層の黒色腐植土（粘土）層を横切って南北に流れる小流と思われる砂礫層の西側に、ある間隔をおいて立つ材（さわらなどを縦に割き易い性質をもつもの）と、主として、横にしかも東西方向に横たわる木材（加工されたものも含む）の一群と、Ａトレンチ第７区にある黒色土層に重なる砂質粘土層にある材

の立っているもの、横たわるものの一群（上述の配石遺構内の材も含め）とその間に発見される土師器の類である。杭については前項で倉科氏がいっているが、垂直に立っていた杭は、河岸によくみられる護岸の意味をも含めてのものではないかと推測されるが、立木と立木を結ぶ柵ともなるものの遺構が資料として残っていないことは、これらの立木の意味について、護岸の意味などと速断できないようにも考えられる。しかし、南北方向に点在することも事実であって、その意味では、今日の堰などの西岸に立木などが点々と残る光景などをほうふつさせるものがあり、何か河岸に必要な施設があったものと考えてもよいような気がする。

横たわる木材のうちには、先端を尖らせたものもあるが、用途不明なものも多い。

なお、この小流と思われる砂礫層が、事実、小流であって、その東岸にも同様な施設があったものか否かは、未調査のため、不明である。

ただ、調査の範囲では、現河床礫の下は、上述のように青色粘質砂層・黒色腐植層が重層し、その現河床下における長さ・巾、即ち、それらの分布範囲は調査の及ばないためにわからない。ただ、上述、粘質砂層・腐植土（粘土）層の重層を横切るように砂礫層が存在していることは、女鳥羽川の巾が、いつも、一定したものではなくて、広い時期、狭い時期があって、この遺跡の付近が、表層を流れる水量の割合乏しいところであったことを考えると、常に絶えず水草のある河川の巾は、かなり、時期によって相違があり、また、その小流も直線的ではなくて曲折の多かったものではないかと推測される。縄文期と古墳期ないし仮りに歴史期にはいったとしても、土師器使用の時期は、その小流の両岸にあって、地形的には不安定な場所であったに違いない。少なくとも、広範囲な居住範囲をもつというのではなく、極めて、小集落が点在するという形をとったに違いない。ただ、これらの河岸における土器の存在を、偶然、そこにあったものと解するか、あるいは、何らかの祭祀的行事のために用いられた土器の遺存と解するか、その具体的問題になると、一方を利するような徴候は殆んどない。

(3) 縄文期の遺物

縄文土器の一部は、後期末に属するものもあるが、その大部分は、晩期前半から中頃にかけてのものではないかと思われる。

この時期に属する縄文土器の出土は、この地域では、極めて、稀れなことであって、その意味からも、重要資料といえよう。

後期中頃の縄文土器としては、前述日本銀行敷地内出土品が最も多く、晩期前半のものとしては、上述エリ穴遺跡出土品があり、後半のものとしては、松　市寿区五行遺跡出土品をあげることができるが、本遺跡の出土品は、エリ穴・五行両遺跡出土品、殊に、前者のなかに含まれるものが多いと思われる。

本遺跡の場合、有文土器と無文土器の量的な差は、甚だしく、前者は、全体の十分の一にも及ばないのではないかと思われる。有文土器といっても、いわゆる亀ケ岡式に類するものは、甚だ少なく、地のものではないかと思われる。

石器については、礫器・石鏃（有柄・無柄・黒曜石・チャート）、石錐・打石斧・凹石・掻器

・石剣など、土製品としては、土偶（頭部・胴部・足部破片など）の外、有孔・無孔の円盤が目立ち、耳飾の出土もかなりあった。骨角製品では、弭の破片と思われるものもあった。

生物関係の遺物としては動物では、鹿・猪など、植物性のものでは、胡桃・栗・とち・桃・ひょうたんなど出土し、殊に、ひょうたんの出土は、植物栽培などと関連し注意すべきものではないかと思われる。（土師遺跡からではあるが）

なお、自然遺物については、直良信夫博士や鈴木誠博士らの鑑定を得たものもあり、その種類は多い。低湿地遺跡の乏しいこの地域の、この方面の資料には多くの新資料を追加でき、当時の自然環境解明の上にも、大きな役割を果すものではないかと期待している。

なお、第2地区については、その地区設定の目的・発掘経過など太田喜幸氏のみるとおりであるが、これによって推測すれば、第1地区と第2地区は、そのままつながる模様はなく、ほぼ、同じ縄文期に、やや、距離をへだてて家が点在しながら、一つの社会構成をなしていたものではないかと思われる反面、第1・第2両地区は、同一集落のなかにあって、その土地利用の面で異るものがあったのかとも推測される。

（藤沢宗平）

編　集　後　記

女鳥羽川遺跡が発見されたのは昭和４５年の１０月のことである。護岸工事の西側の断面の粘土層の中に黒褐色の、割合に焼きのいい無文の土器片の混入をみたときは、縄文遺跡とは思いもかけなかったが、二度三度と現地調査を進めているうち、はからずも現場で作業している人々の協力を得て大型土偶の面部を発見し、間々黒曜石片や、僅かに縄文の施文のある小土器片をみるようになって、縄文遺跡として範囲の広いものであり、調査すればこの地方に調査例の少ない縄文後・晩期の遺跡の調査ができることを感じた。これが１０月の１５日のことであった。以後所定の手続きをとるとともに事業者に緊急調査の必要を説き、工事現場の人々には、くれぐれもこの遺跡の心なく破かいされることを防いでほしいと頼んだ。こうして調査が行なわれると決ったのは１２月も中旬となってからのことである。工事と気候の都合上年内調査と決ってからは、何としても早急の処理をしなければならないし、年末のため団の結成も不可能となる心配もあり、万止むを得ないときは機械力を利用して、教育委員会の手のみの調査もしかねないと考えた。しかし電話をもって松本深志高等学校の藤沢宗平教諭はじめ、東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会の考古班委員の承諾を得、また中信考古学会・市内高等学校考古学クラブの生徒諸君も協力を予約し、調査団の結成は心配する程ではなく直ちに結成された。しかし１２月２６日からの調査となると、天候の異変も考えられ、なお心配は絶えなかったが、結果的には天候にも恵まれ、異色にして短期間の調査研究がなされたのである。

なお今次調査についての事務上の協力者は松本市教育委員会社会教育課の加藤勝課長・田中明係長・木下雅文主事らであった。ことに田中・木下両氏は幹事として必要機材の購入、調査団の食糧調達、休憩場となる元町公民館の使用と連日努力を願った。また市職員の小松慶（日本民俗資料館主事）神沢昭二郎氏も参加されたが、特に小松氏には調査主任をお願いし、また遺物の保管整理をすべてやっていただいた。

調査現場には遠くは南安曇郡穂高高等学校の中島豊晴氏・豊科高等学校の太田喜幸氏らの参加も願った。また北佐久郡中軽井沢の土屋長久氏には、測量主任を願ったが、発掘調査中をはじめ発掘調査後も幾日かにわたって付近の測量や遺物の実測をしていただいた。また地学調査を分担された平林照雄氏は、公私繁忙中を参加され遺跡地帯の基盤的条件を明らかにされ明細な報告を寄せられた。

なお調査期間中長野県教育委員会文化財専門委員長一志茂樹博士の視察があり、古代史的な面について指導を願い、また長野県教育委員会文化課の金井汲次係長・桐原健指導主事らの指導を願い法的な処理についてもとどこおりなくすませた。また地学研究の信州大学教授田中邦雄博士・百瀬貫一博士らも現場を視察、調査団を激励かつ慰労するところがあった。

今次調査における費用の総額は５８万円、編集出版費も当初は９万円と定められたが、実際には予算不足で調査の場合は動力機械のうち柳谷工業株式会社（代表取締役柳谷与一氏）から多量の無料奉仕を願い厚く現状を復した。このようにしてこの重要遺跡の調査は終ったが、報告書編集の段階となって調査内容の豊富さから予算不足となり、さらに１０万円の追加支出を受け厚く本書刊行の運びとなったことは喜びに耐えない。

この間はじめから熱意を示された奈良井川改良工事事務所長　小林亮氏も藤田佳男氏に替わり、工務課長も望月勇氏から宮沢克氏に替ったが、庶務課長和沢道雄氏、主事青柳邦夫氏、技師赤津典康氏は在任され調査・出版の間において懇篤な配意を願った。また編集に際して樋口昇一氏には数日間にわたってお手伝い願ったが、特に感謝の意を表したい。

昭和４７年１月３０日

女鳥羽川遺跡調査団長　原　嘉藤

長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書

昭和45年度

昭和47年3月1日 印刷
昭和47年3月1日 発行

発行者　長野県奈良井川改良工事事務所

発行所　松本市教育委員会

編集者　松本市教育委員会
調査団代表　原　嘉藤

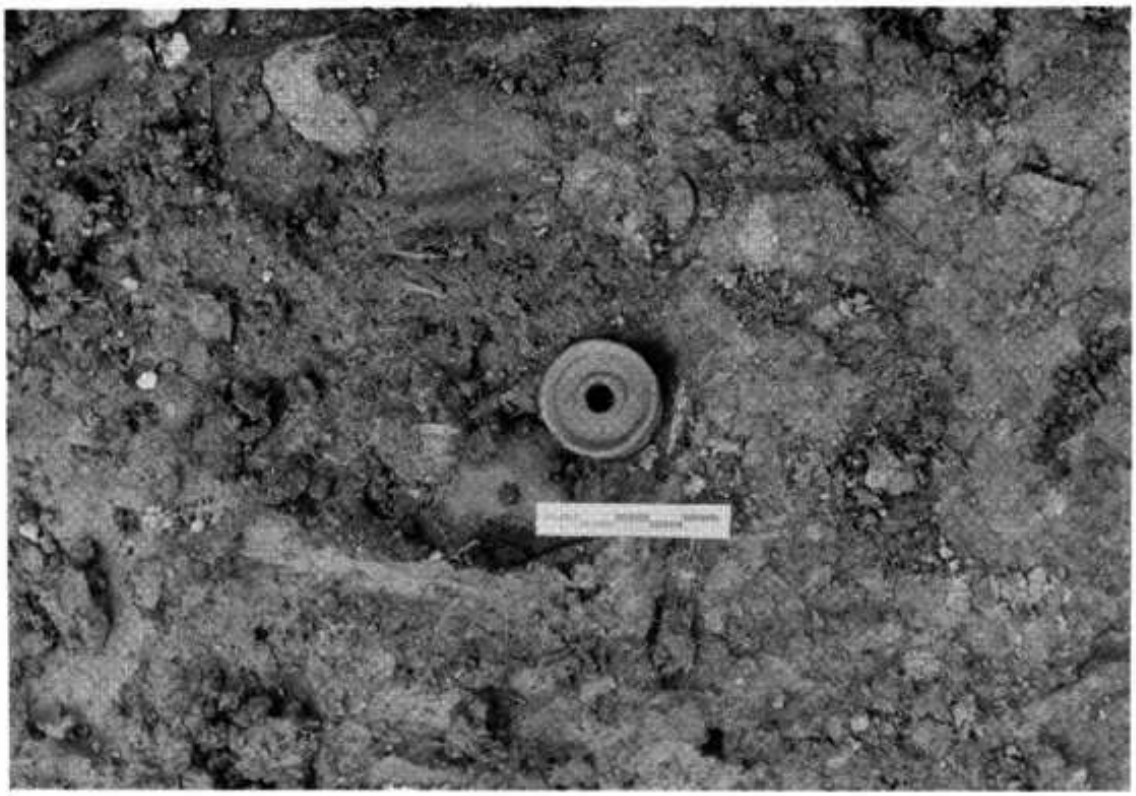
印刷所　松本市北深志1－7－16
すみれタイプ

（非売品）

図版１　遺跡全景
（上）第１地区・（下）第２地区

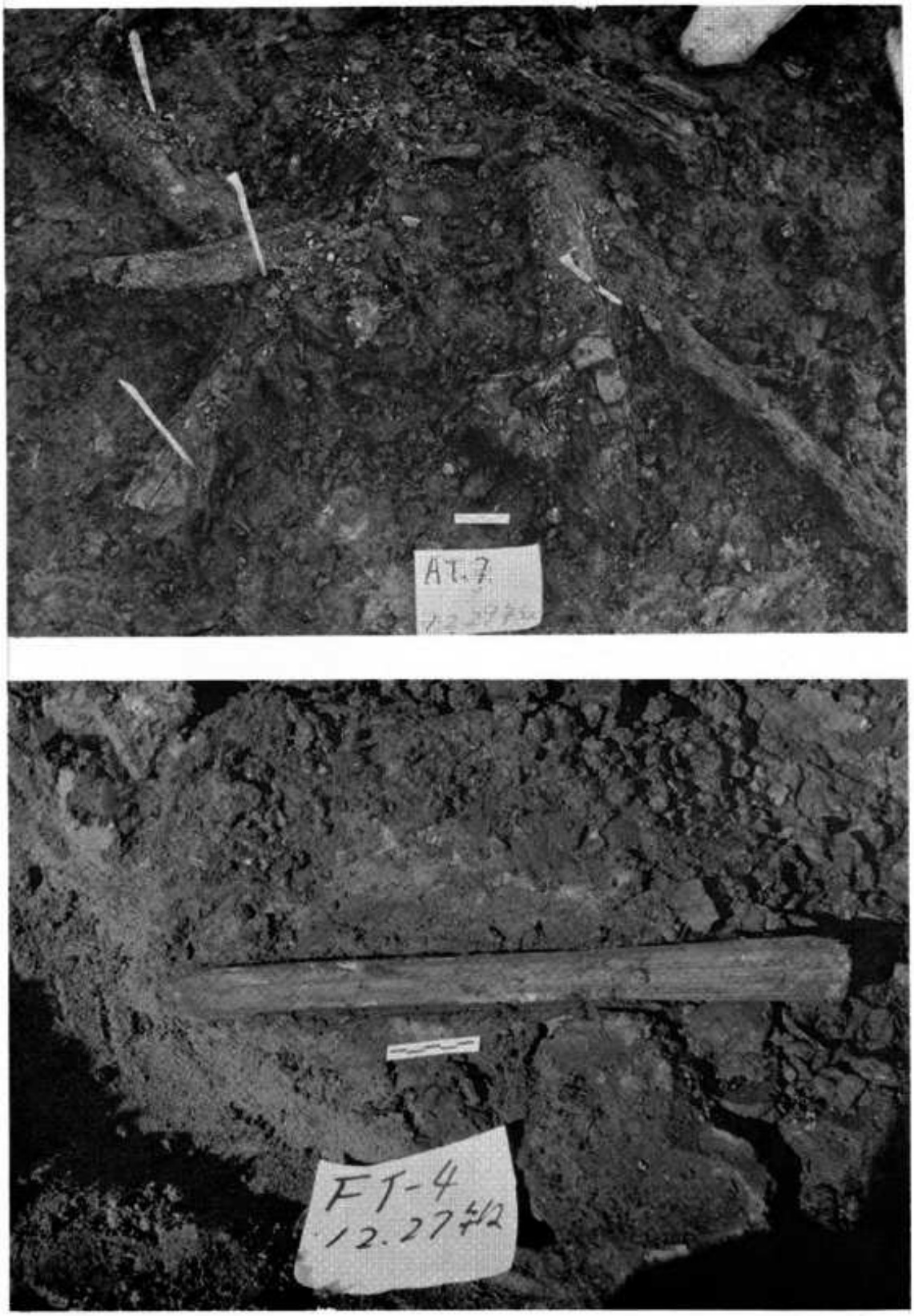
図版2　A3・5区遺物出土状態（上）A3区土偶出土状態・（下）A5区土師器高坏出土状態

図版３　A・Eトレンチ発見集石址（上）集石址全景（下）同上部分

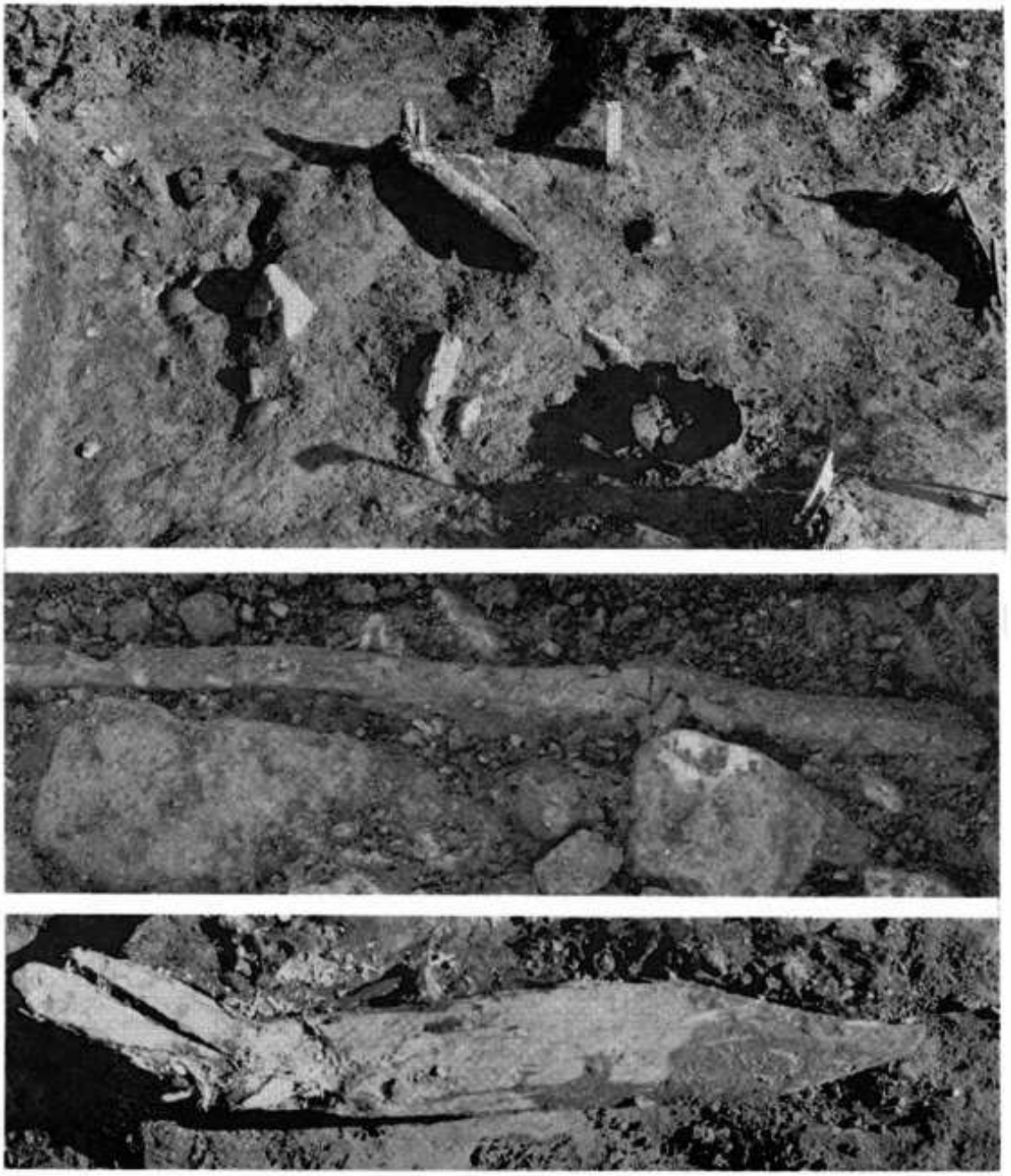


図版４　Ｃ・Ｄ地区遺物出土状態　（上）Ｃ５区土製耳飾出土状態・（下）Ｄ１区遺物包含状態

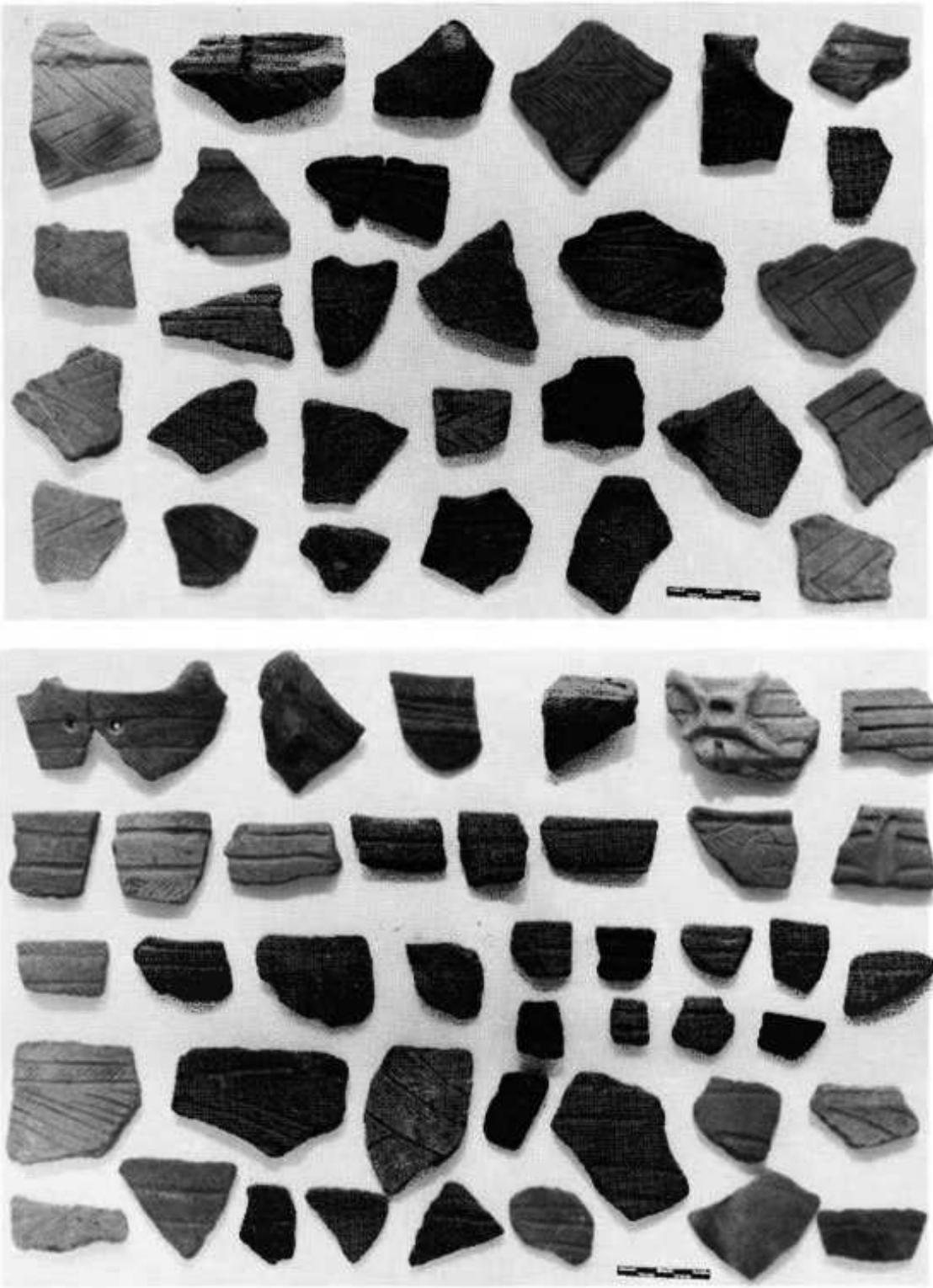
図版5　B・Fトレンチ発見溝状遺構（東より）



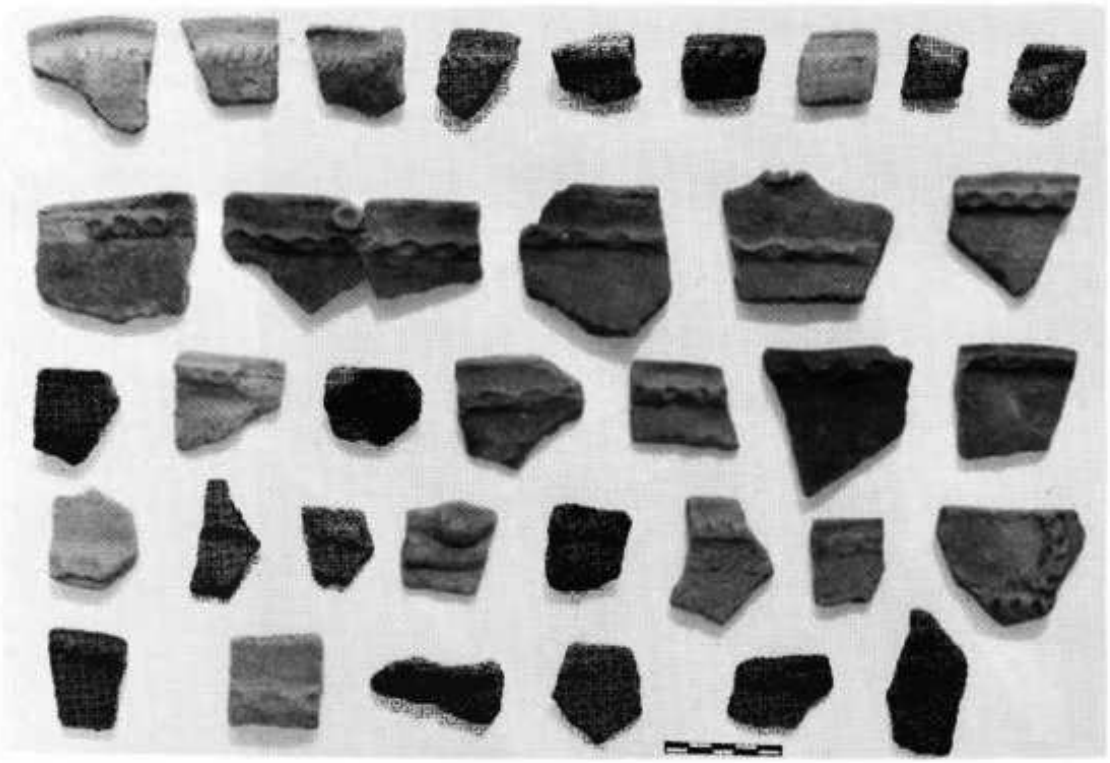
図版6　杭及び木製品出土状態　（上）A7区杭及び木材出土状態・（下）F4区木製品（柁22）出土状態

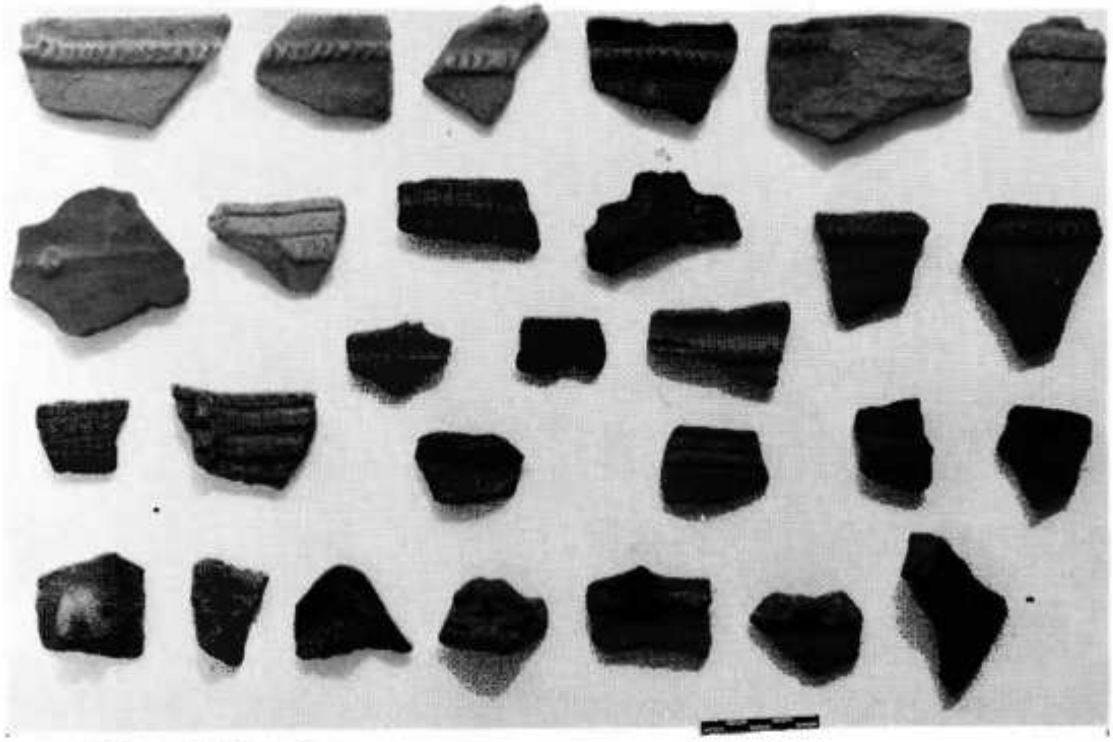


図版7　B・Fトレンチ溝状遺構内遺物出土状態
（上）土師器と杭・（中）下2区木材（№38）・（下）下5区杭（№12）

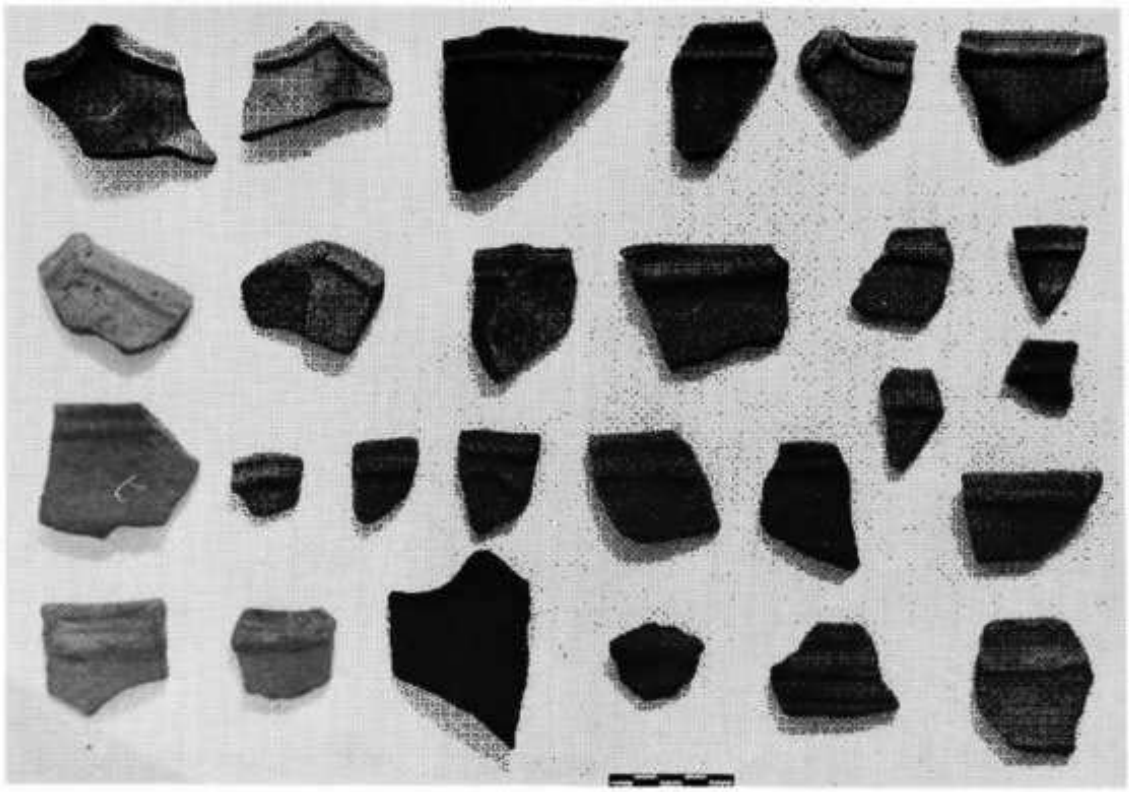


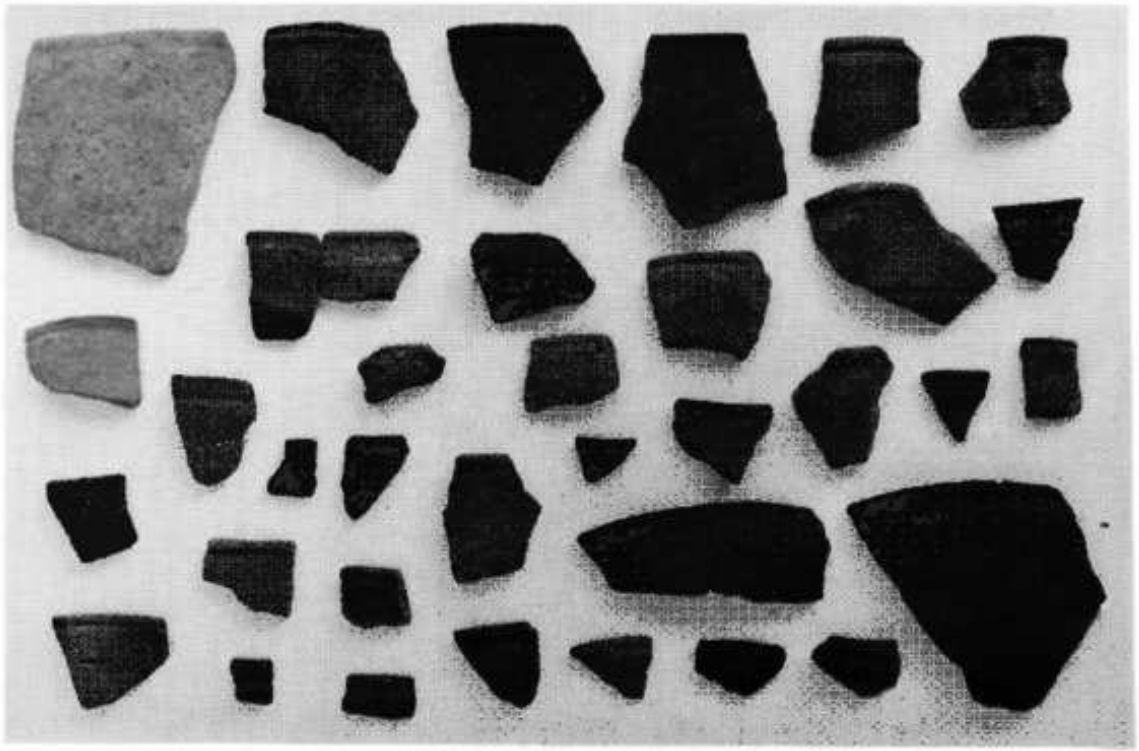
図版８　縄文土器（その１）



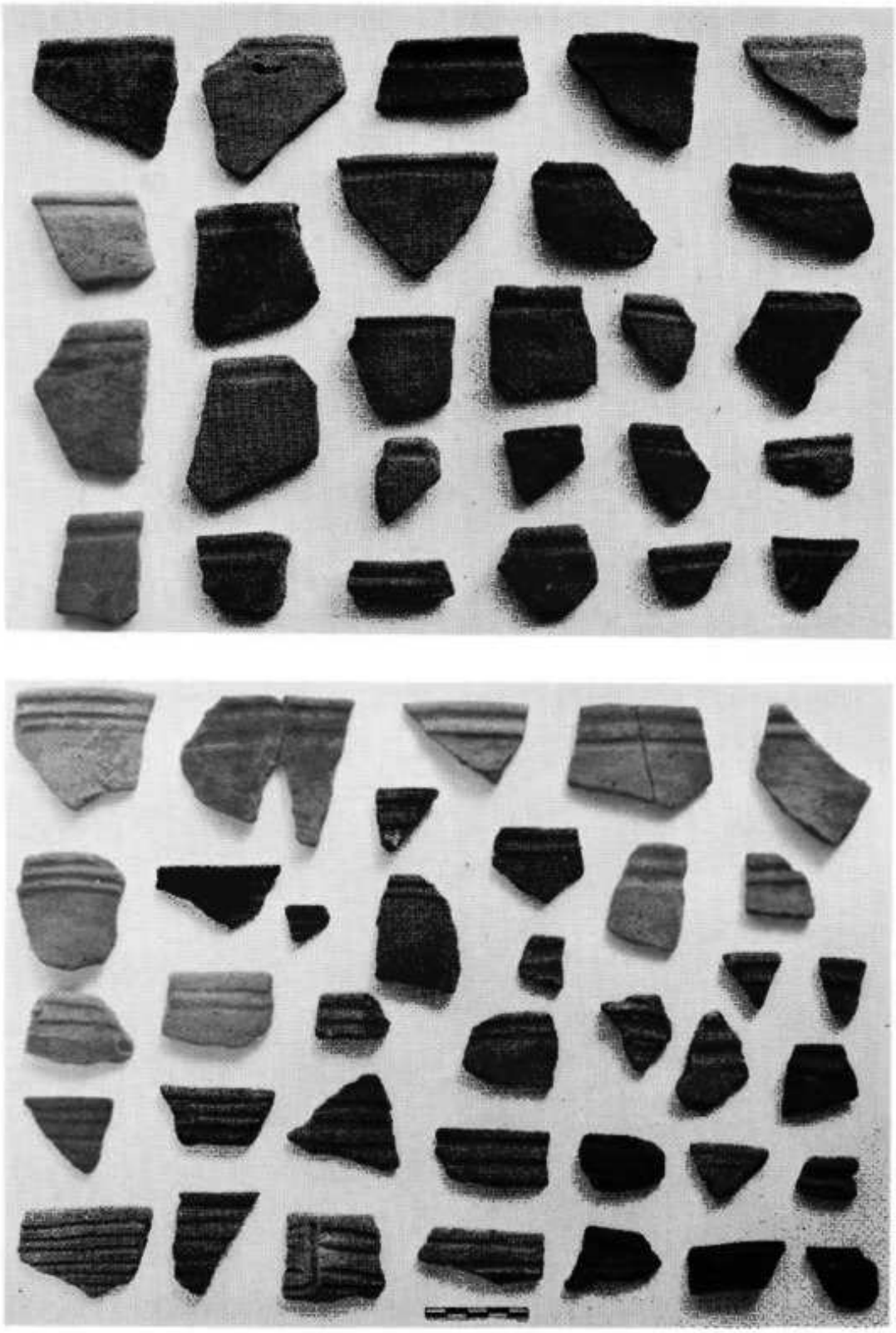


図版９　縄文土器（その２）

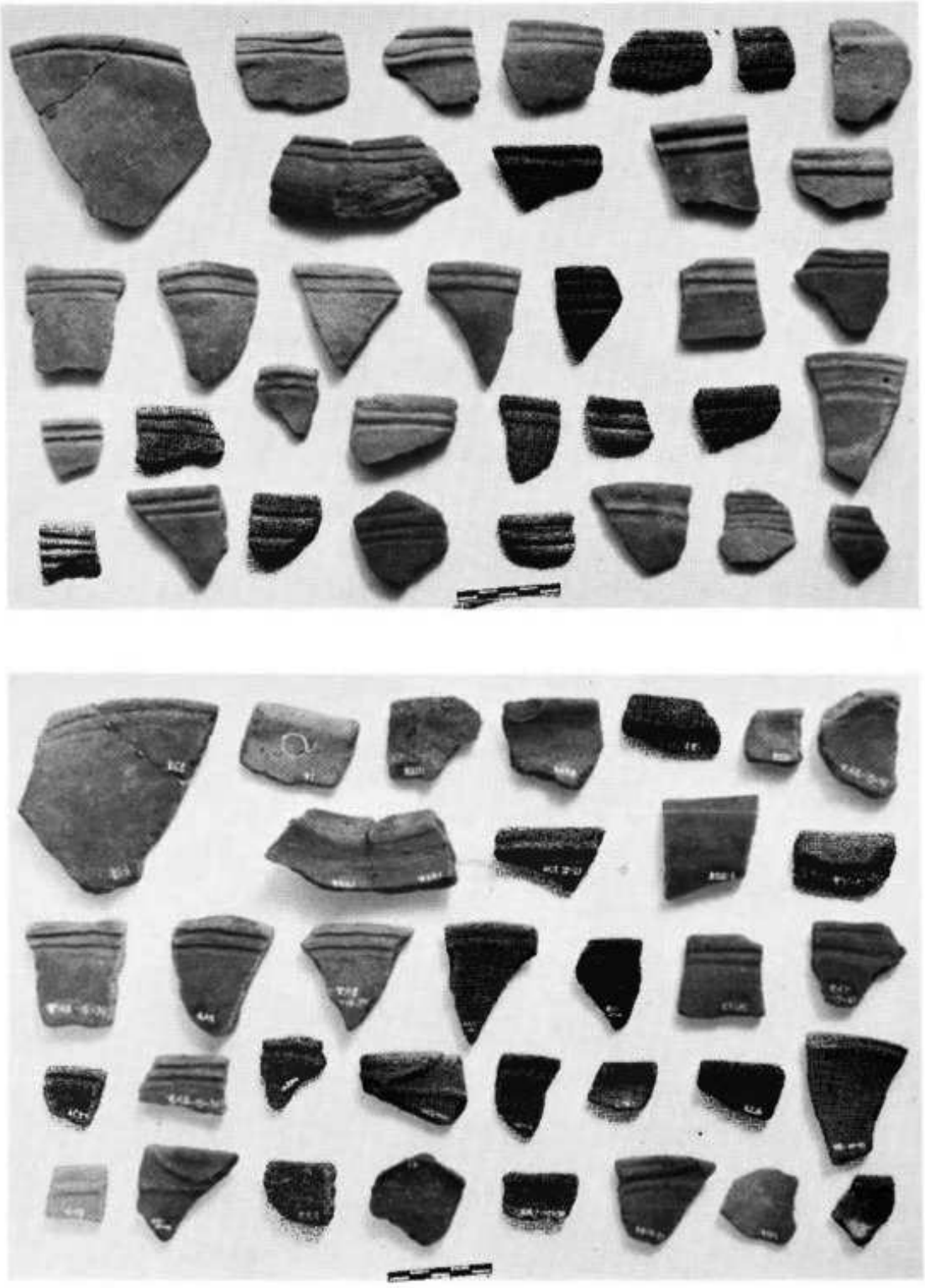




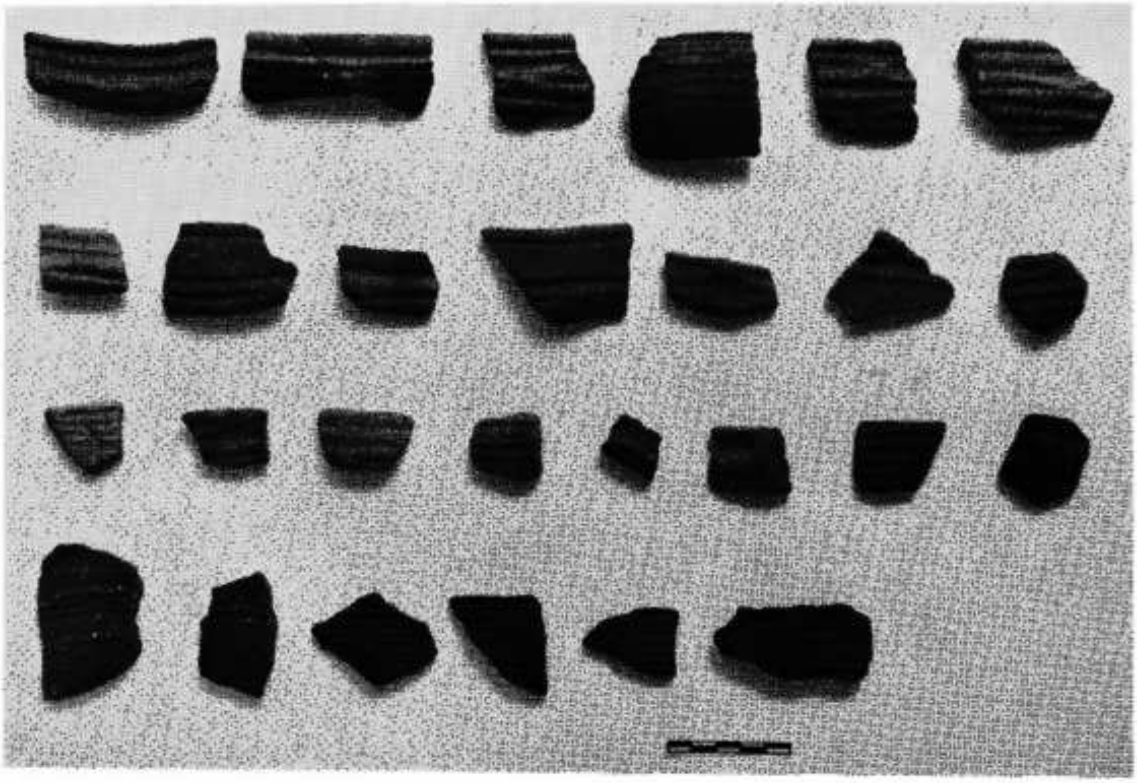
図版10　縄文土器（その5）

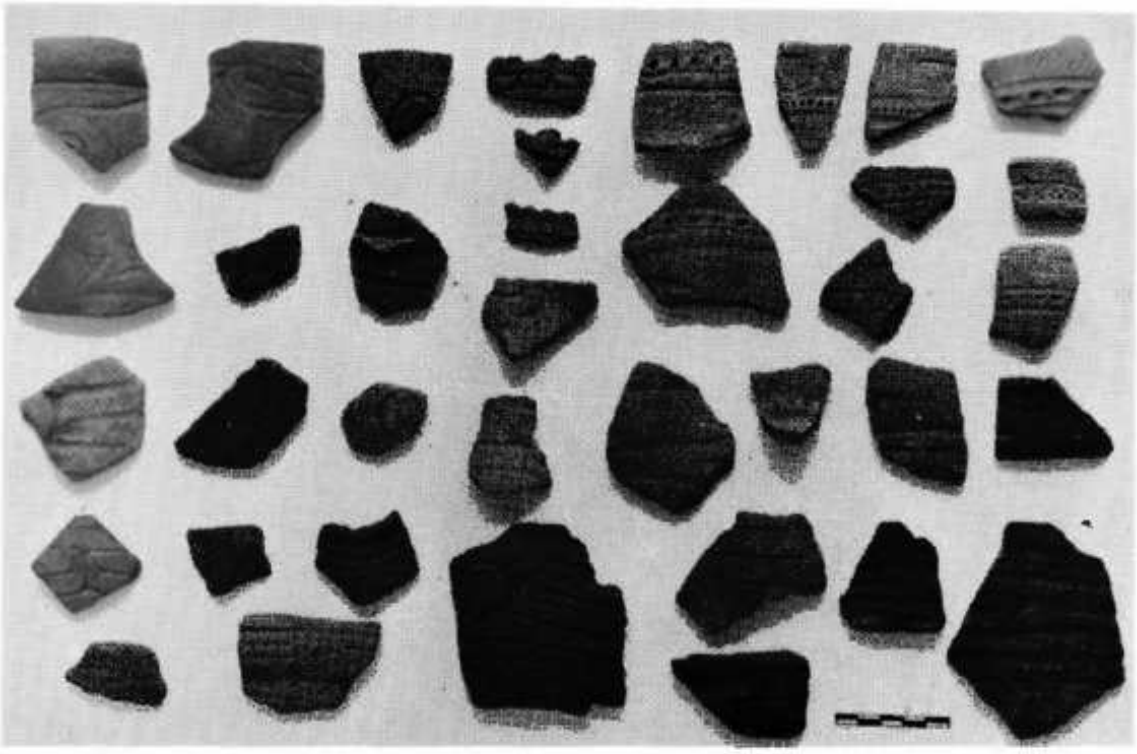


図版 11　縄文土器（その 4）

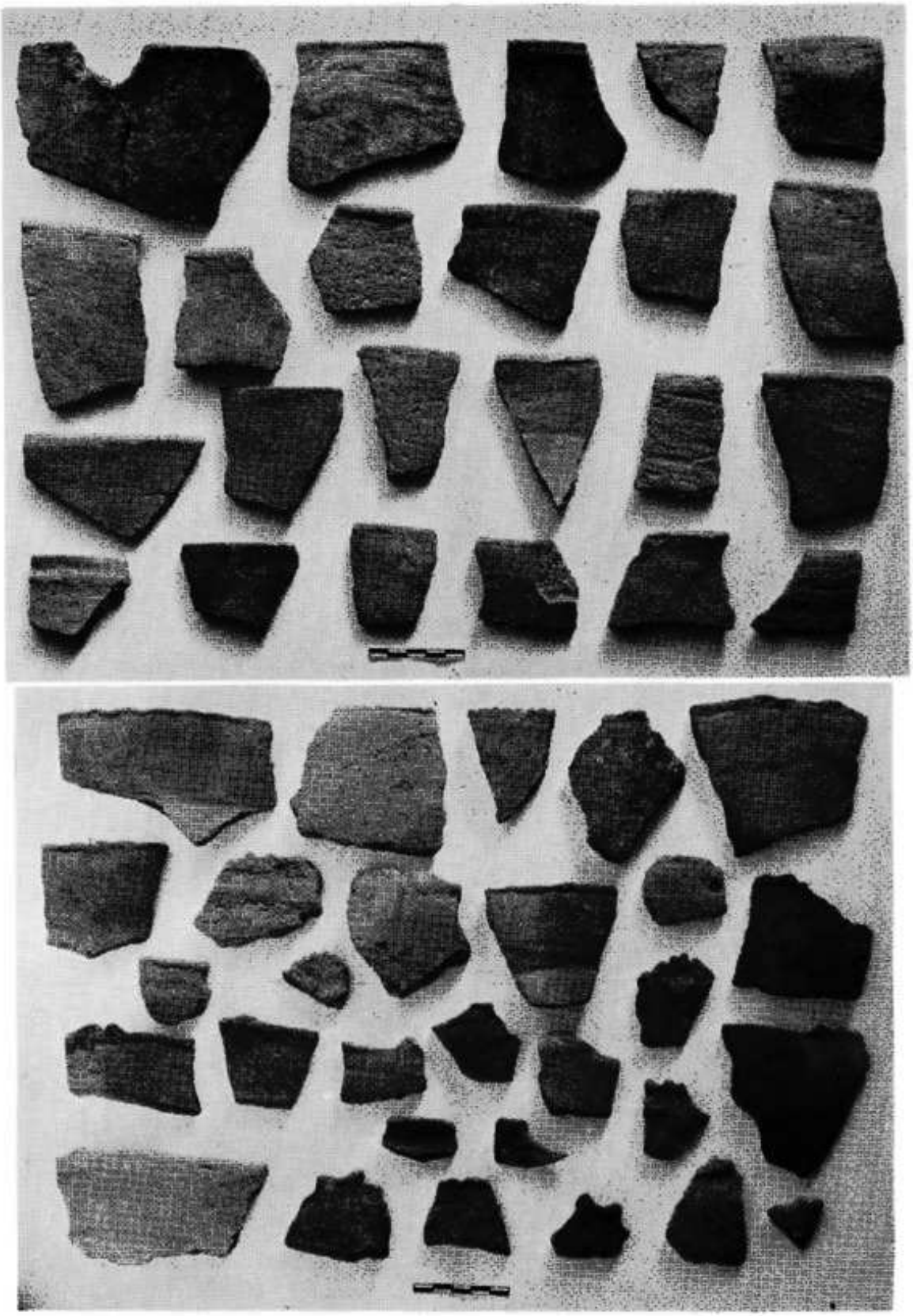


図版 12　縄文土器（その 5）

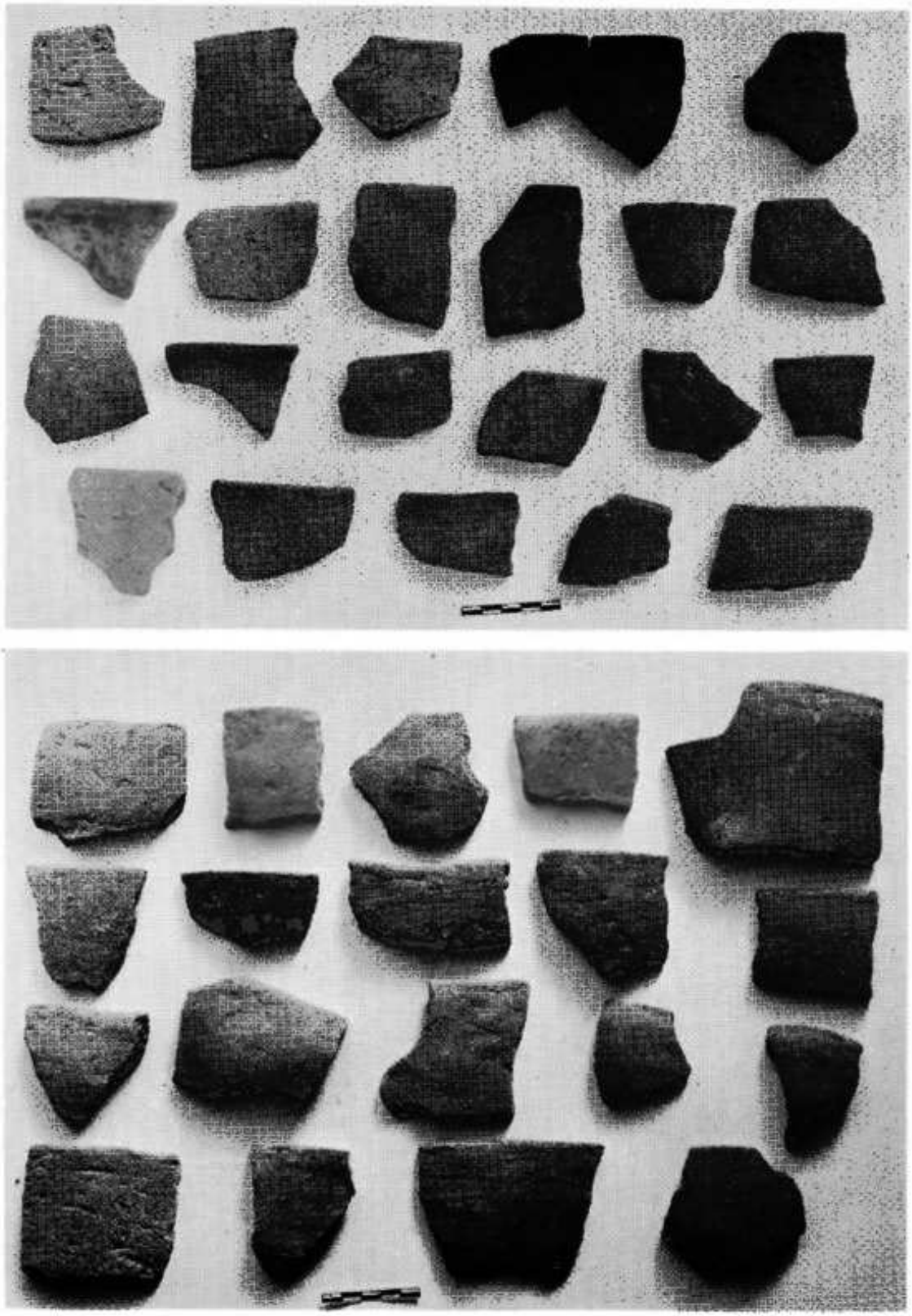




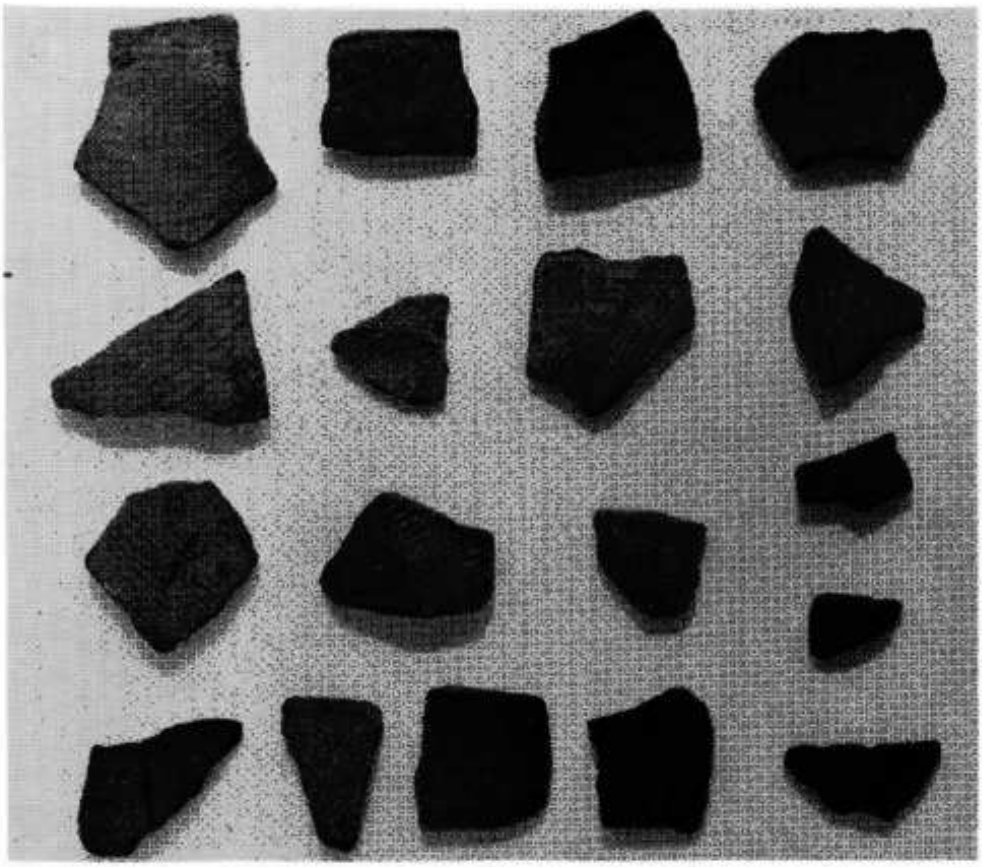
図版 13　縄文土器（その 6）

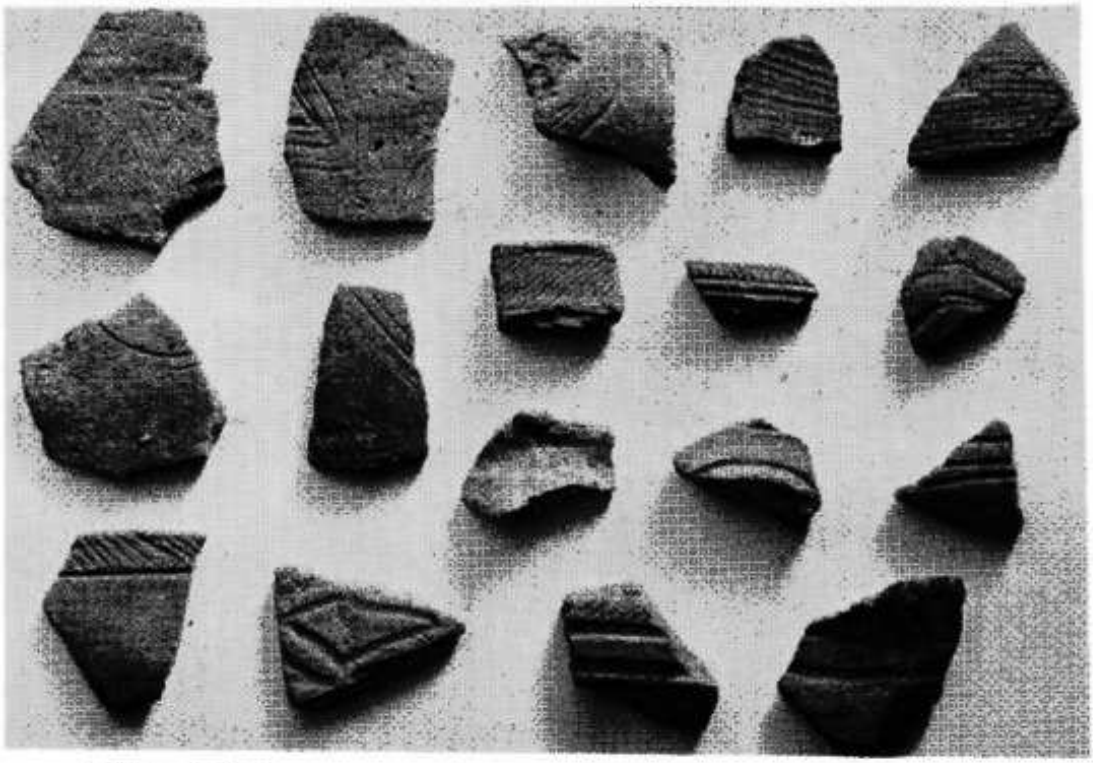


図版14　縄文土器（その7）



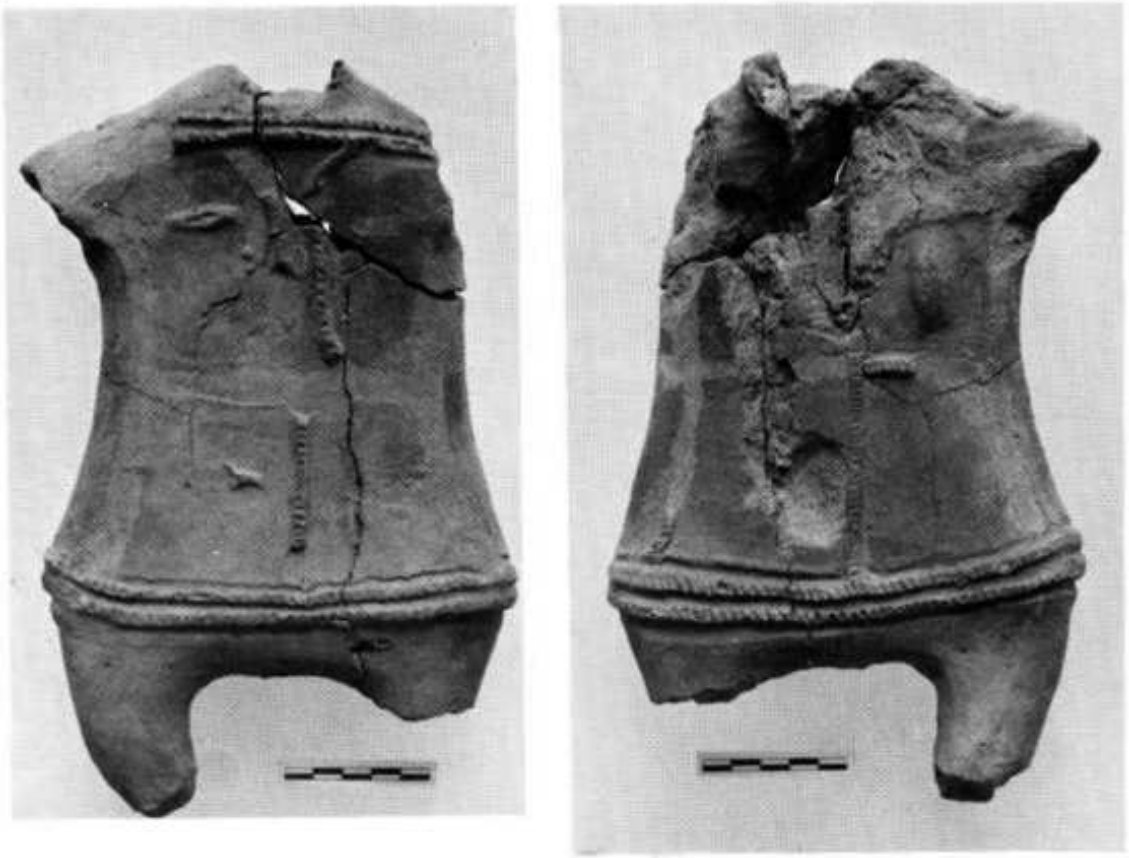
図版15　縄文土器（その8）



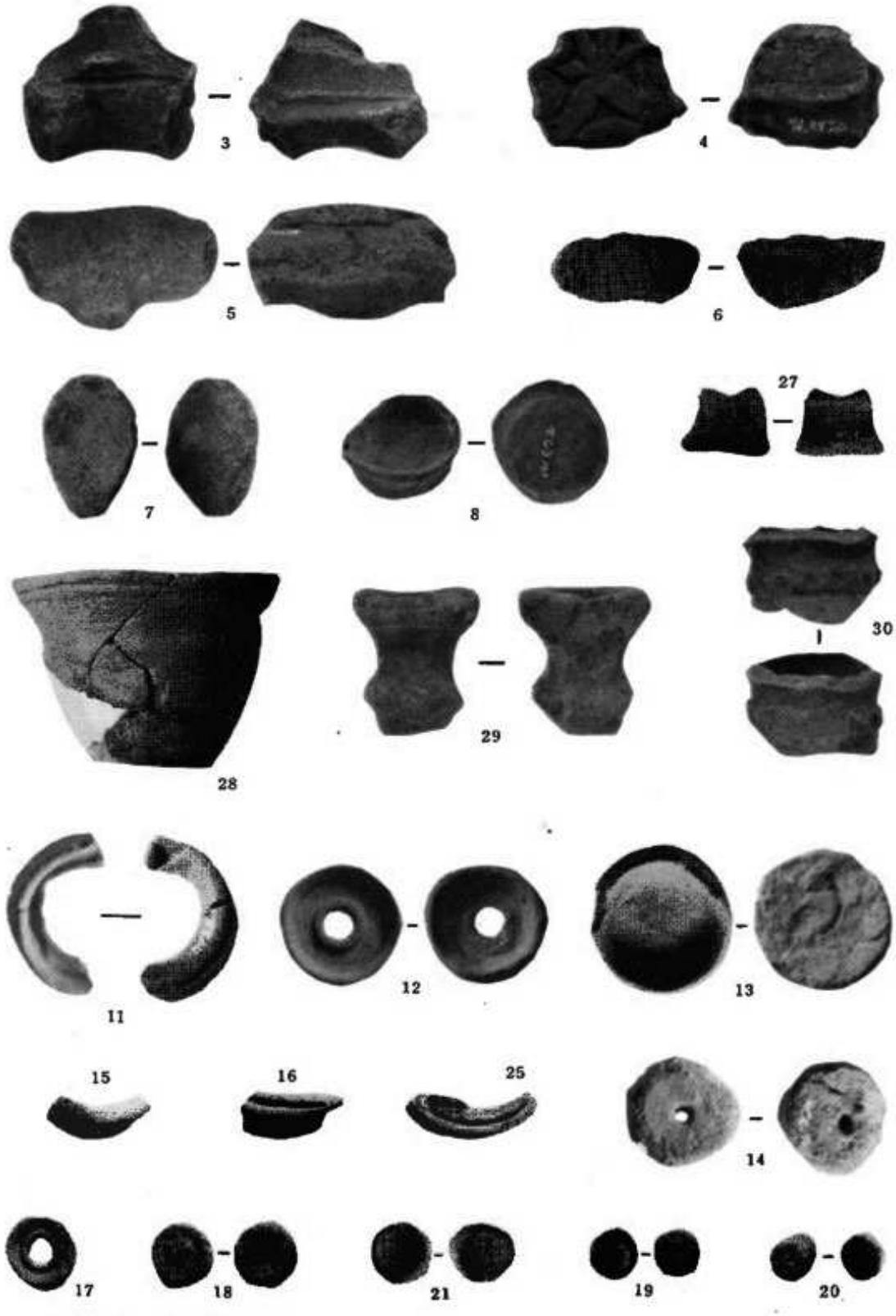


図版16　縄文土器（その9）

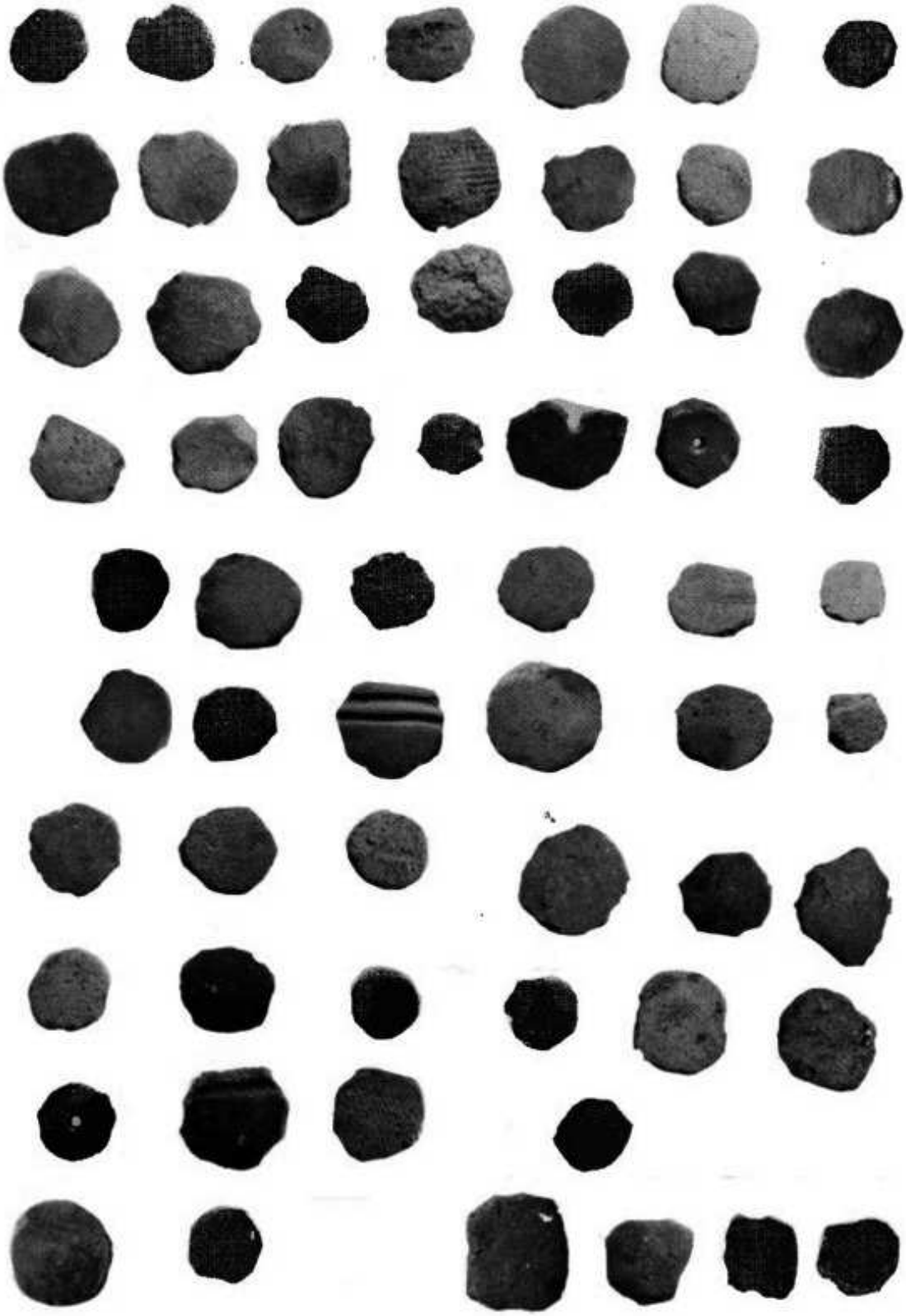
図版17　縄文土器（底部網代底）



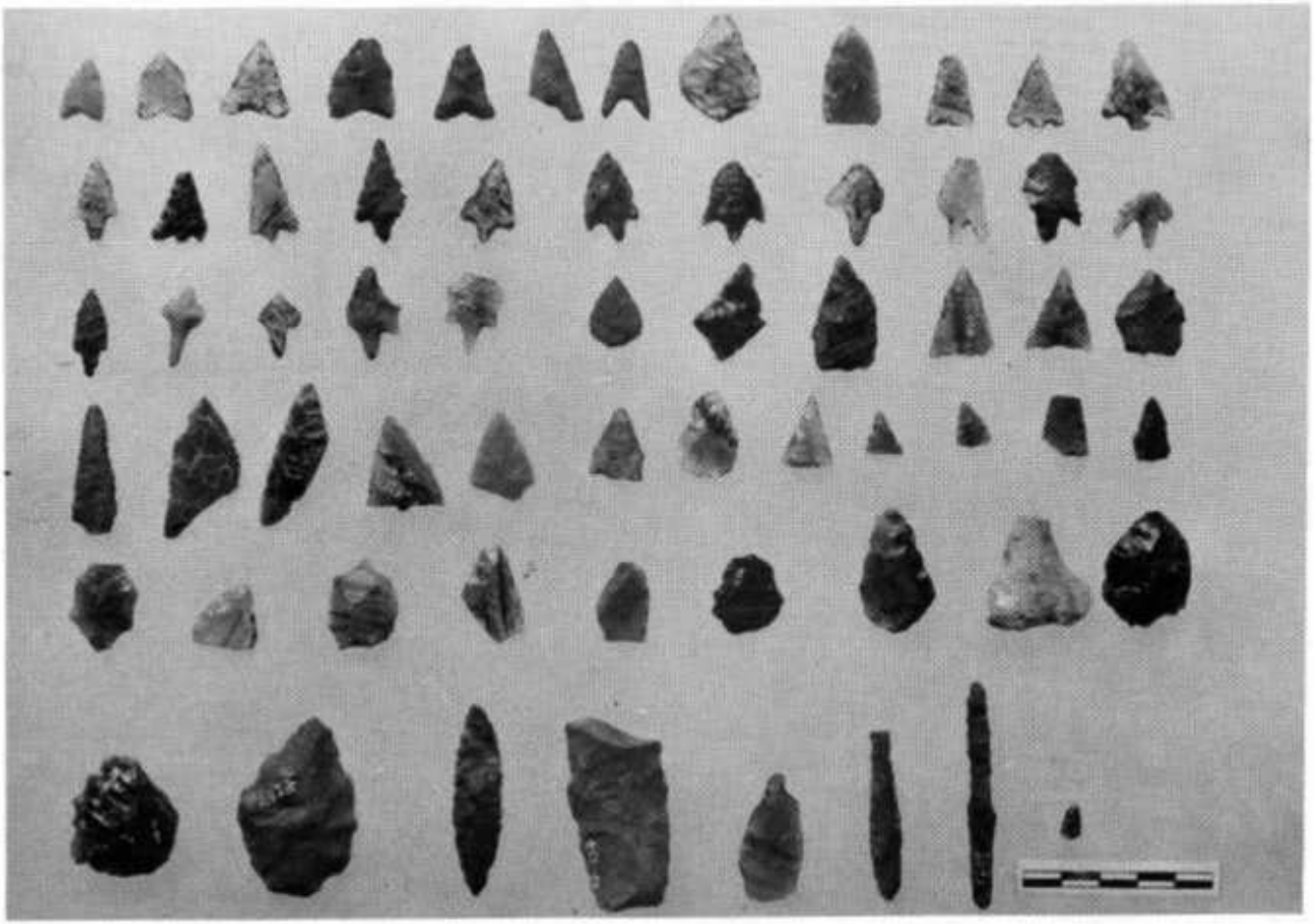
図版18　A３区及び付近発見の土偶　（上）A３区発見の土偶の胴部・（下）同付近発見土偶頭部



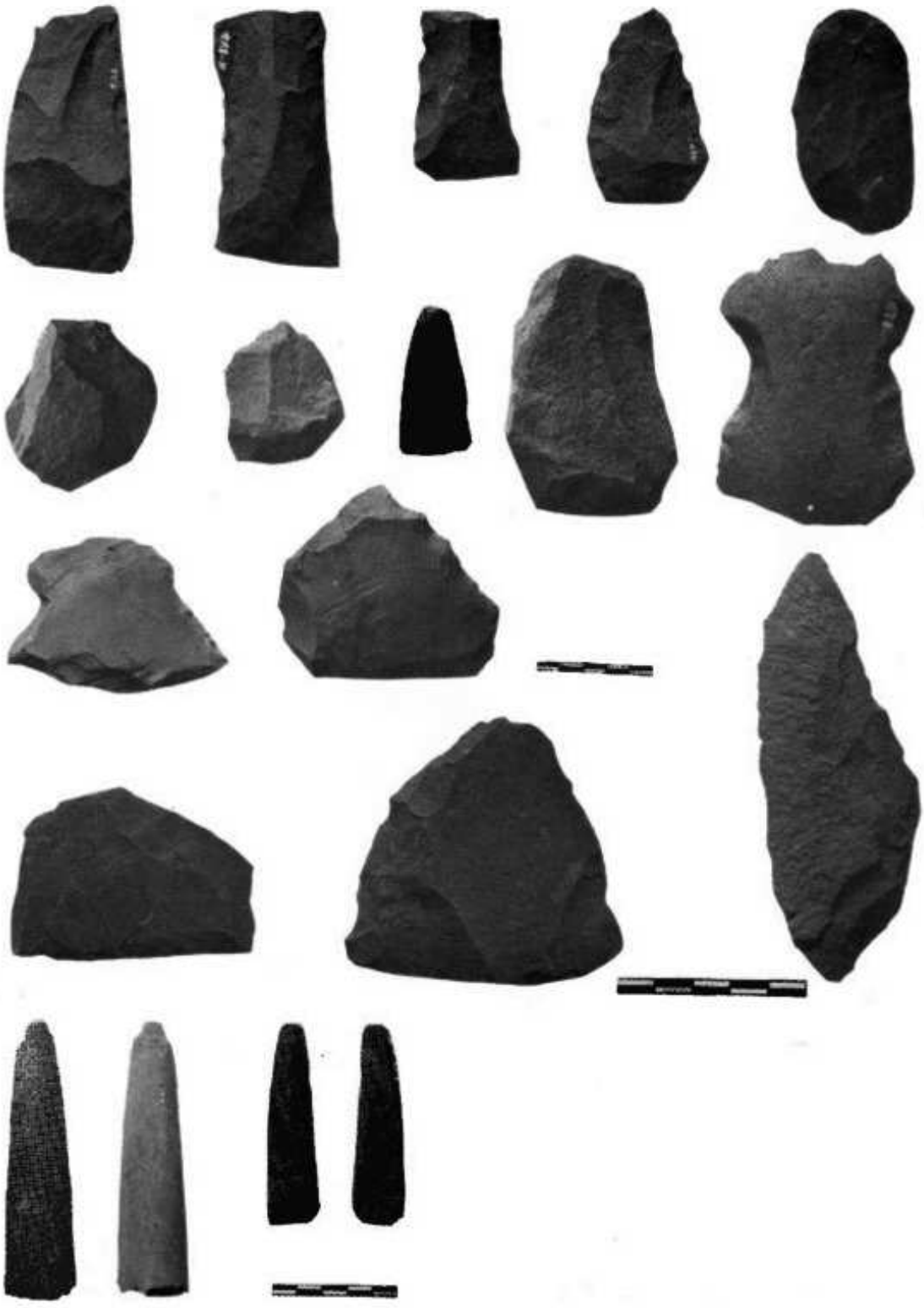
図版19　土製品及び土器



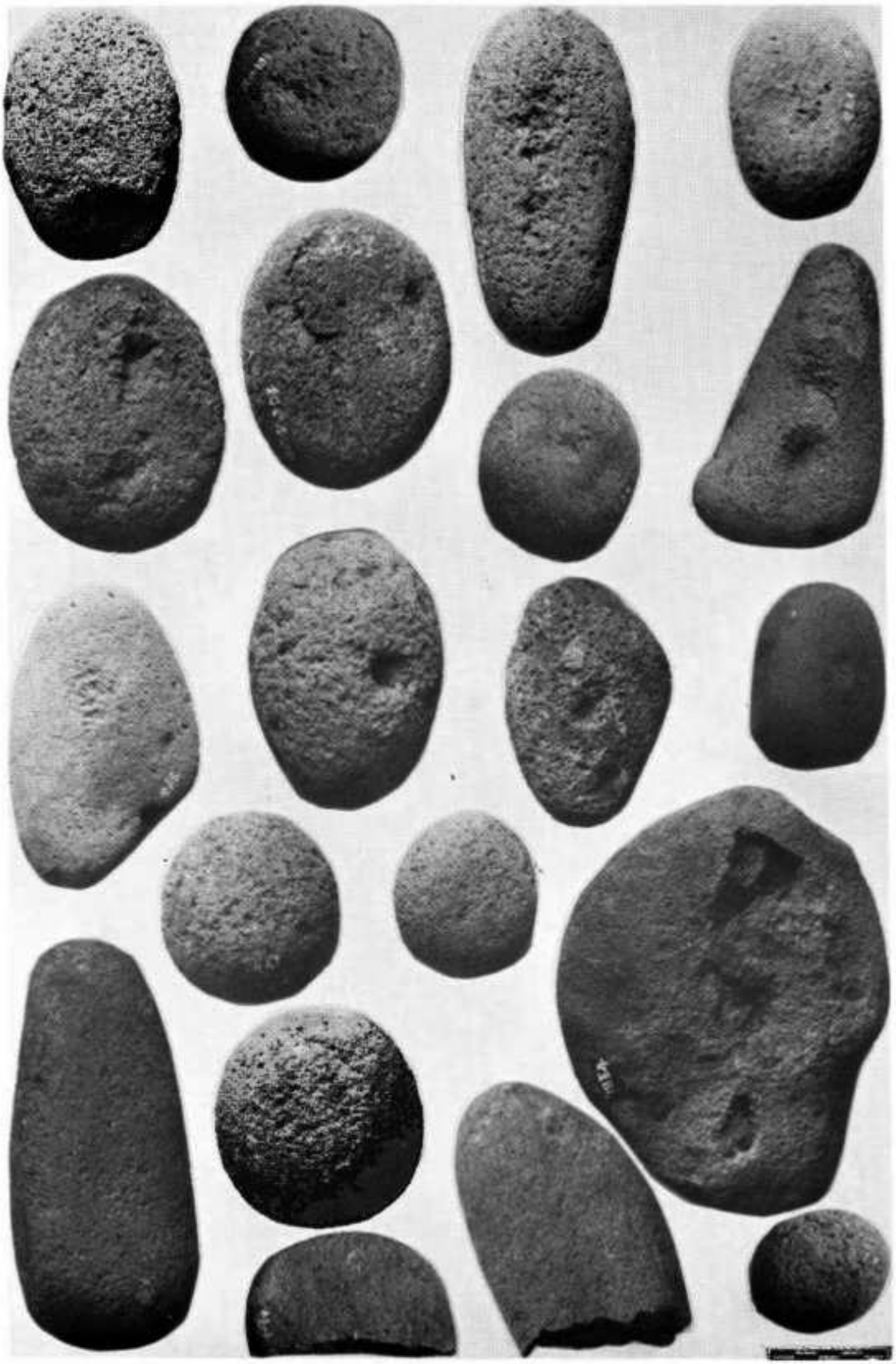
図版20　土製円盤



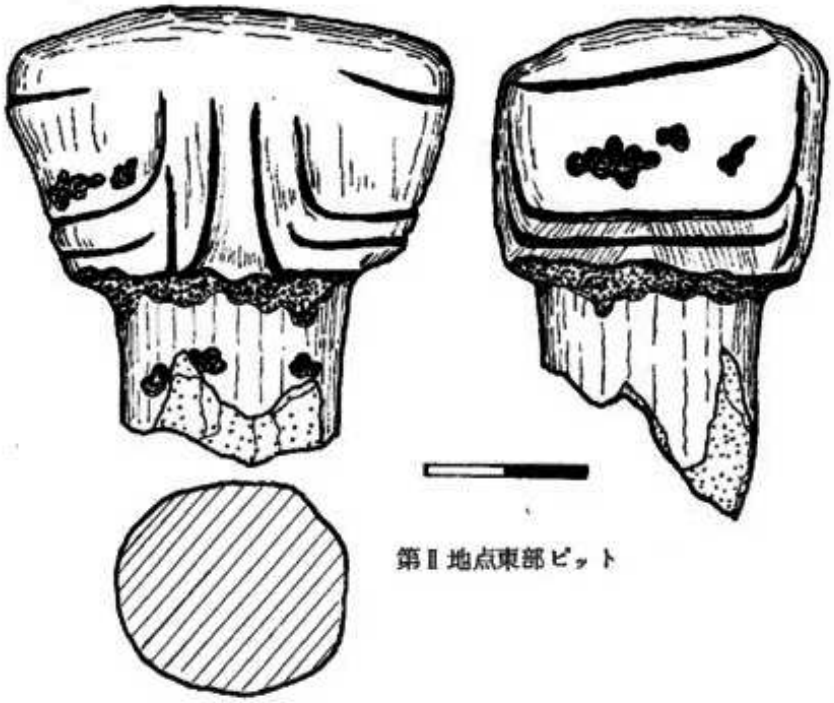
図版 21　石 器 （その 1）（石鏃・石錐・石槍・他）



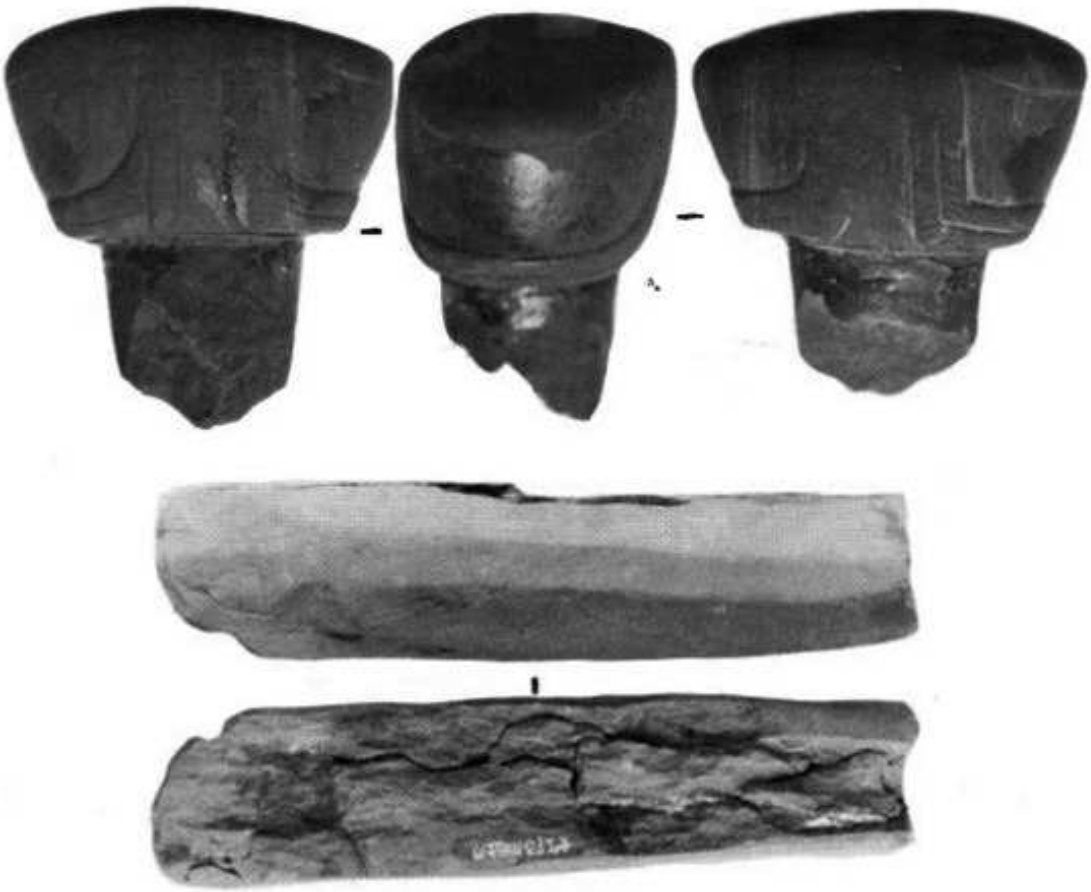
図版 22　石 器 （その 2）（打製石斧・摩製石斧・他）



図版23　石器（その3）（凹石・磨石）

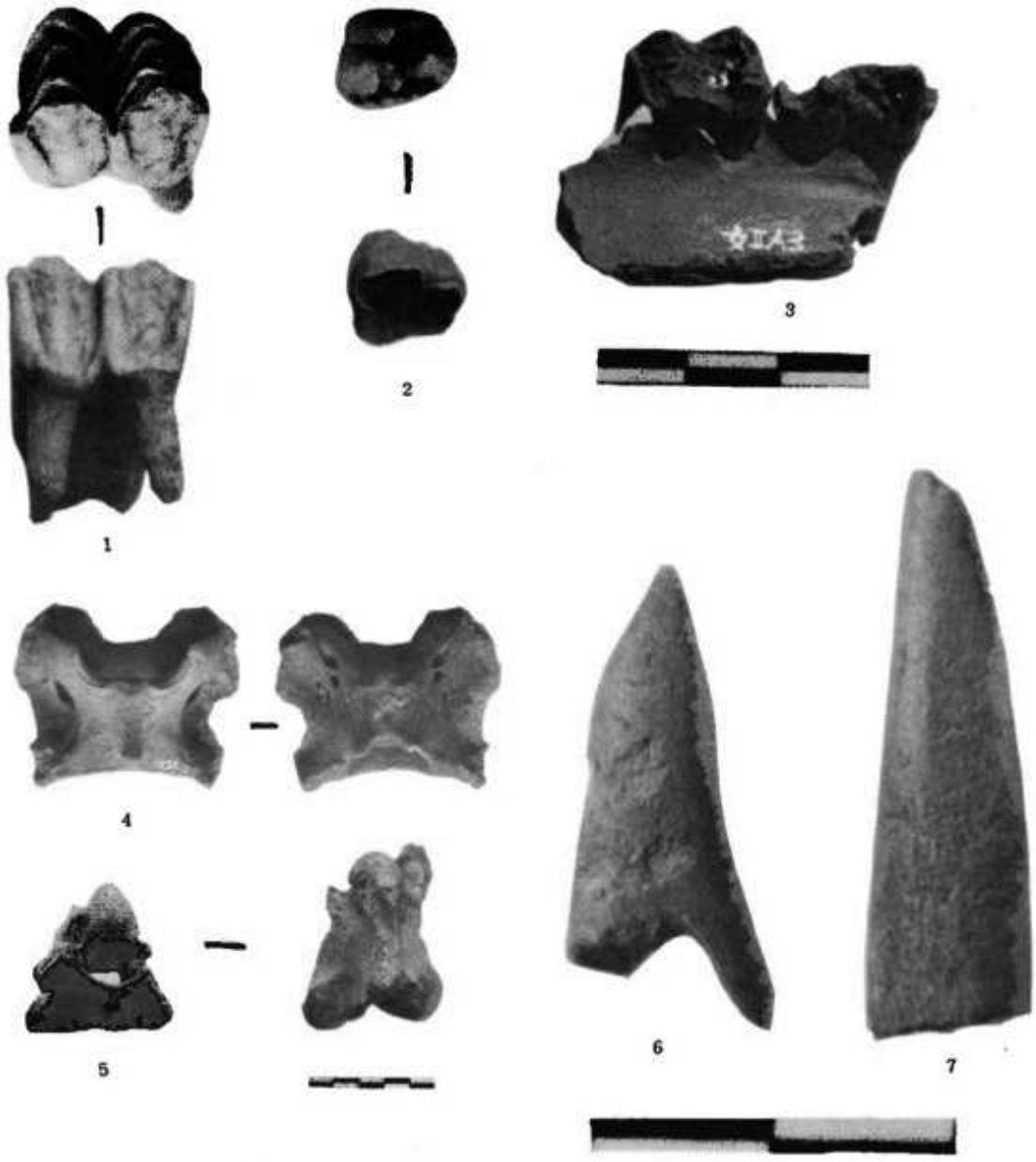


第Ⅱ地点東部ピット

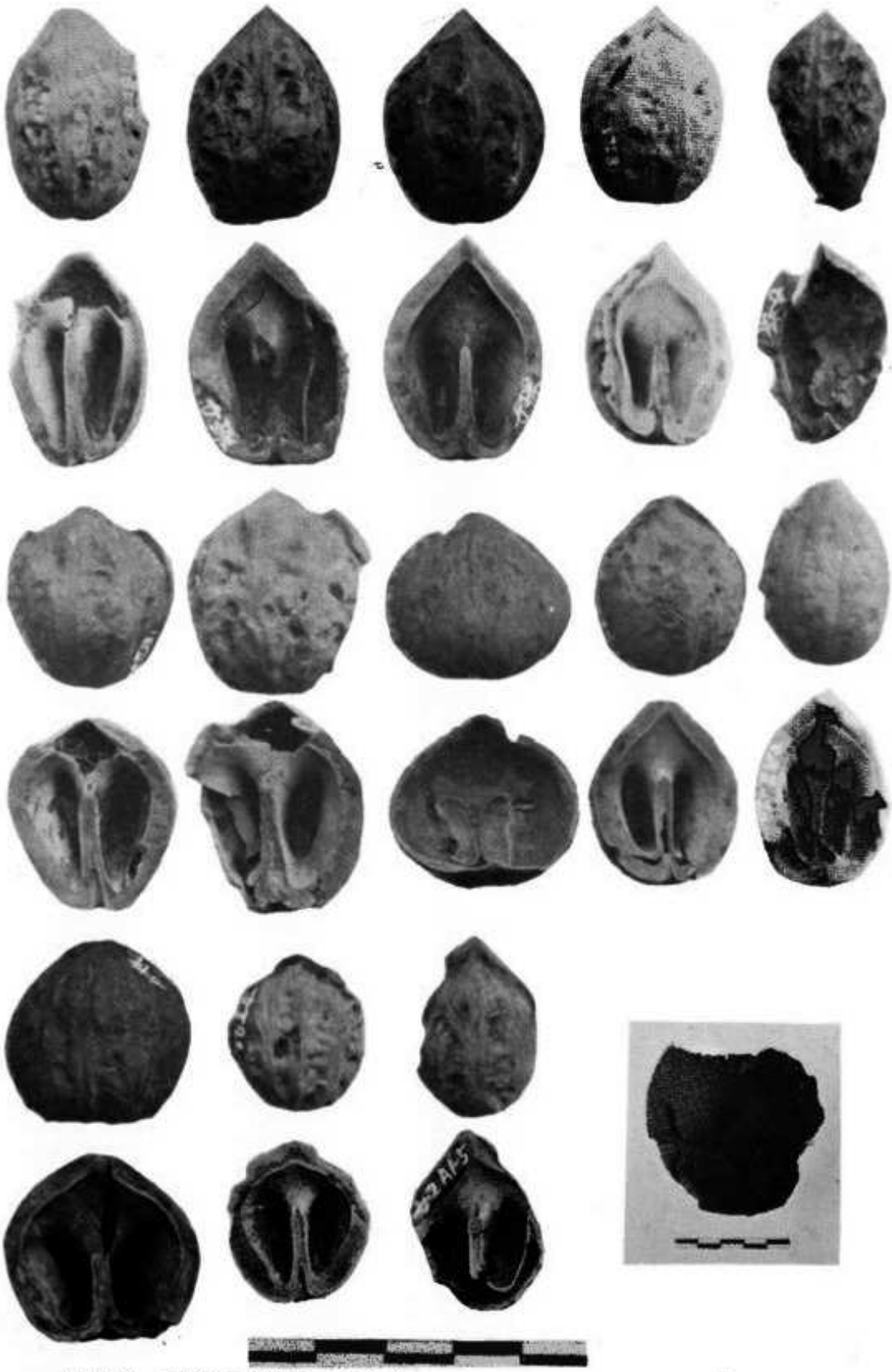


図版24　石器（その4）（石刀・砥石）

図版25　動物遺体（その1）（獣骨・獣角）



図版 26　動物遺体（その 2）（骨角器）



図版27　自然遺物（クルミ・ヒサゴ）